

Hitachi Command Suite

# Compute Systems Manager

ユーザーズガイド

3021-9-096-70

## 対象製品

Hitachi Compute Systems Manager 8.5.0

適用 OS の詳細については「ソフトウェア添付資料」でご確認ください。

## 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

## 商標類

HITACHI, JP1 は、株式会社日立製作所の商標または登録商標です。

Active Directory は、米国 Microsoft Corporation の、米国およびその他の国における登録商標または商標です。

ActiveX は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft .NET は、お客様、情報、システムおよびデバイスを繋ぐソフトウェアです。

Microsoft および Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

This product includes software developed by the Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>).

This product includes software developed by IAIK of Graz University of Technology.

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

RSA および BSAFE は、米国 EMC コーポレーションの米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Shockwave は、Adobe Systems Incorporated (アドビシステムズ社) の米国ならびに他の国における商標または登録商標です。

SUSE は、米国およびその他の国における SUSE LLC の登録商標または商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

Hitachi Compute Systems Manager には、日本電気株式会社が著作権を有している部分が含まれています。

Hitachi Compute Systems Manager は、米国 EMC コーポレーションの RSA BSAFE<sup>®</sup> ソフトウェアを搭載しています。

This product includes software developed by Ben Laurie for use in the Apache-SSL HTTP server project.

Portions of this software were developed at the National Center for Supercomputing Applications (NCSA) at the University of Illinois at Urbana-Champaign.

This product includes software developed by the University of California, Berkeley and its contributors.

This software contains code derived from the RSA Data Security Inc. MD5 Message-Digest Algorithm, including various modifications by Spyglass Inc., Carnegie Mellon University, and Bell Communications Research, Inc (Bellcore).

Regular expression support is provided by the PCRE library package, which is open source software, written by Philip Hazel, and copyright by the University of Cambridge, England. The original software is available from <ftp://ftp.csx.cam.ac.uk/pub/software/programming/pcre/>

This product includes software developed by Ralf S. Engelschall <[rse@engelschall.com](mailto:rse@engelschall.com)> for use in the mod\_ssl project (<http://www.modssl.org/>).

This product includes software developed by Daisuke Okajima and Kohsuke Kawaguchi (<http://relaxngcc.sf.net/>).

This product includes software developed by the Java Apache Project for use in the Apache JServ servlet engine project (<http://java.apache.org/>).

This product includes software developed by Andy Clark.

Java is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

**HITACHI**  
Inspire the Next

株式会社 日立製作所



**発行**

2016年10月 3021-9-096-70

**著作権**

All Rights Reserved. Copyright © 2014, 2016, Hitachi, Ltd.



# 目次

はじめに.....	15
対象読者.....	16
マニュアルの構成.....	16
マイクロソフト製品の表記について.....	16
このマニュアルで使用している記号.....	17
<b>1. Compute Systems Manager の概要.....</b>	<b>19</b>
1.1 Compute Systems Manager とは.....	20
1.2 システムの構成要素.....	20
1.3 Compute Systems Manager の運用を開始する作業フロー.....	21
1.3.1 Compute Systems Manager の運用全体の流れ.....	21
1.3.2 運用を始める前の準備の流れ.....	22
1.3.3 管理対象を登録する流れ.....	23
1.3.4 管理対象にアクセス制御を設定する流れ.....	25
1.4 管理対象を操作・監視する作業フロー.....	26
1.4.1 電源を管理する流れ.....	26
1.4.2 N+M コールドスタンバイを設定・運用する流れ.....	27
1.4.3 デプロイメントマネージャーを設定・運用する流れ.....	28
1.4.4 管理対象を監視する流れ.....	29
1.5 管理対象の保守に使用する機能.....	31
1.6 管理クライアントのウィンドウ構成.....	32
1.6.1 メインウィンドウの構成要素.....	32
1.6.2 グローバルタスクバーエリアとは.....	33
1.6.3 グローバルタブエリアとは.....	33
1.6.4 検索ボックスとは.....	33
1.6.5 ナビゲーションエリアとは.....	33
1.6.6 アプリケーションエリアとは.....	34
1.6.7 グローバルモニタリングエリアとは.....	34
1.6.8 ヘルプを使う.....	35
<b>2. 初期設定.....</b>	<b>37</b>
2.1 初期設定とは.....	38
2.2 Web ブラウザーの設定.....	38
2.2.1 Web ブラウザーの設定とは.....	39
2.2.2 Internet Explorer を設定する.....	39
2.2.3 Firefox を設定する.....	40
2.2.4 Google Chrome を設定する.....	41
2.3 ライセンスの管理.....	41

2.3.1 ライセンスの管理とは.....	41
2.3.2 ライセンスを登録する.....	42
2.3.3 ライセンスの状態を確認する.....	42
2.4 Compute Systems Manager へのログイン.....	42
2.4.1 Compute Systems Manager へログインする.....	43
2.4.2 Compute Systems Manager からログアウトする.....	43
2.5 E メール通知の設定.....	43
2.5.1 E メール通知の設定とは.....	43
2.5.2 E メール通知を設定する.....	44
2.6 CLI のダウンロード.....	44
2.6.1 CLI のダウンロードとは.....	44
2.6.2 CLI をダウンロードする.....	45
2.7 警告バナーの設定.....	45
2.7.1 警告バナーの設定とは.....	45
2.7.2 警告バナーのメッセージを設定する.....	45
2.8 管理対象サーバと SSL 通信するよう設定する.....	46
2.9 Device Manager との接続を設定する.....	46
<b>3. 管理対象の登録.....</b>	<b>49</b>
3.1 管理対象の登録の概要.....	50
3.1.1 リソースの探索とは.....	50
3.1.2 管理対象リソースの種別とは.....	50
3.1.3 管理対象の認証情報とは.....	51
3.2 リソースの探索.....	51
3.2.1 ホストを探索するための確認事項.....	51
3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項.....	52
3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項.....	53
3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項.....	53
3.2.5 リソースの認証情報を登録する.....	54
3.2.6 リソースを探索する.....	54
3.3 リソースの管理対象への追加.....	55
3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは.....	55
3.3.2 ホストを管理対象にする.....	56
3.3.3 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象にする.....	56
3.3.4 ブレードサーバとシャーシを管理対象にする.....	57
3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する.....	57
3.3.6 ラックマウントサーバを管理対象にする.....	58
3.3.7 ホストを管理対象から外す.....	58
3.3.8 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象から外す.....	58
3.3.9 ブレードサーバとシャーシを管理対象から外す.....	59
3.3.10 ブレードサーバを論理分割の対象から削除する.....	59
3.3.11 ラックマウントサーバを管理対象から外す.....	60
3.4 論理分割の設定.....	60
3.4.1 論理分割の設定とは.....	60
3.4.2 論理分割を設定する.....	61
3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する.....	61
3.4.4 USB 自動アタッチ設定を変更する.....	62
3.4.5 HVM の構成情報を参照する.....	63
3.4.6 LPAR を作成する.....	63
3.4.7 LPAR の設定を変更する.....	64
3.4.8 LPAR を一括で作成する.....	65
3.4.9 LPAR にホストを作成する手順の概要.....	66
3.4.10 LPAR にホストを作成するための確認事項.....	67
3.4.11 LPAR にホストを作成する.....	67

3.5 リソース情報の削除.....	68
3.5.1 リソース情報の削除とは.....	68
3.5.2 データベースからホストの情報を削除する.....	68
3.5.3 データベースからハイパーバイザーと仮想マシンの情報を削除する.....	69
3.5.4 データベースからブレードサーバとシャーシの情報を削除する.....	69
3.5.5 データベースからラックマウントサーバの情報を削除する.....	70
4. 管理対象の操作.....	71
4.1 電源管理.....	72
4.1.1 電源管理とは.....	72
4.1.2 電源を管理するための確認事項.....	73
4.1.3 BMC を設定する.....	74
4.1.4 電源管理のタイムアウト時間を設定する.....	75
4.1.5 ホストの電源を ON にする.....	75
4.1.6 ホストをシャットダウンする.....	76
4.1.7 ホストの電源を強制的に OFF にする.....	76
4.1.8 ホストをリブートする.....	77
4.1.9 仮想マシンの電源を ON にする.....	77
4.1.10 仮想マシンをリセットする.....	78
4.1.11 仮想マシンの電源を強制的に OFF にする.....	79
4.1.12 サーバの電源を ON にする.....	79
4.1.13 サーバをリセットする.....	80
4.1.14 サーバの電源を強制的に OFF にする.....	81
4.1.15 HVM をシャットダウンする.....	81
4.1.16 HVM を再起動する.....	82
4.1.17 LPAR を起動する.....	82
4.1.18 LPAR を停止する.....	83
4.1.19 LPAR を再起動する.....	83
4.1.20 ホストの電源管理のスケジュール設定例.....	84
4.1.21 サーバの電源管理のスケジュール設定例.....	86
4.2 ランプ操作.....	91
4.2.1 ランプ操作とは.....	92
4.2.2 シャーシのランプを操作する.....	92
4.2.3 シャーシのモジュールのランプを操作する.....	92
4.2.4 サーバのランプを操作する.....	93
4.3 N+M コールドスタンバイの設定と運用.....	93
4.3.1 N+M コールドスタンバイとは.....	93
4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項.....	94
4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する.....	95
4.3.4 N+M コールドスタンバイグループにブレードを追加する.....	96
4.3.5 N+M コールドスタンバイグループからブレードを削除する.....	97
4.3.6 予備ブレードを手動で診断する.....	97
4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする.....	98
4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する.....	98
4.3.9 予備ブレードから現用ブレードに切り戻す.....	99
4.3.10 予備ブレードを現用ブレードに変更する.....	99
4.3.11 現用ブレードを予備ブレードに手動で切り替える.....	100
4.3.12 切り替えに失敗したブレードの状態を元に戻す.....	100
4.4 LPAR のマイグレーション.....	101
4.4.1 LPAR のマイグレーションとは.....	101
4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項.....	102
4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする.....	102
4.4.4 停止している LPAR をマイグレーションする.....	103
4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする.....	103
4.4.6 LPAR のマイグレーションの失敗を復旧する.....	104

4.4.7	コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する	105
4.5	電力キャッピング	105
4.5.1	電力キャッピングとは	105
4.5.2	シャーシの電力キャッピングを有効にする	106
4.5.3	シャーシの電力キャッピングを無効にする	106
4.5.4	ラックマウントサーバの電力キャッピングを有効にする	107
4.5.5	ラックマウントサーバの電力キャッピングを無効にする	108
4.5.6	電力キャッピングのスケジュール例	108
4.6	タスク管理	110
4.6.1	タスク管理とは	110
4.6.2	タスクの状態を確認する	111
4.6.3	タスクのスケジュールを変更する	112
4.6.4	実行中のタスクをキャンセルする	112
4.6.5	エラー終了したタスクを履歴に移動する	112
4.6.6	タスクを削除する	113
4.7	関連ソフトウェアと連携する場合の管理対象の操作	113
4.7.1	管理対象を操作できる関連ソフトウェアとは	113
4.7.2	Web コンソールで管理対象に接続する	114
4.7.3	Web リモート KVM で管理対象に接続する	114
4.7.4	LPAR の USB アタッチとは	114
4.7.5	LPAR に USB をアタッチする	115
4.7.6	LPAR から USB をデタッチする	115
4.8	VMM と連携する場合の仮想リソースの操作	115
4.8.1	VMM との接続を設定する	116
4.8.2	VMM と連携して仮想リソースを操作する	116
4.9	デプロイメントマネージャーの設定と運用	116
4.9.1	デプロイメントマネージャーとは	116
4.9.2	デプロイメントマネージャーを使用するための確認事項	117
4.9.3	デプロイメントマネージャーを設定する	118
4.9.4	管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加する	118
4.9.5	管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する	119
4.9.6	管理対象リソースのディスク構成をチェックする	119
4.9.7	管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする	120
4.9.8	管理対象リソースにディスクのデータをリストアする	120
4.9.9	イメージファイルを管理する	121
4.9.10	デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは	121
4.9.11	管理対象リソースから固有情報を削除するツールをダウンロードする	123
4.9.12	管理対象リソースのスナップショットを取得する	123
4.9.13	デプロイメントプレートを設定する	124
4.9.14	マスターイメージをデプロイする	124
4.10	ファームウェアの更新	125
4.10.1	ファームウェアの更新とは	125
4.10.2	シャーシのファームウェアを更新する	125
4.10.3	ブレードサーバのファームウェアを更新する	126
5.	稼働監視とアラート管理	127
5.1	アラートの設定	128
5.1.1	アラートの設定とは	128
5.1.2	SNMP トラップの受信設定とは	129
5.1.3	SNMP トラップの受信を有効にする	129
5.1.4	SNMP トラップをアラートに関連づける	130
5.1.5	MIB ファイルで定義されている SNMP トラップを確認する	130
5.1.6	MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップを登録する	131
5.1.7	E メールで通知するアラートレベルを設定する	131
5.1.8	アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定とは	132



5.1.9	アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Windows)	132
5.1.10	アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Linux)	134
5.1.11	アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する	135
5.1.12	アラート情報を JP1/IM に通知するよう設定する	136
5.1.13	性能情報のしきい値を設定する	137
5.1.14	アラートの保持件数を変更する	137
5.2	管理対象の稼働状況の確認	137
5.2.1	サマリー情報の参照とは	138
5.2.2	ダッシュボードで管理対象の状態を監視する	139
5.2.3	ダッシュボードをカスタマイズする	139
5.2.4	ダッシュボードに表示される性能レポートをカスタマイズする	140
5.2.5	グローバルモニタリングエリアからタスクの状態を確認する	140
5.2.6	タスクの集計期間を設定する	140
5.2.7	ハイパーバイザー上のリソースの構成や関連を参照する	141
5.2.8	仮想マシンの構成や関連を参照する	141
5.2.9	HVM 上の LPAR の構成を参照する	141
5.2.10	LPAR の構成や関連を参照する	141
5.2.11	ホストの情報を参照する	142
5.2.12	ハイパーバイザーの情報を参照する	142
5.2.13	仮想マシンの情報を参照する	142
5.2.14	シャーシの情報を参照する	143
5.2.15	サーバの情報を参照する	143
5.2.16	LPAR の情報を参照する	144
5.2.17	ストレージシステムの一覧を参照する	144
5.2.18	管理対象の情報の更新とは	145
5.2.19	ホストの情報を更新する	145
5.2.20	ハイパーバイザーの情報を更新する	146
5.2.21	仮想マシンの情報を更新する	146
5.2.22	シャーシの情報を更新する	146
5.2.23	サーバの情報を更新する	147
5.2.24	LPAR の情報を更新する	147
5.2.25	管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する	148
5.3	管理対象の性能や消費電力の分析	148
5.3.1	性能情報および電力情報の分析とは	148
5.3.2	性能情報を取得できるようにする	149
5.3.3	電力情報を取得できるようにする	150
5.3.4	性能情報の種類と対象ホストを登録する	150
5.3.5	電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する	151
5.3.6	ホストの性能情報を分析する	151
5.3.7	シャーシの電力情報を分析する	152
5.3.8	ブレードサーバの電力情報を分析する	153
5.3.9	ラックマウントサーバの電力情報を分析する	153
5.3.10	性能情報を削除する	154
5.3.11	電力情報を削除する	154
5.4	CSV 形式での管理対象の情報の出力	155
5.4.1	CSV 形式での管理対象の情報の出力とは	155
5.4.2	管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する	155
5.4.3	ホストの性能情報を CSV 形式で出力する	156
5.4.4	シャーシの電力情報を CSV 形式で出力する	156
5.4.5	サーバの電力情報を CSV 形式で出力する	157
5.5	管理対象のグルーピング	157
5.5.1	論理グループとは	157
5.5.2	論理グループを作成する	159
5.5.3	論理グループを編集する	159
5.5.4	論理グループの情報を参照する	160
5.6	アラートへの対処	160

5.6.1 アラートへの対処とは.....	160
5.6.2 アラートに対処するための確認事項.....	161
5.6.3 アラートに対処する.....	161
5.6.4 アラートに担当者を割り当てる.....	162
5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する.....	162
5.6.6 アラートの一覧を参照する.....	163
5.6.7 アラートを削除する.....	163
<b>6. ユーザー管理と管理対象へのアクセス制御.....</b>	<b>165</b>
6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは.....	166
6.2 ユーザーの管理.....	167
6.2.1 ユーザー管理とは.....	167
6.2.2 ユーザーアカウントを作成する.....	168
6.2.3 User Management 権限を設定する.....	168
6.2.4 ユーザーアカウントのプロファイルを編集する.....	169
6.2.5 自分のプロファイルを編集する.....	169
6.2.6 ユーザーアカウントのパスワードを変更する.....	169
6.2.7 自分のパスワードを変更する.....	170
6.2.8 ユーザーアカウントをロックする.....	170
6.2.9 ユーザーアカウントのロックを解除する.....	170
6.2.10 ユーザーの認証方式を変更する.....	171
6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について.....	171
6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループを登録する.....	172
6.2.13 Compute Systems Manager から認可グループを削除する.....	173
6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する.....	173
6.2.15 Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除する.....	174
6.2.16 パスワードポリシーを設定する.....	175
6.2.17 自動アカウントロックを設定する.....	175
6.3 リソースグループの管理.....	176
6.3.1 リソースグループとは.....	176
6.3.2 リソースグループを作成する.....	176
6.3.3 リソースグループを編集する.....	177
6.4 ユーザーグループの管理.....	177
6.4.1 ユーザーグループとは.....	177
6.4.2 ロールの種類.....	178
6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール.....	179
6.4.4 ユーザーグループを作成する.....	182
6.4.5 ユーザーグループを編集する.....	183
6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる.....	183
6.4.7 ユーザーが属するユーザーグループを変更する.....	184
6.4.8 ユーザーグループまたはユーザーの情報を CSV ファイルに出力する.....	184
<b>7. トラブルシューティング.....</b>	<b>185</b>
7.1 管理対象でのトラブルシューティング.....	186
7.1.1 トラブルシューティングとは.....	186
7.1.2 トラブルシューティング事例.....	186
<b>付録 A このマニュアルの参考情報.....</b>	<b>189</b>
A.1 関連マニュアル.....	190
A.2 このマニュアルでの表記.....	190
A.3 英略語.....	190
A.4 KB（キロバイト）などの単位表記について.....	191
A.5 ディレクトリとフォルダの表記について.....	191

用語解説.....	193
索引.....	197



## 目次

図 1-1 管理対象の稼働状況を監視する作業フロー.....	30
図 1-2 管理対象ホストの性能情報を分析する作業フロー.....	30
図 1-3 管理対象サーバ・シャーシの電力情報を分析する作業フロー.....	31
図 4-1 毎週金曜日の 23:00 にホストをシャットダウンするタスク.....	84
図 4-2 毎週月曜日の 6:00 にホストの電源を ON にするタスク.....	85
図 4-3 毎週金曜日の 23:00 にサーバ上のホストをシャットダウンするタスク.....	86
図 4-4 毎週月曜日の 5:00 にサーバの電源を ON にするタスク.....	87
図 4-5 毎週金曜日の 23:00 に LPAR が稼働していないサーバ上のホストをシャットダウンするタスク.....	88
図 4-6 毎週金曜日の 23:00 に LPAR が稼働している HVM をシャットダウンするタスク.....	89
図 4-7 毎週月曜日の 5:00 にサーバの電源を ON にするタスク.....	90
図 4-8 毎週月曜日の 6:00 に LPAR を起動するタスク.....	91
図 4-9 シャーシ 10 台を選択して月曜日から金曜日の午前 9 時に電力キャッピングを有効にするタスク.....	109
図 4-10 月曜日から金曜日の午後 6 時に、シャーシ 10 台の電力キャッピングを有効から無効にするタスク.....	110





# はじめに

このマニュアルは、Hitachi Compute Systems Manager を使用してリソースを管理する方法について説明しています。

以降、このマニュアルでは、Hitachi Compute Systems Manager を Compute Systems Manager と呼びます。

- 対象読者
- マニュアルの構成
- マイクロソフト製品の表記について
- このマニュアルで使用している記号

# 対象読者

このマニュアルは、次の方を対象としています。

- Compute Systems Manager を使用したサーバ管理システムを構築するシステム管理者の方
  - Compute Systems Manager を使用してサーバを運用および管理するサーバ管理者の方
- 前提 OS に関する基本的な知識があることを前提としています。

# マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章と付録から構成されています。

## 1. Compute Systems Manager の概要

Compute Systems Manager の概要について説明しています。

## 2. 初期設定

Compute Systems Manager を使用する前に、管理クライアント上で事前に完了しておく設定について説明しています。

## 3. 管理対象の登録

管理対象リソースの追加、除外、および論理分割を設定する手順について説明しています。

## 4. 管理対象の操作

管理対象リソースに対して実行できる操作について説明しています。

## 5. 稼働監視とアラート管理

管理対象リソースを監視し、アラートを管理する手順について説明しています。

## 6. ユーザー管理と管理対象へのアクセス制御

ユーザーアカウントの管理と、管理対象リソースに対するアクセス制御の設定について説明しています。

## 7. トラブルシューティング

管理クライアントの問題に関するトラブルシューティングについて説明しています。

## 付録 A. このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報について説明しています。

## 用語解説

Compute Systems Manager を使用するために理解しておきたい用語の意味について解説しています。

# マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記	製品名
ActiveX	ActiveX®
Hyper-V	Microsoft® Hyper-V®
Internet Explorer	Windows® Internet Explorer®
Windows	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。



表記	製品名
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft® Windows® 7</li> <li>• Windows® 8</li> <li>• Windows® 8.1</li> <li>• Windows® 10</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2008</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2008 R2</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2012</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2012 R2</li> <li>• Microsoft® Windows Vista®</li> </ul>
Windows Server 2008	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft® Windows Server® 2008</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2008 R2</li> </ul>
Windows Server 2012	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft® Windows Server® 2012</li> <li>• Microsoft® Windows Server® 2012 R2</li> </ul>

## このマニュアルで使用している記号

このマニュアルでは、次に示す記号を使用しています。

記号	意味
[ ] (角括弧)	<p>GUI 操作の説明 メニュータイトル、メニュー項目、タブ名、およびボタンの名称を示します。メニュー項目を連続して選択する場合は、[ ] を「-」（ハイフン）でつないで説明しています。</p> <p>キー操作の説明 キーの名称を示します。</p>
< > (山括弧)	可変値であることを示します。



# Compute Systems Manager の概要

この章では、Compute Systems Manager の概要について説明します。

- 1.1 Compute Systems Manager とは
- 1.2 システムの構成要素
- 1.3 Compute Systems Manager の運用を開始する作業フロー
- 1.4 管理対象を操作・監視する作業フロー
- 1.5 管理対象の保守に使用する機能
- 1.6 管理クライアントのウィンドウ構成

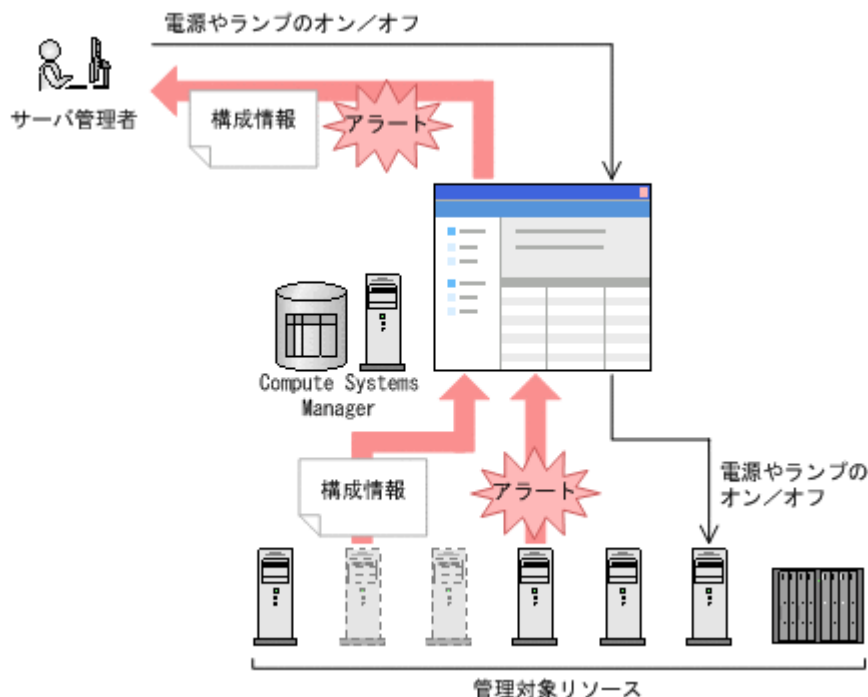
# 1.1 Compute Systems Manager とは

Compute Systems Manager は、大規模なシステム環境下で遠隔地に分散されたサーバの管理・運用を支援するソフトウェアです。

サーバ管理者は、ハードウェアのモデルやサーバの種類（物理または仮想）に関係なく、リソース情報の収集や障害情報のチェック、管理対象リソースの電源管理などのタスクを Web 上のコンソールまたは CLI を使用して実行できます。

リソースの運用は、タスクとして一元管理できます。障害情報はアラートとして表示されるため、複数の管理者が業務を共有している場合や、多くのタスクを並行で実行している場合などでも、管理業務を円滑に進めることができます。

Compute Systems Manager を用いたサーバリソースの管理・運用の仕組みを次の図に示します。システム環境内にある物理リソースは濃い灰色で、仮想リソースは灰色の破線で示しています。



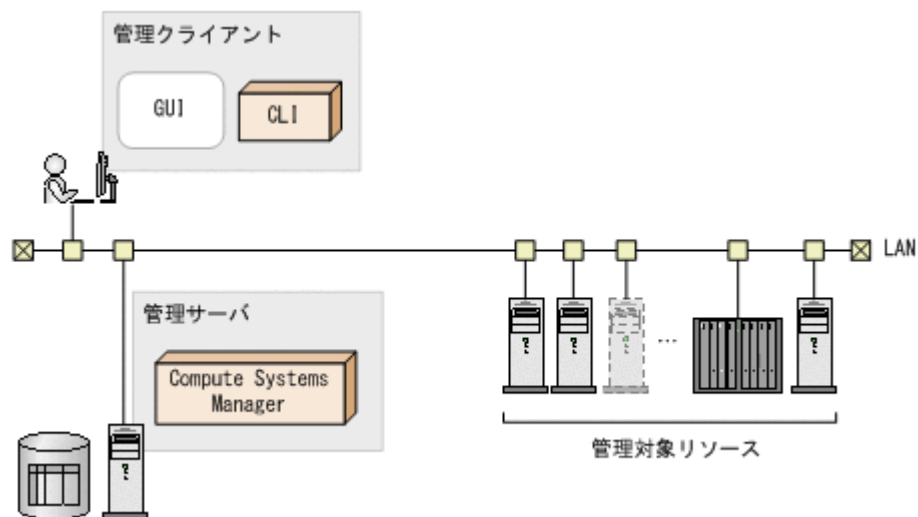
## 1.2 システムの構成要素

Compute Systems Manager を使用したシステムは、次の要素で構成されています。

- 管理サーバ  
Compute Systems Manager をインストールしたマシンです。
- 管理クライアント  
Compute Systems Manager を GUI または CLI で操作する際に使用するマシンです。GUI は Web ブラウザーを使用してアクセスします。CLI を利用するためには、管理クライアントに CLI をインストールする必要があります。
- 管理対象リソース  
Compute Systems Manager で管理されるリソースです。

各要素の詳細については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

Compute Systems Manager を使用したシステム構成を次に示します。



#### 関連項目

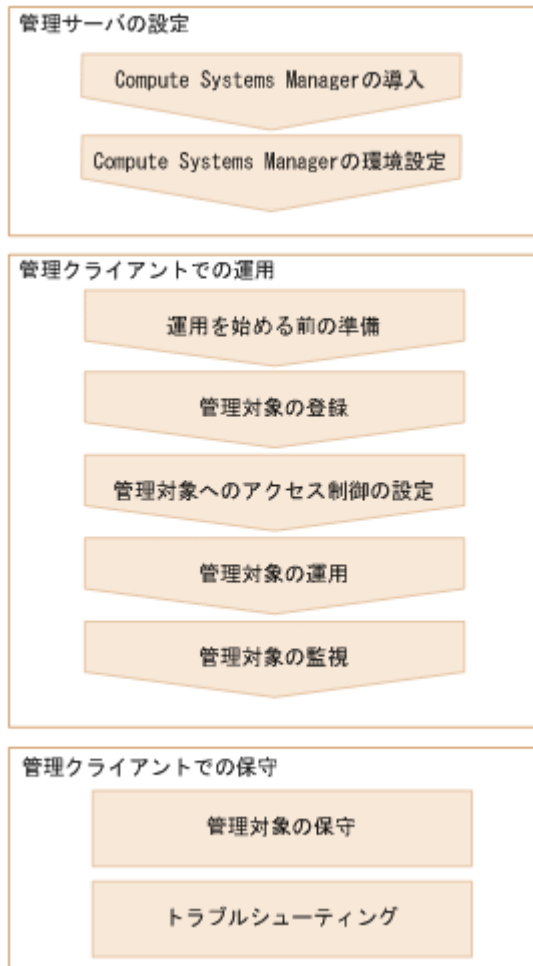
- 1.1 Compute Systems Manager とは
- 2.6.1 CLI のダウンロードとは
- 3.1.2 管理対象リソースの種別とは

## 1.3 Compute Systems Manager の運用を開始する作業フロー

Compute Systems Manager の設定・使用方法について順に説明します。

### 1.3.1 Compute Systems Manager の運用全体の流れ

Compute Systems Manager の導入から運用までの作業フローを次に示します。



このマニュアルでは、管理クライアントでの運用および保守について説明します。

管理サーバでの Compute Systems Manager の導入および環境設定については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

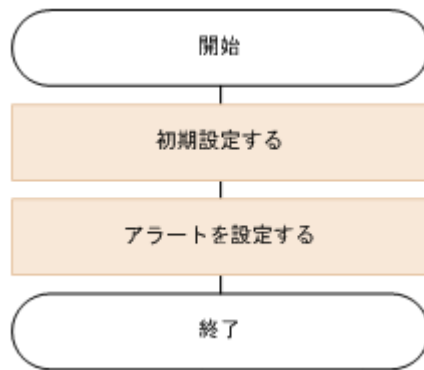
#### 関連項目

- 1.3.2 運用を始める前の準備の流れ
- 1.3.3 管理対象を登録する流れ
- 1.3.4 管理対象にアクセス制御を設定する流れ
- 1.4 管理対象を操作・監視する作業フロー
- 1.4.4 管理対象を監視する流れ
- 1.5 管理対象の保守に使用する機能
- 7.1.1 トラブルシューティングとは

### 1.3.2 運用を始める前の準備の流れ

Compute Systems Manager で運用を開始するために準備作業を実施します。

運用を開始するための準備の作業フローを次に示します。



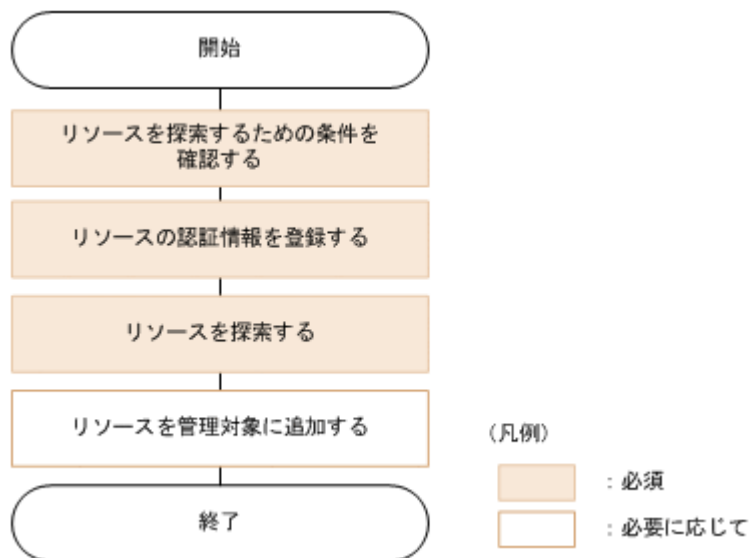
#### 関連項目

- ・ 2.1 初期設定とは
- ・ 5.1.1 アラートの設定とは

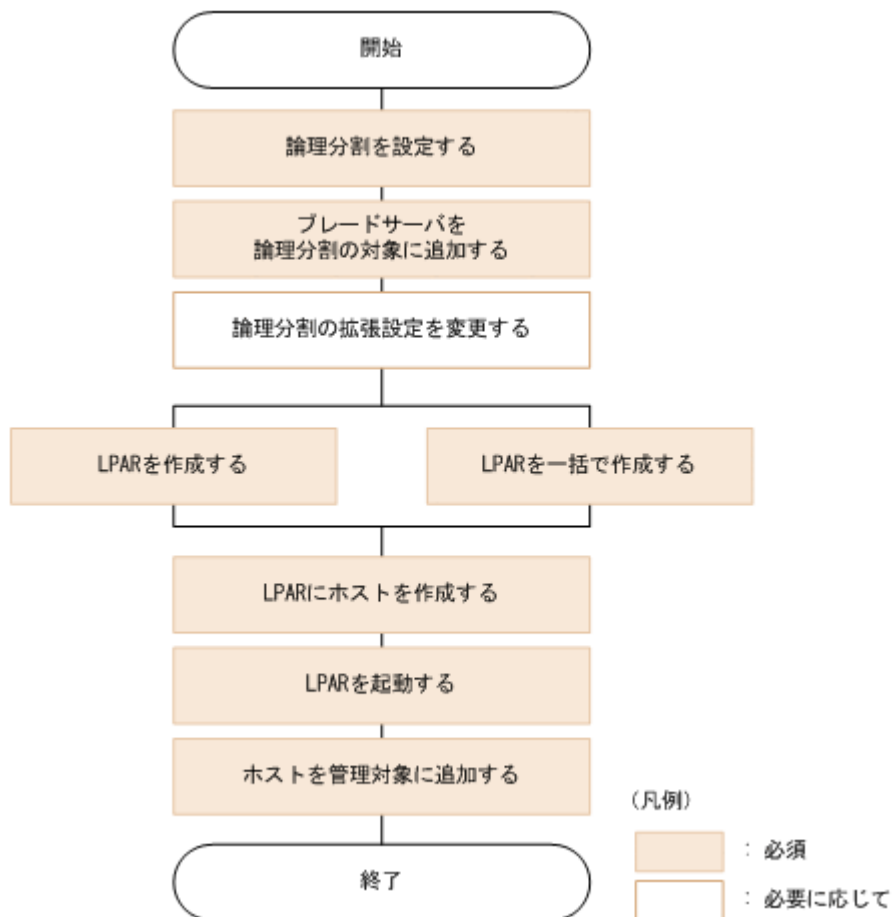
### 1.3.3 管理対象を登録する流れ

リソースを探索して、Compute Systems Manager の管理対象に追加します。

管理対象を登録する作業フローを次に示します。



管理対象ブレードサーバ上に新たに論理分割を設定したあと、LPAR 上にホストを作成し、管理対象として登録する作業フローを次に示します。LPAR 上に作成したホストを管理対象として登録する作業は、上記に示すフローと同様です。



日立製サーバの場合、サーバに OS がインストールされていなくても管理対象に登録できます。サーバに OS をインストールしたあとで、ホストを管理対象として登録することもできます。OS がインストールされていない場合に管理対象に登録する作業フローを次に示します。





重要 管理対象を Compute Systems Manager で探索するための環境設定については、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド」を参照してください。

#### 関連項目

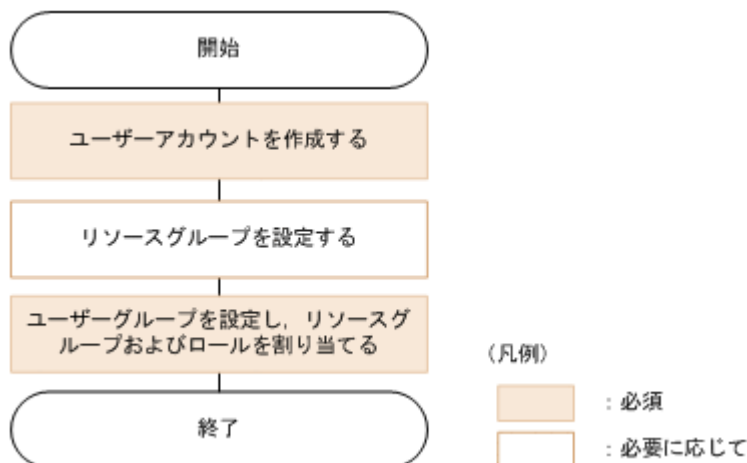
- ・ 3.1.1 リソースの探索とは
- ・ 3.2.5 リソースの認証情報を登録する
- ・ 3.2.6 リソースを探索する
- ・ 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- ・ 3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する
- ・ 3.4.2 論理分割を設定する
- ・ 3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する
- ・ 3.4.6 LPAR を作成する
- ・ 3.4.8 LPAR を一括で作成する
- ・ 3.4.11 LPAR にホストを作成する
- ・ 4.1.17 LPAR を起動する

### 1.3.4 管理対象にアクセス制御を設定する流れ

Compute Systems Manager のユーザーアカウントを作成し、管理対象に対するアクセス制御を設定します。

アクセス制御を設定すると、ユーザーが操作できる管理対象の範囲を制限できます。

ユーザーアカウントを作成し、管理対象に対するアクセス制御を設定する作業フローを次に示します。



#### 関連項目

- ・ 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- ・ 6.3.2 リソースグループを作成する
- ・ 6.4.4 ユーザーグループを作成する
- ・ 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

## 1.4 管理対象を操作・監視する作業フロー

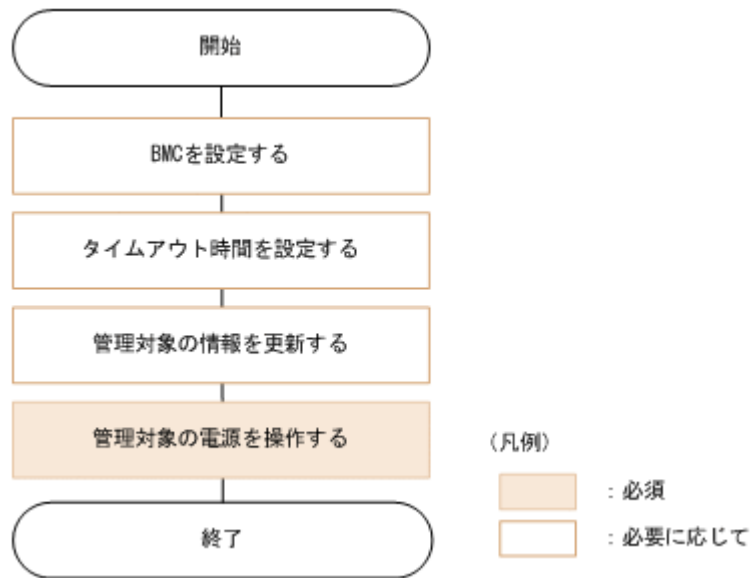
Compute Systems Manager で管理対象を運用するための機能を次に示します。

- ・ 電源管理
- ・ N+M コールドスタンバイ
- ・ デプロイメントマネージャー（管理サーバの OS が Windows の場合）

また、管理対象の稼働状況を監視して、性能情報および電力情報を分析できます。

### 1.4.1 電源を管理する流れ

管理クライアントから管理対象の電源を制御します。管理対象の電源を管理する作業フローを次に示します。



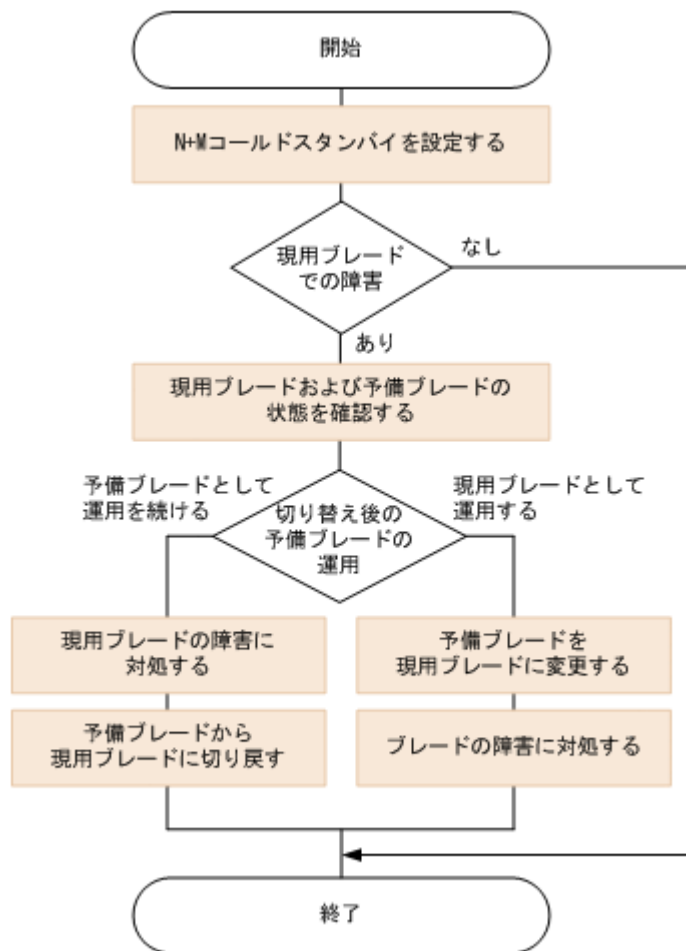
#### 関連項目

- ・ 4.1.1 電源管理とは
- ・ 4.1.3 BMC を設定する
- ・ 4.1.4 電源管理のタイムアウト時間を設定する
- ・ 5.2.18 管理対象の情報の更新とは

## 1.4.2 N+M コールドスタンバイを設定・運用する流れ

N+M コールドスタンバイを使用する前に、必要な情報を指定しておきます。稼働開始後に現用ブレードでエラーが発生した場合、現用ブレードから予備ブレードへの切り替えが実行されたことを確認した上で、エラーに対処します。

N+M コールドスタンバイを設定・運用する作業フローを次に示します。



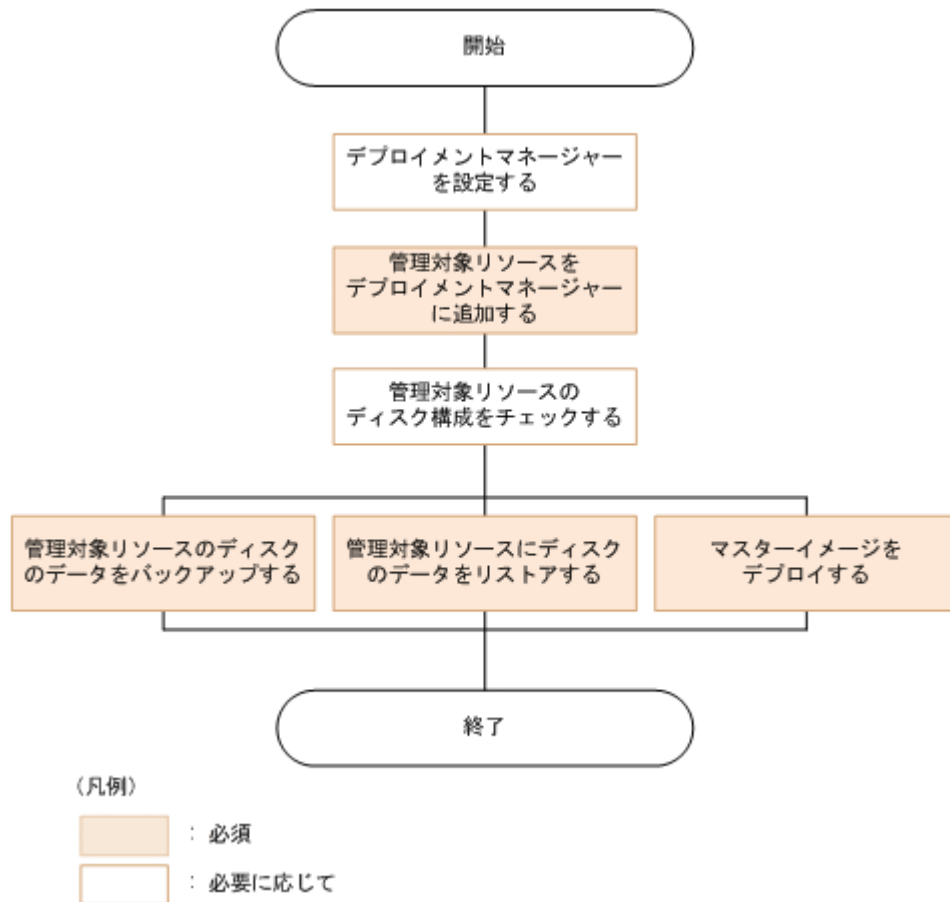
#### 関連項目

- 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは
- 4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する
- 4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する
- 4.3.9 予備ブレードから現用ブレードに切り戻す
- 4.3.10 予備ブレードを現用ブレードに変更する
- 7.1.2 トラブルシューティング事例

### 1.4.3 デプロイメントマネージャーを設定・運用する流れ

デプロイメントマネージャーを使用すると、複数の管理対象リソースのディスクデータをイメージファイルとしてバックアップしたり、リストアしたりできます。また、バックアップしたイメージファイルを使用して、管理対象リソースの環境をほかの管理対象リソースに複製できます。

デプロイメントマネージャーを運用する作業フローを次に示します。



#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する
- 4.9.4 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加する
- 4.9.6 管理対象リソースのディスク構成をチェックする
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは

### 1.4.4 管理対象を監視する流れ

Compute Systems Manager では、管理対象の稼働状況を監視し、性能情報および電力情報を分析できます。

管理対象の監視中にアラートが発生した場合は、アラートに対処したり、別の管理者またはユーザーに対処するタスクを割り当てたりできます。

性能情報のディスク使用率は容量の再割り当てに使用できます。電力情報の分析の結果、管理対象が消費する電力量が許容範囲を超えた場合には、電力キャッピングを有効にして消費電力を抑えることができます。

管理対象の稼働状況の監視、および管理対象の性能・電力情報を分析する作業フローを、次に示します。

図 1-1 管理対象の稼働状況を監視する作業フロー

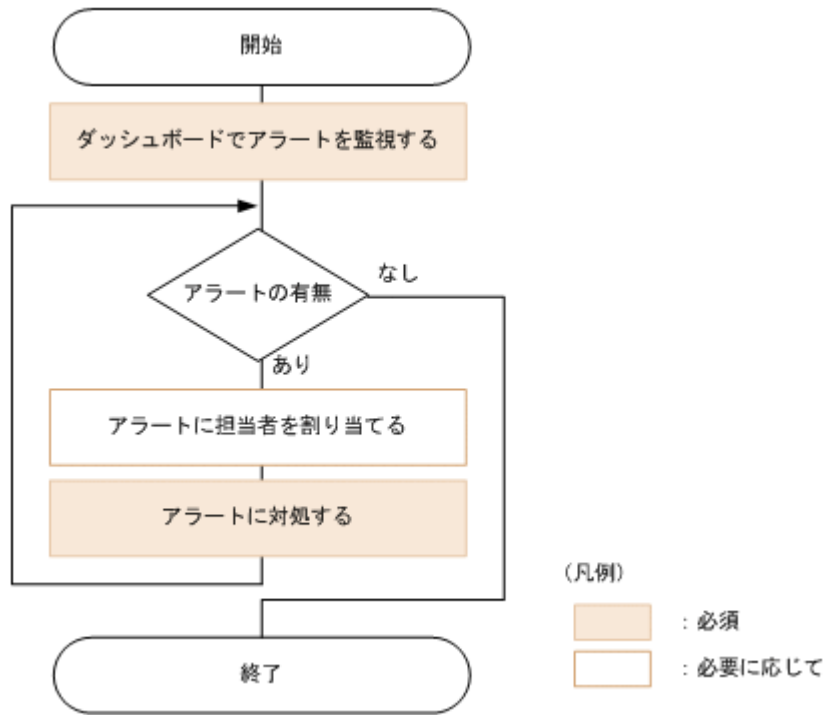


図 1-2 管理対象ホストの性能情報を分析する作業フロー

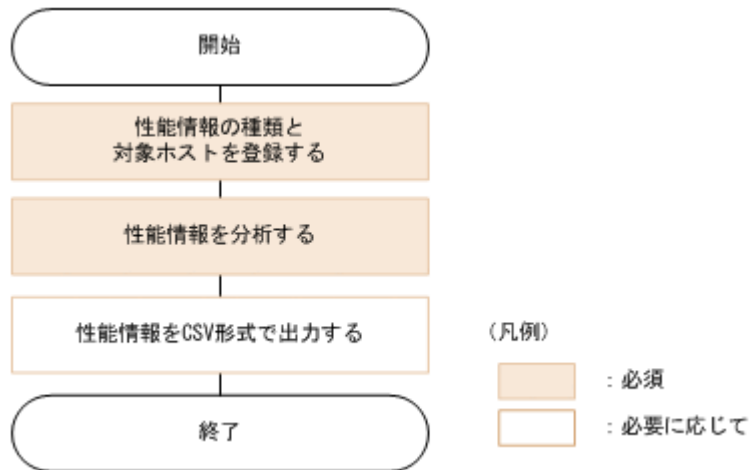
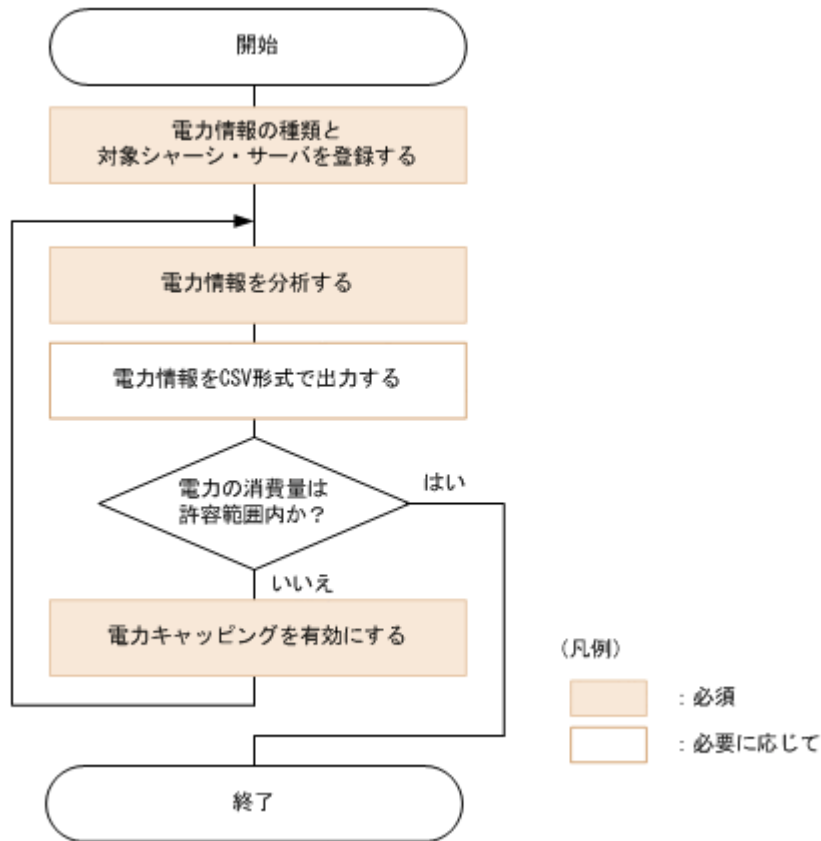


図 1-3 管理対象サーバ・シャーシの電力情報を分析する作業フロー



#### 関連項目

- ・ 4.5.1 電力キャッピングとは
- ・ 5.2.1 サマリー情報の参照とは
- ・ 5.2.2 ダッシュボードで管理対象の状態を監視する
- ・ 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- ・ 5.4.1 CSV 形式での管理対象の情報の出力とは
- ・ 5.6.1 アラートへの対処とは
- ・ 5.6.3 アラートに対処する
- ・ 5.6.4 アラートに担当者を割り当てる

## 1.5 管理対象の保守に使用する機能

Compute Systems Manager で管理対象を保守するための機能を次に示します。

- ・ ランプ (LID) 操作
- ・ LPAR のマイグレーション
- ・ ファームウェアの更新

#### 関連項目

- ・ 4.2.1 ランプ操作とは
- ・ 4.4.1 LPAR のマイグレーションとは

- ・ 4.10.1 ファームウェアの更新とは

## 1.6 管理クライアントのウィンドウ構成

管理クライアントの GUI を使用すると、管理対象リソースやタスク、アラート、管理機能へのアクセスが容易になります。

### 1.6.1 メインウィンドウの構成要素

Compute Systems Manager のメインウィンドウは、次に示すエリアで構成されています。

- ・ グローバルタスクバーエリア
- ・ グローバルタブエリア
- ・ 検索ボックス
- ・ ナビゲーションエリア
- ・ グローバルモニタリングエリア
- ・ アプリケーションエリア
- ・ ヘルプ

メインウィンドウを次に示します。

グローバルタスクバーエリア



#### 関連項目

- ・ 1.6.2 グローバルタスクバーエリアとは
- ・ 1.6.3 グローバルタブエリアとは
- ・ 1.6.4 検索ボックスとは
- ・ 1.6.5 ナビゲーションエリアとは
- ・ 1.6.6 アプリケーションエリアとは



- 1.6.7 グローバルモニタリングエリアとは
- 1.6.8 ヘルプを使う

## 1.6.2 グローバルタスクバーエリアとは

Compute Systems Manager のグローバルタスクバーエリアには、Compute Systems Manager のメニュー、ログイン中のユーザーの名前、および前回ログインした日時が表示されます。さらに、このエリアからは、ヘルプの表示、ほかの Hitachi Command Suite 製品へのアクセス、矢印ボタンを使用した閲覧済み画面間での移動、ログアウトなどの操作ができます。

### 関連項目

- 1.6.1 メインウィンドウの構成要素

## 1.6.3 グローバルタブエリアとは

Compute Systems Manager のグローバルタブエリアには、次のタブが表示されます。

- [ダッシュボード] タブ  
管理対象リソース、未解決のアラート、そのほかの任意に定義できる項目についてのサマリー情報が表示されます。
- [リソース] タブ  
管理対象リソースの構成についての情報が表示されます。
- [タスク & アラート] タブ  
タスク管理およびアラート管理にアクセスできます。
- [管理] タブ  
ユーザーおよびリソース管理、イベント自動処理、性能と電力監視設定などのシステム設定にアクセスできます。

### 関連項目

- 1.6.1 メインウィンドウの構成要素
- 5.2.3 ダッシュボードをカスタマイズする

## 1.6.4 検索ボックスとは

検索ボックスにキーワード（または単語）を入力すると、そのキーワードを含む管理対象リソースまたは論理グループ名が検索結果に表示されます。

探しているリソースが見つからない場合、検索結果ダイアログでリソース種別や論理グループを指定して検索結果を絞り込むか、異なる検索条件を指定します。

### 関連項目

- 1.6.1 メインウィンドウの構成要素

## 1.6.5 ナビゲーションエリアとは

Compute Systems Manager のナビゲーションエリアには、グローバルタブエリアで選択したタブに応じて管理対象リソース、タスク、アラート、ユーザー設定の階層がツリービューで表示されます。ナビゲーションエリアで項目を展開すると、一段階下のオブジェクトを選択したり、アプリケーションエリアにオブジェクトの情報を表示したりできます。

[リソース] タブには、リソースの探索や更新など、よく使うタスクへのショートカットも表示されます。

#### 関連項目

- 1.6.1 メインウィンドウの構成要素

## 1.6.6 アプリケーションエリアとは

Compute Systems Manager のアプリケーションエリアには、ナビゲーションエリアで選択したオブジェクトの詳細情報が表示されます。

アプリケーションエリア内の表でできる操作について説明します。

- 行を選択する

チェックボックス（選択できる行が 1 つの場合はラジオボタン）または行をクリックすると、その行が選択されます。[Shift] キーを押しながら行をクリックすることで、連続した複数の行を選択できます。一覧内の全項目を選択するには、タイトル行のチェックボックス、または [すべて選択] をクリックします。



**重要** 行内のリンクをクリックすると、オブジェクトが選択されます。行を選択する場合は、リンク以外の任意の場所をクリックしてください。

- 行を並び替える  
列の見出しをクリックすると、その列で昇順または降順に並び替えられます。
- 行をフィルタリングする
  - 行をフィルタリングするには、[フィルタ] ボタンをクリックして、属性や値を選択します。フィルタリング属性を追加するには [ + ] ボタンを、削除するには [ - ] ボタンを使用します。
  - フィルタリングを有効にするには [オン] ボタンを、無効にするには [オフ] ボタンをクリックします。
  - 表示された一覧にフィルタ条件を適用するには、[適用] ボタンを使用します。また、フィルタ条件をリセットするには [元に戻す] ボタンを、フィルタ条件を消去するには [消去] ボタンを使用します。
- 列を表示・非表示にする  
表示したい列を指定するには、[列の表示・非表示] ボタンをクリックします。
- 列を並べ替える  
列の順序を変更するには、列の見出しをドラッグして移動させたい位置にドロップします。
- セルまたは行をコピーする  
セルまたは行をコピーするには、選択したいセルまたは行を右クリックし、ドロップダウンメニューから [このセルをコピー] または [選択行をコピー] を選択します。

#### 関連項目

- 1.6.1 メインウィンドウの構成要素

## 1.6.7 グローバルモニタリングエリアとは

Compute Systems Manager のグローバルモニタリングエリアには、状態別にタスクの件数が表示されます。

次に示す各状態がタスクの件数とともに表示されます。各リンクをクリックすると、その状態にあるタスクの一覧が表示されます。

- 実行待ち
- 実行中
- 完了
- 失敗

#### 関連項目


- [1.6.1 メインウィンドウの構成要素](#)
- [5.2.5 グローバルモニタリングエリアからタスクの状態を確認する](#)


## 1.6.8 ヘルプを使う

ヘルプは、ヘルプを探すためのナビゲーションボタンを表示するメニューバー、目次を表示するナビゲーションペイン、ヘルプの本文を表示するトピックペインから構成されています。

#### ヘルプを表示する

ヘルプは次の方法で表示できます。

- グローバルタスクバーエリアの [ヘルプ] メニューから [オンラインマニュアル] を選択する
- アプリケーションエリアやダイアログボックスの  アイコンをクリックする

 アイコンをクリックした場合は、メニューバーや目次が表示されません。画面左上の [目次を表示] リンクをクリックしてください。

#### トピックを表示する

- ナビゲーションペインに表示された目次から、参照したいトピックを選択してください。トピックを右クリックして表示されるメニューから、[前に戻る] または [先に進む] を選択すると、履歴をたどってトピックを表示できます。
- トピックペインの上部にあるパンくずリストは、表示中のトピックがどの位置にあるかを表しています。リンクをクリックすると、上位の階層のトピックに移動します。
- 表示中のトピックについて、さらに関連する情報を参照したいときは、[関連項目] にあるリンクをクリックしてください。

#### ナビゲーションボタンを使う

- **Contents**  
ブックアイコンをクリックすると、その項目に含まれるトピックの一覧が表示されます。選択したトピックのタイトルはハイライト表示されます。
- **Index**  
索引の一覧を表示します。キーワードを入力すると、一致する索引項目が表示されます。索引項目をクリックすると、トピックが表示されます。
- **Search**  
入力した文字列で全文検索します。複数の単語でも検索できます。検索結果をクリックすると、トピックが表示されます。  
次に示す制限があります。

- 漢字とひらがな、英文字とカタカナなどのように、異なる文字種を組み合わせた単語では正しく検索できません。  
例えば、「空き容量」や「Web ブラウザー」では正しく検索できません。異なる文字種を半角スペースで区切ると検索できます。
- 複数の単語で検索する場合、単語間を全角スペースで区切ると正しく検索できません。半角スペースで区切ってください。

- Glossary

マニュアル内で使用している用語を説明します。

### ヘルプを印刷する

ヘルプを印刷するには、トピック内で右クリックして [印刷] をクリックするか、メニューバーの印刷アイコンをクリックします。

## 初期設定

この章では、Compute Systems Manager を使用する前に、管理クライアント上で事前に完了しておく設定について説明します。

- 2.1 初期設定とは
- 2.2 Web ブラウザーの設定
- 2.3 ライセンスの管理
- 2.4 Compute Systems Manager へのログイン
- 2.5 E メール通知の設定
- 2.6 CLI のダウンロード
- 2.7 警告バナーの設定
- 2.8 管理対象サーバと SSL 通信するよう設定する
- 2.9 Device Manager との接続を設定する

## 2.1 初期設定とは

Compute Systems Manager に初めてログインする場合、システム管理者の E メールアドレスやアラートレベル通知の設定などの情報を入力する必要があります。

Compute Systems Manager の初期設定の作業フローを次に示します。



管理クライアントから Compute Systems Manager に初めてログインすると、ダッシュボードの [To Do] リストに初期設定ウィザードが表示されます。このウィザードを使用して、ユーザープロファイルの編集、Eメールの設定、探索タスクの実行などの初期セットアップができます。このウィザードは、初めてのログイン時に表示されます。初期セットアップを完了してからログインすると、標準のメニューまたはタブを使用してタスクにアクセスできます。ダッシュボードの [To Do] リストには、完了していない設定や管理タスクが表示されます。

[To Do] リストに基づく設定については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

### 関連項目

- [2.4.1 Compute Systems Manager へログインする](#)
- [2.9 Device Manager との接続を設定する](#)

## 2.2 Web ブラウザーの設定

Compute Systems Manager では、リソースの管理に Web ベースのユーザーインターフェースを使用できます。

## 2.2.1 Web ブラウザーの設定とは

管理クライアントから Compute Systems Manager にログインする前に、使用する Web ブラウザーを起動して、次に示す設定を必要に応じて変更してください。

- ・ アドオンまたはプラグインのオプション
- ・ セキュリティのオプション
- ・ 言語のオプション

### 関連項目

- ・ [2.2.2 Internet Explorer を設定する](#)
- ・ [2.2.3 Firefox を設定する](#)
- ・ [2.2.4 Google Chrome を設定する](#)

## 2.2.2 Internet Explorer を設定する

Compute Systems Manager に初めてログインする前に、Internet Explorer のブラウザー設定が必要です。

### 事前に確認しておく情報

- ・ Compute Systems Manager の GUI に接続するための URL

### 事前に完了しておく操作

- ・ Adobe Flash Player のインストール
- ・ ポップアップを許可しないユーティリティがブラウザーにインストールされていないことを確認

Internet Explorer を設定する手順を次に示します。

1. Shockwave Flash Object のアドオンを有効にします。
2. ポップアップブロックが有効になっている場合、ポップアップブロックの設定で、許可する Web サイトに Compute Systems Manager の URL を追加します。Device Manager と連携する場合は、Device Manager の URL も追加します。
3. 信頼済みサイトに Compute Systems Manager の URL を追加します。Device Manager と連携する場合は、Device Manager の URL も追加します。
4. 信頼済みサイトのセキュリティのレベルを、次の表に示すとおり変更します。

項目	設定値
[ActiveX コントロールとプラグインの実行]	[有効にする]
[スクリプトを実行しても安全だとマークされている ActiveX コントロールのスクリプトの実行]	[有効にする]
[アクティブスクリプト]	[有効にする]
[暗号化されていないフォームデータの送信]	[ダイアログを表示する]または [有効にする]
[ファイルのダウンロード]	[有効にする]

5. 言語の優先順位で日本語を最上位に設定します。
6. 詳細設定で画像の表示を有効にします。
7. 詳細設定で [暗号化されたページをディスクに保存しない] のチェックを外します。



#### 重要

- Windows Server 2008 または 2012 で Internet Explorer を使用する場合、Internet Explorer セキュリティ強化の構成の設定がデフォルトで有効になっています。このため、次のような問題が発生するおそれがあります。

- 読み込み状況を示すアニメーションが動かない。
- HTTPS が有効なサーバからファイルをダウンロードできない。

この問題を解決するには、Internet Explorer セキュリティ強化の構成の設定を無効にする必要があります。

- Internet Explorer 9 以降では、次の現象が発生することがあります。
- 適切なバージョンの Adobe Flash Player がインストールされている環境でも、Adobe Flash Player のインストールを促すエラーメッセージが表示される。
- ヘルプが正しく表示されない。

このような現象が発生した場合は、ActiveX フィルターを無効にして、Internet Explorer の互換表示設定で管理サーバのホスト名または IP アドレスを登録してください。これらを設定してもヘルプが正しく表示されない場合は、[F5] キーを押して画面を更新してください。

#### 関連項目

- 2.2.1 Web ブラウザーの設定とは

## 2.2.3 Firefox を設定する

Compute Systems Manager に初めてログインする前に、Firefox のブラウザー設定が必要です。

#### 事前に確認しておく情報

- Compute Systems Manager の GUI に接続するための URL

#### 事前に完了しておく操作

- Adobe Flash Player のインストール
- ポップアップを許可しないユーティリティがブラウザーにインストールされていないことを確認

Firefox を設定する手順を次に示します。

- Flash プラグインを有効にします。
- 次の項目を設定します。
  - ポップアップブロックが有効になっている場合、ポップアップブロックの設定で、許可サイトに Compute Systems Manager の URL を追加する  
Device Manager と連携する場合は、Device Manager の URL も追加します。
  - 言語の優先順位で日本語を最上位に設定する
  - Cookie を有効にする
  - 画像を自動的に読み込む (Firefox ESR24 より前のバージョンの場合)
  - JavaScript を有効にする



**重要** 文字のサイズはデフォルトのままにしてください。文字のサイズをデフォルトより大きい値に設定すると、文字が重なって表示される場合があります。

#### 関連項目

- 2.2.1 Web ブラウザーの設定とは



## 2.2.4 Google Chrome を設定する

Compute Systems Manager に初めてログインする前に、Google Chrome のブラウザ設定が必要です。

### 事前に確認しておく情報

- Compute Systems Manager の GUI に接続するための URL

### 事前に完了しておく操作

- ポップアップを許可しないユーティリティがブラウザにインストールされていないことを確認

Google Chrome を設定する手順を次に示します。

1. Flash Player のプラグインを有効にします。
2. 次の項目を設定します。
  - ポップアップブロックが有効になっている場合、ポップアップブロックの設定で、許可サイトに Compute Systems Manager の URL を追加する  
Device Manager と連携する場合は、Device Manager の URL も追加します。
  - 言語の優先順位で日本語を最上位に設定する
  - Cookie を有効にする
  - 画像の表示を許可する
  - JavaScript を有効にする

### 関連項目

- [2.2.1 Web ブラウザーの設定とは](#)

## 2.3 ライセンスの管理

Compute Systems Manager を使用するには、有効なライセンスが必要です。

### 2.3.1 ライセンスの管理とは

Compute Systems Manager のライセンスには、製品を使用するための基本ライセンスと、特定の機能を使用するためのプラグインライセンスがあります。プラグインライセンスは、ユーザーが必要に応じて登録します。基本ライセンスは Compute Systems Manager のインストール中に自動的に登録されます。

Compute Systems Manager 以外の Hitachi Command Suite 製品を使用する場合、それぞれの製品のライセンスが必要です。

Hitachi Command Suite 製品のライセンスの期限が切れると、メインウィンドウにアラートが表示されます。

### 関連項目

- [2.3.2 ライセンスを登録する](#)
- [2.3.3 ライセンスの状態を確認する](#)

## 2.3.2 ライセンスを登録する

Compute Systems Manager のプラグインを起動する前に、プラグインライセンスを登録しておく必要があります。

### 事前に確認しておく情報

- ・ ライセンスキーまたはライセンスキーファイル

ライセンスを登録する手順を次に示します。

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Compute Systems Manager の URL を入力します。  
例：  
`http://<管理サーバのホスト名または IP アドレス>:22015/ComputeSystemsManager/`
3. ログイン画面で [ライセンス] ボタンをクリックします。  
すでにログインしている場合、[ヘルプ] メニューから [バージョン情報] を選択します。
4. 次のどちらかの方法でライセンスを登録します。
  - ライセンスキーを入力します。
  - ライセンスキーファイルを指定します。
5. [保存] ボタンをクリックします。
6. 表示されるメッセージで、ライセンスが追加されたことを確認します。  
ログイン後にライセンスを登録した場合は、ライセンスを有効にするために一度ログアウトしてから再ログインしてください。

### 関連項目

- ・ [2.3.1 ライセンスの管理とは](#)
- ・ [2.3.3 ライセンスの状態を確認する](#)

## 2.3.3 ライセンスの状態を確認する

必要に応じて、ライセンスの状態を確認します。

ライセンスの状態を確認する手順を次に示します。

1. ログイン画面で [ライセンス] ボタンをクリックします。  
すでにログインしている場合、[ヘルプ] メニューから [バージョン情報] を選択します。
2. [ライセンスメッセージ] 欄でライセンスの状態を確認します。  
各製品名のリンクをクリックすると、ライセンスの詳細情報を確認できます。

### 関連項目

- ・ [2.3.1 ライセンスの管理とは](#)
- ・ [2.3.2 ライセンスを登録する](#)

## 2.4 Compute Systems Manager へのログイン

インストールが完了すると、Compute Systems Manager にログインできるようになります。

## 2.4.1 Compute Systems Manager へログインする

Compute Systems Manager を使用するためにログインします。

1. Web ブラウザーを起動します。
2. Compute Systems Manager の URL を入力します。  
例：  
`http://<管理サーバのホスト名またはIPアドレス>:22015/ComputeSystemsManager/`
3. システム管理者から与えられたユーザー ID とパスワードを入力します。
4. [ログイン] をクリックします。

Compute Systems Manager に初めてログインすると、ダッシュボードの [To Do] リストに、E メールアドレスの登録や E メール通知用のアラートレベル設定など、設定が必要な項目が表示されます。

ダッシュボードの [To Do] リストに項目が表示されている場合、必ず設定してください。

### 関連項目

- [2.1 初期設定とは](#)
- [2.4.2 Compute Systems Manager からログアウトする](#)

## 2.4.2 Compute Systems Manager からログアウトする

Compute Systems Manager の使用を終了したら、ログアウトします。

1. Compute Systems Manager のメニューバーで [ログアウト] をクリックします。
2. [OK] をクリックします。

### 関連項目

- [2.4.1 Compute Systems Manager へログインする](#)

## 2.5 E メール通知の設定

タスクの状態やアラートなど、Compute Systems Manager のシステム運用についての E メールが送信されるように、E メール通知を設定する必要があります。

### 2.5.1 E メール通知の設定とは

タスクの完了時や、アラートの受信時に、Compute Systems Manager からユーザーに E メールで通知するように設定できます。

タスクの場合、タスクを実行したユーザーに通知します。

アラートの場合、アラートが発生したリソースを含むリソースグループを割り当てられているユーザーグループに属するユーザーすべてに通知します。

ユーザーが E メールを受信するためには、ユーザーのプロファイルを編集して、E メールアドレスを登録する必要があります。

### 関連項目

- [2.5.2 E メール通知を設定する](#)

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 6.2.4 ユーザーアカウントのプロファイルを編集する
- 6.2.5 自分のプロファイルを編集する

## 2.5.2 E メール通知を設定する

Compute Systems Manager から E メールで通知するには、管理サーバが SMTP サーバに接続できるように設定しておく必要があります。接続時にユーザー認証する場合は、認証用のユーザー情報も設定します。

### 事前に確認しておく情報

- SMTP サーバのホスト名または IP アドレス
- SMTP サーバとの接続時にユーザー認証する場合は、認証用のユーザー名とパスワード



参考 Compute Systems Manager が対応している SMTP サーバの認証方式およびプロトコルは次のとおりです。

- 接続時にユーザー認証する場合の認証方式：SMTP-AUTH
- E メール送信時にセキュリティ通信する場合のプロトコル：SMTPS (SMTP over TLS)

E メール通知を設定する方法を次に示します。

1. [管理] タブから [システム設定] を選択します。
2. [E-mail] を選択します。
3. [編集] ボタンをクリックします。
4. E メール通知を有効にするには、[E-mail 通知する] チェックボックスを選択し、必要な情報を入力します。
5. さらに、セキュリティ設定を変更したい場合、[詳細設定] を展開します。
6. [OK] をクリックします。

E メール通知の設定を表示または確認するには、[管理] タブで [システム設定] をクリックして [E-mail] を選択します。

### 関連項目

- 2.5.1 E メール通知の設定とは

## 2.6 CLI のダウンロード

Compute Systems Manager では、コマンドラインからタスクを実行するための CLI が用意されています。

### 2.6.1 CLI のダウンロードとは

管理クライアント上で CLI を使用するには、管理サーバから CLI アプリケーションをダウンロードしてインストールしてから、CLI 環境を設定する必要があります。

CLI アプリケーションのインストールおよび設定方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager CLI リファレンスガイド*」を参照してください。

#### 関連項目

- ・ 2.6.2 CLI をダウンロードする

## 2.6.2 CLI をダウンロードする

Web ブラウザーから CLI をダウンロードします。

CLI をダウンロードする手順を次に示します。

1. [ツール] メニューから [ダウンロード] を選択します。
2. ダウンロードするプログラムの [ダウンロード] リンクをクリックして、ファイルを保存します。
3. [ReadMe] リンクをクリックして表示される内容に従って、プログラムをインストールします。  
ダウンロードしたプログラムを使用できるようになります。

#### 関連項目

- ・ 2.6.1 CLI のダウンロードとは

## 2.7 警告バナーの設定

警告バナーの設定方法について説明します。

### 2.7.1 警告バナーの設定とは

Compute Systems Manager のログイン中のセキュリティ対策として、メッセージ（警告バナー）を表示できます。

警告バナーは不正アクセスをしようとしている第三者に通知したり、データ損失や情報漏えいなどのリスクを低減するために使用できます。

#### 関連項目

- ・ 2.7.2 警告バナーのメッセージを設定する

### 2.7.2 警告バナーのメッセージを設定する

HTML タグを使用して、Compute Systems Manager のログイン画面に表示されるメッセージを編集します。

警告バナーのメッセージを設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [セキュリティ] を選択します。
2. [警告バナー] を選択します。
3. [メッセージ編集] ボタンをクリックして、[メッセージ] ボックスに警告メッセージを入力します。  
[プレビュー] ボタンをクリックすると、[プレビュー] ボックスでメッセージを確認できます。
4. [OK] をクリックしてメッセージを保存します。

設定したメッセージは、ログイン画面で確認できます。

## 関連項目

- 2.7.1 警告バナーの設定とは

## 2.8 管理対象サーバと SSL 通信するよう設定する

Compute Systems Manager では、Compute Systems Manager の管理サーバと日立製サーバ間で SSL 通信をするための自己署名証明書がデフォルトで登録されています。

セキュリティを確保するためにほかのサーバ証明書を使用する場合は、GUI で SSL 通信の設定を変更する必要があります。

### 事前に確認しておく情報

- 秘密鍵のパスワード (キーパスワード)
- キーストアのパスワード

### 事前に完了しておく操作

- 管理サーバでキーストアを作成し、サーバ証明書を登録する  
キーストアを作成する手順については、マニュアル「*Hitachi Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

管理対象サーバとの SSL 通信を設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [システム設定] を選択します。
2. [SSL] を選択します。
3. [設定編集] をクリックします。
4. [キーパスワードとキーストアパスワードを指定する] チェックボックスを選択します。
5. [キーパスワード] および [キーストアパスワード] ボックスに必要な情報を入力します。
6. [OK] をクリックします。

## 2.9 Device Manager との接続を設定する

Device Manager との接続を設定することで、次のことができます。

- コンカレントメンテナンスモードで LPAR をマイグレーションする場合、マイグレーション WWPN を自動で登録
- Device Manager が管理するストレージシステムの情報 (ストレージシステムの一覧およびボリューム情報) を参照

### 事前に確認しておく情報

- Device Manager に接続するための情報

- ホスト名、または IP アドレス

Compute Systems Manager と Device Manager が同じ管理サーバ上にインストールされている場合は、同じ管理サーバ上の Device Manager を使用するため、設定できません。

- ユーザー名

All Resources と Modify または Admin ロールが割り当てられているユーザーを指定します。ただし、マイグレーション WWPN を自動で登録するだけの場合は、通常の運用に使用する FC の WWPN が登録されているホストグループを変更できるユーザーを指定します。

- パスワード
- プロトコル
- ポート番号

#### 事前に完了しておく操作

- Device Manager との通信のセキュリティ設定 (HTTPS プロトコルを使用する場合)

設定の方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

Device Manager との接続を設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [HDvM 通信] を選択します。
2. [設定編集] ボタンをクリックします。
3. Device Manager との通信を有効にするには、[Device Manager 通信を有効にする] チェックボックスを選択し、必要な項目を設定します。
4. [接続確認] ボタンをクリックして、Device Manager に接続できることを確認します。
5. 必要に応じて、[ボリューム情報取得を有効にする] チェックボックスを選択します。

#### 関連項目

- [4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする](#)
- [5.2.17 ストレージシステムの一覧を参照する](#)





## 管理対象の登録

この章では、管理対象リソースの追加、除外、および論理分割を設定する手順について説明します。

- 3.1 管理対象の登録の概要
- 3.2 リソースの探索
- 3.3 リソースの管理対象への追加
- 3.4 論理分割の設定
- 3.5 リソース情報の削除

## 3.1 管理対象の登録の概要

Compute Systems Manager はネットワーク内にある管理対象を探索し、管理対象リソースとして登録します。

### 3.1.1 リソースの探索とは

Compute Systems Manager では、管理対象に追加したいリソース群の認証情報および IP アドレスを指定することで、条件に合ったリソースを探索できます。

デフォルトでは、探索されたすべての管理対象が自動的に管理対象リソースに追加されます。探索された管理対象は手動で管理対象リソースにすることもできます。探索対象のリソースがシャーシの場合、IPv6 アドレスも指定できます。

Device Manager と Compute Systems Manager が同じ管理サーバ上で起動している場合、Device Manager が管理しているリソースの情報と Compute Systems Manager が管理しているリソースの情報が自動的に同期されます。Compute Systems Manager の探索条件を満たすリソースが Device Manager で探索済みの場合、または新たに探索された場合、そのリソース情報が Device Manager からインポートされます。それと同時にリソースが Compute Systems Manager に追加され、管理対象になります。Device Manager の探索対象となるリソースが Compute Systems Manager で探索されると、そのリソースは Device Manager に自動的に追加されます。

#### 関連項目

- 3.1.2 管理対象リソースの種別とは
- 3.1.3 管理対象の認証情報とは
- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

### 3.1.2 管理対象リソースの種別とは



**重要** LPAR または仮想リソースを管理対象にするには、プラグインライセンスが必要です。

Compute Systems Manager で探索できるリソース種別を次に示します。

- ホスト  
Windows ホストと Linux ホストの両方を探索できます。



**重要** 探索対象として Solaris ホストがある場合、探索結果に表示されますが、Solaris ホストに対する操作は非サポートです。

- ハイパーバイザー  
Hyper-V と VMware ESXi を探索できます。VMware ESXi は、ホストとしても探索されます。
- 仮想マシン  
ハイパーバイザーが探索されると、そのハイパーバイザー上の仮想マシンも自動で探索されます。ただし、仮想マシン上のホストは、ホストの環境設定後に探索が必要です。
- 日立製サーバ  
シャーシとラックマウントサーバを探索できます。シャーシが探索されると、そのシャーシに搭載されたすべてのブレードサーバも自動で探索されます。ただし、ブレードサーバまたはラックマウントサーバ上のホストは、ホストの環境設定後に探索が必要です。
- LPAR

ブレードサーバを論理分割の対象に追加すると、自動的に LPAR が管理対象になります。ただし、LPAR 上のホストは、ホストの環境設定後に探索が必要です。

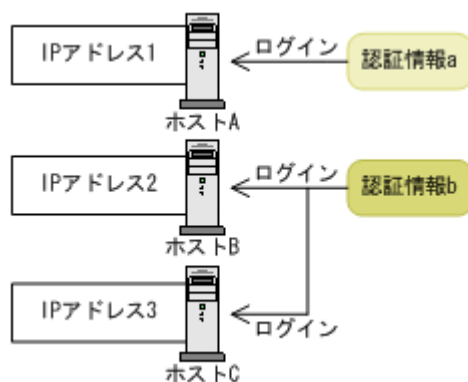
#### 関連項目

- 3.2.1 ホストを探索するための確認事項
- 3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項
- 3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項
- 3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項
- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

### 3.1.3 管理対象の認証情報とは

管理したいリソースに Compute Systems Manager がアクセスできるように設定するには、ID やパスワードなどの情報が必要です。このような管理対象に関する情報を認証情報と呼びます。リソースを探索する前に、すべての管理対象の認証情報を登録しておく必要があります。

同じ認証情報でログインするリソースが複数ある場合、認証情報の登録は1回だけで済みます。次の図に示す例では、ホスト B とホスト C は同じ認証情報を使用しています。3つのホストを探索するには、認証情報 a (ホスト A 用) と認証情報 b (ホスト B 用とホスト C 用) の2つの認証情報を指定します。



#### 関連項目

- 3.1.1 リソースの探索とは
- 3.2.5 リソースの認証情報を登録する
- 3.2.6 リソースを探索する

## 3.2 リソースの探索

Compute Systems Manager はネットワーク内にある管理対象を探索し、管理対象リソースとして Compute Systems Manager に追加します。

### 3.2.1 ホストを探索するための確認事項

#### 事前に確認しておく情報

- ホストの IP アドレス
- ホストの OS タイプ

- ホストのユーザー ID とパスワード（認証情報）
- ホストのドメイン名（WMI または WinRM を使用する場合は、ホストがドメインに属するとき）
- ホストの SSH サーバのポート番号（SSH を使用する場合は）
- ホストの WinRM の HTTP リスナーのポート番号（WinRM を使用する場合は）

#### 事前に完了しておく操作

- 各ホストに OS をインストールする
- Compute Systems Manager がアクセスできるネットワークに各ホストを接続する
- WMI, WinRM または SSH を使用して Compute Systems Manager がアクセスできるように各ホストを設定する

ホストを探索するための設定方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。



**参考** 次の条件をどちらも満たす場合、Device Manager で探索されたホストの情報は、Compute Systems Manager と同期されます。

- Compute Systems Manager と Device Manager が同一の管理サーバ上にインストールされている
- Compute Systems Manager の探索条件に合ったホストが、Device Manager で探索されている  
ただし、Device Manager で探索された VMware ESXi の情報は、Compute Systems Manager と同期されません。

#### 関連項目

- 3.1.1 リソースの探索とは
- 3.2.5 リソースの認証情報を登録する
- 3.2.6 リソースを探索する

## 3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項

Compute Systems Manager では、すべての仮想マシン（VM）とハイパーバイザーが探索されます。ハイパーバイザーと仮想マシンの探索を開始する前に、確認が必要な事項を完了しておく必要があります。

#### 事前に確認しておく情報

- ハイパーバイザーの IP アドレス
- Compute Systems Manager がハイパーバイザーにアクセスするためのユーザー ID とパスワード（認証情報）  
ハイパーバイザーが VMware ESXi の場合は、探索対象の VMware ESXi の root ユーザーでアクセスする必要があるため、root ユーザーのパスワードを確認してください。

#### 事前に完了しておく操作

- 適切なプロトコルを使用して Compute Systems Manager がハイパーバイザーにアクセスできるように、各ハイパーバイザーを設定する
  - Hyper-V の場合：WMI または WinRM
  - VMware ESXi の場合：HTTPS
- Compute Systems Manager がアクセスできるネットワークにハイパーバイザーを接続する

- ・ ハイパーバイザーがメンテナンスモードになっていないことを確認する

#### 関連項目

- ・ 3.1.1 リソースの探索とは
- ・ 3.2.5 リソースの認証情報を登録する
- ・ 3.2.6 リソースを探索する

### 3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項

日立製のブレードサーバとシャーシを探索する前に確認する必要がある情報、および完了しておく必要がある操作について説明します。

#### 事前に確認しておく情報

- ・ マネジメントモジュールの IP アドレス
- ・ Compute Systems Manager がマネジメントモジュールにアクセスするためのユーザー ID とパスワード（認証情報）
- ・ マネジメントモジュールのポート番号

#### 事前に完了しておく操作

- ・ Compute Systems Manager がアクセスできるネットワークに各シャーシおよびブレードサーバを接続する

#### 関連項目

- ・ 3.1.1 リソースの探索とは
- ・ 3.2.5 リソースの認証情報を登録する
- ・ 3.2.6 リソースを探索する

### 3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項

#### 事前に確認しておく情報

- ・ BMC の IP アドレス
- ・ BMC のポート番号
- ・ Compute Systems Manager が BMC にアクセスするためのユーザー ID とパスワード（認証情報）

認証情報を変更できないラックマウントサーバの場合は、確認不要です。デフォルト設定を使用してください。対象となるラックマウントサーバの機種については、ソフトウェア添付資料を参照してください。

#### 事前に完了しておく操作

- ・ Compute Systems Manager がアクセスできるネットワークに各ラックマウントサーバを接続する

#### 関連項目

- ・ 3.1.1 リソースの探索とは
- ・ 3.2.5 リソースの認証情報を登録する

- 3.2.6 リソースを探索する

## 3.2.5 リソースの認証情報を登録する

探索を開始する前に、管理対象の認証情報を登録しておく必要があります。

認証情報を追加する前に、対象を探索するための確認事項を参照してください。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [認証情報] タブを選択します。
3. [認証情報追加] をクリックします。
4. [対象] でリソースの OS または対象タイプを選択し、必要な認証情報を入力します。

ハイパーバイザーが Hyper-V の場合、[Windows] を選択してから、[Hyper-V を探索する] チェックボックスを選択します。

ハイパーバイザーが VMware ESXi の場合、ユーザー ID には探索対象の VMware ESXi の root ユーザーを、パスワードには root ユーザーのパスワードを入力します。

認証情報を変更できないラックマウントサーバの場合、ユーザー ID とパスワードの [デフォルト設定] のチェックを外さないでください。対象となるラックマウントサーバの機種については、ソフトウェア添付資料を参照してください。

5. [OK] をクリックします。

### 関連項目

- 3.1.2 管理対象リソースの種別とは
- 3.2.1 ホストを探索するための確認事項
- 3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項
- 3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項
- 3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項
- 3.2.6 リソースを探索する

## 3.2.6 リソースを探索する

リソースの探索では、IP アドレスの範囲を設定して管理対象を探索します。

デフォルトでは、探索されたリソースはすべて自動的に Compute Systems Manager の管理対象リソースになります。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索設定] タブで [IP 範囲指定] ボタンをクリックします。  
探索するリソースの IP アドレス範囲が設定済みの場合は、手順 5 に進んでください。
3. ウィザードの指示に従って IP アドレス範囲を指定し、各リソースに対応する認証情報を選択します。



**重要** ブレードサーバを探索するには、ブレードサーバが搭載されたシャーシの IP アドレスと認証情報を指定します。これによって、探索されたシャーシに搭載されたすべてのブレードサーバが探索されます。

4. 入力した情報を確認し、[実行] ボタンをクリックします。  
[探索設定] タブの一覧に設定した IP アドレス範囲が追加されます。
5. 探索設定の一覧から、探索したい設定を選択し、[リソース探索] をクリックします。
6. [リソース探索] ウィンドウで設定を確認します。

7. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクはすぐに実行したり、あとで実行するようスケジュールを設定したりできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
8. プランを実行する準備ができれば、[実行] ボタンをクリックします。
9. 探索タスクの進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

タスク詳細を閲覧することで、各リソースの探索結果を確認できます。



**重要** プロセス中に Compute Systems Manager をログアウトしても、探索は続行されます。

探索が完了すると、探索されたリソースの一覧が [探索済みリソース] タブに表示されます。探索された各リソースの詳細情報については、[探索済みリソース] の下の各種リソースのタブをクリックするか、[リソース] タブの詳細情報を確認します。

#### 関連項目

- [3.1.1 リソースの探索とは](#)
- [3.2.1 ホストを探索するための確認事項](#)
- [3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項](#)
- [3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項](#)
- [3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項](#)
- [3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは](#)

## 3.3 リソースの管理対象への追加

探索中に Compute Systems Manager によって探索された管理対象は、自動的に管理対象になります。リソースを管理対象にするかどうかを手動で指定することもできます。

### 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

デフォルトでは、探索されたリソースは自動的に管理対象になります。

探索時の詳細設定で管理対象にしなかったリソースや、運用中にいったん管理対象から外したリソースは、再度探索しなくても探索済みリソースの一覧画面で管理対象にできます。



#### 重要

- LPAR を管理対象とするには、ブレードサーバを論理分割の対象に追加する必要があります。
- 管理対象から外したリソースを、再度、管理対象にする場合、次の点に注意してください。
  - 管理対象から外す前に取得した性能情報は参照できません。
  - 管理対象から外す前に登録したタスクは再登録する必要があります。
  - イベント処理を自動化している場合、管理対象から外す前に設定していたコマンド適用先のリソースを再設定する必要があります。

#### 関連項目

- [3.3.2 ホストを管理対象にする](#)
- [3.3.3 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象にする](#)

- 3.3.4 ブレードサーバとシャーシを管理対象にする
- 3.3.6 ラックマウントサーバを管理対象にする
- 3.5.1 リソース情報の削除とは
- 5.1.11 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する

### 3.3.2 ホストを管理対象にする

デフォルトでは、探索されたホストは自動的に管理対象になります。探索時に管理対象にしなかった場合や、管理対象から外した場合は、ホストを管理対象にするかどうかを手動で指定できます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ホスト] タブを選択します。
3. ホストの一覧から、管理対象にするホストを選択します。
4. [管理対象に追加] をクリックします。
5. 管理対象にするホストと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したホストの [管理状況] 列が「管理中」に変わって、Compute Systems Manager の管理対象となります。また、管理対象となったホストがハイパーバイザーとして稼働するホストの場合、ハイパーバイザーも管理対象となります。



**重要** Device Manager とホストの情報を同期している場合でも、Compute Systems Manager でホストを管理対象に追加する操作は Device Manager に影響しません。

#### 関連項目

- 3.2.1 ホストを探索するための確認事項
- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- 3.3.7 ホストを管理対象から外す

### 3.3.3 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象にする

探索時に管理対象にしなかった場合や、管理対象から外した場合は、ハイパーバイザーを管理対象にするかどうかを手動で指定できます。ハイパーバイザーを管理対象にすると、ハイパーバイザー上で稼働する仮想マシンも管理対象になります。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ハイパーバイザー] タブを選択します。
3. ハイパーバイザーの一覧から、管理対象にするハイパーバイザーを選択します。
4. [管理対象に追加] をクリックします。
5. 管理対象にするハイパーバイザーと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したハイパーバイザーの [管理状況] 列の値が [管理中] に変わり、Compute Systems Manager の管理対象になったことを示します。ハイパーバイザーとして稼働するホスト、およびハイパーバイザー上で稼働している仮想マシンも管理対象になります。管理対象の仮想マシンに関する情報は、[探索済みリソース] タブの [仮想マシン] タブで確認できます。

必要に応じて、仮想マシン上のホストも管理対象にしてください。

#### 関連項目

- 3.2.2 ハイパーバイザーと仮想マシンを探索するための確認事項



- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- 3.3.8 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象から外す

### 3.3.4 ブレードサーバとシャーシを管理対象にする

ブレードサーバはシャーシ単位で管理されているため、ブレードサーバを管理対象にするには、ブレードサーバが搭載されているシャーシ単位で操作します。

ブレードサーバを管理対象にしたあとで、論理分割の対象に追加すると自動的に LPAR が管理対象になります。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [シャーシ] タブを選択します。
3. シャーシの一覧から、管理対象にするシャーシを選択します。
4. [管理対象に追加] をクリックします。
5. 管理対象にするシャーシと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したシャーシの [管理状況] 列が「管理中」に変わって、Compute Systems Manager の管理対象となります。また、管理対象シャーシに搭載されているブレードサーバも管理対象となります。管理対象となったブレードサーバは、[探索済みリソース] タブの [ブレード] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 3.2.3 ブレードサーバとシャーシを探索するための確認事項
- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- 3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する
- 3.3.9 ブレードサーバとシャーシを管理対象から外す

### 3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する

作成済みの LPAR を管理対象にしたり、LPAR を新規で作成したりするには、ブレードサーバを論理分割の対象に追加します。

#### 事前に完了しておく操作

- 論理分割の有効設定
- HVM の起動

ブレードサーバを論理分割の対象に追加する手順を次に示します。

1. [管理] タブで、[論理分割] - [対象ブレード] を選択します。
2. [ブレード追加] ボタンをクリックし、論理分割の対象に追加するブレードサーバを選択します。
3. [OK] を選択します。

ブレードサーバは論理分割の対象として追加され、[対象ブレード] の一覧に表示されます。

#### 関連項目

- 3.4.1 論理分割の設定とは
- 3.4.2 論理分割を設定する
- 4.1.12 サーバの電源を ON にする

### 3.3.6 ラックマウントサーバを管理対象にする

デフォルトでは、探索されたラックマウントサーバは自動的に管理対象になります。探索時に管理対象にしなかった場合や、管理対象から外した場合は、ラックマウントサーバを管理対象にするかどうかを手動で指定できます。探索されたサーバの一覧で、ラックマウントサーバを管理対象に追加します。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ラックマウント] タブを選択します。
3. サーバの一覧から、管理対象にするラックマウントサーバを選択します。  
管理対象でないラックマウントサーバを見つけるには、[管理状況] 列でリストを並べ替えます。
4. [管理対象に追加] をクリックします。
5. 管理対象にするラックマウントサーバを確認し、[OK] をクリックします。

選択したラックマウントサーバの [管理状況] 列の値が「管理中」に変わり、Compute Systems Manager の管理対象になります。

#### 関連項目

- 3.2.4 ラックマウントサーバを探索するための確認事項
- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- 3.3.11 ラックマウントサーバを管理対象から外す

### 3.3.7 ホストを管理対象から外す

ホストを管理対象から外すよう手動で指定できます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ホスト] タブを選択します。
3. ホストの一覧で、管理対象から外すホストを選択します。
4. [管理対象から除外] をクリックします。
5. 管理対象から外すホストと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したホストの [管理状況] 列が「対象外」に変わって、Compute Systems Manager の管理対象から外れます。また、管理対象から外れたホストがハイパーバイザーとして稼働するホストの場合、ハイパーバイザーも管理対象から外れます。



**重要** Device Manager とホストの情報を同期している場合でも、Compute Systems Manager でホストを管理対象から外す操作は Device Manager に影響しません。

#### 関連項目

- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

### 3.3.8 ハイパーバイザーと仮想マシンを管理対象から外す

特定のハイパーバイザーを管理対象から外したい場合、手動で管理対象から削除できます。ハイパーバイザーを管理対象から外すと、ハイパーバイザー上の仮想マシンも管理対象から外れます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ハイパーバイザー] タブを選択します。
3. ハイパーバイザーの一覧から、管理対象から外すハイパーバイザーを選択します。

4. [管理対象から除外] をクリックします。
5. 管理対象から外すハイパーバイザーと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したハイパーバイザーの[管理状況]列の値が「対象外」に変わり、Compute Systems Managerの管理対象から外れたことを示します。ハイパーバイザーとして稼働するホスト、およびハイパーバイザー上で稼働している仮想マシンも管理対象から外れます。管理対象から外れた仮想マシンは、[探索済みリソース] タブの [仮想マシン] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

### 3.3.9 ブレードサーバとシャーシを管理対象から外す

ブレードサーバはシャーシ単位で管理されているため、管理対象としないブレードサーバが管理対象に含まれていた場合、ブレードサーバが搭載されているシャーシを管理対象から外します。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [シャーシ] タブを選択します。
3. シャーシの一覧で、管理対象から外すシャーシを選択します。
4. [管理対象から除外] をクリックします。
5. 管理対象から外すシャーシと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

選択したシャーシの[管理状況]列の値が「対象外」に変わり、Compute Systems Managerの管理対象から外れます。また、管理対象から外れたシャーシに搭載されているブレードサーバや、ブレードサーバ上の LPAR も管理対象から外れます。管理対象から外れたブレードサーバまたは LPAR は、[探索済みリソース] タブの [ブレード] または [LPAR] タブで、それぞれ確認できます。

#### 関連項目

- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

### 3.3.10 ブレードサーバを論理分割の対象から削除する

ブレードサーバやシャーシを破棄するために情報を削除する場合は、ブレードサーバを論理分割の対象から削除します。

#### 事前に完了しておく操作

- 論理分割の有効設定
- HVM の起動

ブレードサーバを論理分割の対象から削除する手順を次に示します。

1. [管理] タブで、[論理分割] - [対象ブレード] を選択します。
2. 論理分割の対象から削除するブレードサーバを選択して、[ブレード削除] ボタンをクリックします。
3. [OK] を選択します。

ブレードサーバは論理分割の対象から削除され、[対象ブレード] の一覧に表示されなくなります。

#### 関連項目

- 3.4.1 論理分割の設定とは
- 3.4.2 論理分割を設定する
- 4.1.12 サーバの電源を ON にする

### 3.3.11 ラックマウントサーバを管理対象から外す

ラックマウントサーバを管理対象から外すよう手動で指定できます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ラックマウント] タブを選択します。
3. ラックマウントサーバの一覧で、管理対象から外すサーバを選択します。
4. [管理対象から除外] をクリックします。
5. 管理対象から外すラックマウントサーバを確認し、[OK] をクリックします。

選択したラックマウントサーバの [管理状況] 列の値が「対象外」に変わり、Compute Systems Manager の管理対象から外れます。

#### 関連項目

- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは

## 3.4 論理分割の設定

### 3.4.1 論理分割の設定とは

Compute Systems Manager では、1 台または複数台のブレードで構成されているブレードサーバを論理的に分割し、それぞれに独立したサーバ環境を作成して利用できます。この機能を、論理分割と呼びます。

Compute Systems Manager で論理分割の機能を使用するには、プラグインライセンスが必要です。

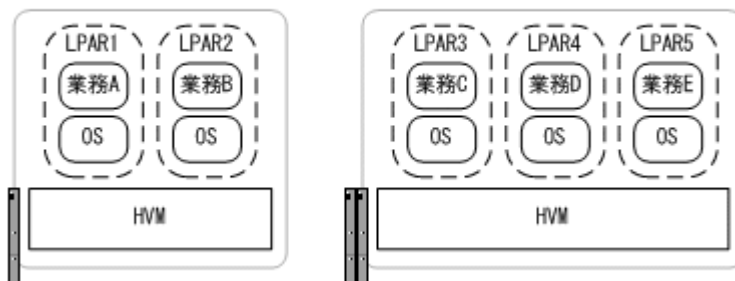
論理的に分割および作成されたそれぞれのサーバ環境を LPAR と呼びます。それぞれの LPAR では、異なる OS や業務アプリケーションを稼働できます。

LPAR はブレードサーバ上の HVM で管理されます。

HVM を使用したサーバ構成例の図を次に示します。

1台構成のブレードサーバを分割

複数台構成のブレードサーバを分割



Compute Systems Manager の GUI で、論理分割を設定したり、LPAR を作成したりできます。必要に応じて、論理分割や LPAR の設定内容の変更もできます。

また、Web リモート KVM と連携することで、LPAR にホストを作成できます。

#### 関連項目

- 1.3.3 管理対象を登録する流れ
- 3.4.2 論理分割を設定する
- 3.4.9 LPAR にホストを作成する手順の概要

## 3.4.2 論理分割を設定する

論理分割の設定について説明します。

論理分割を有効または無効に設定します。また、論理分割を有効にする場合には必要な項目を設定します。

#### 事前に確認しておく情報

- 論理分割の有効または無効を切り替える場合に、切り替える前に運用していたホストが管理対象から外れている

#### 事前に完了しておく操作

- ブレードサーバの停止

論理分割を設定する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、[ブレード] を選択します。
3. サーバの一覧から、設定したいサーバを選択します。
4. [その他の操作] メニューをクリックし、[HVM 設定編集] を選択します。
5. 論理分割を有効にする場合は [動作モードを HVM にする] をチェックし、HVM ID、HVM IP アドレス、仮想 NIC システム番号などの必須項目を入力します。  
論理分割を無効にする場合は、チェックを外します。  
設定後に HVM またはサーバを起動するよう設定もできます。
6. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
7. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

論理分割の設定内容は、ブレードサーバ情報を表示した画面の [HVM] タブで参照できます。

#### 関連項目

- 3.4.1 論理分割の設定とは
- 3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する
- 3.4.5 HVM の構成情報を参照する

## 3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する

PCI デバイス設定など、必要に応じて論理分割の拡張設定を変更します。論理分割の設定オプションとして、自動シャットダウンなども設定できます。

#### 事前に確認しておく情報

- ブレードサーバが論理分割の対象である

### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

論理分割の拡張設定を変更する手順を次に示します。

1. [リソース] – [シャーシ & サーバ] – [サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、[ブレード] を選択します。
3. サーバの一覧から、設定したい [サーバ名] のリンクをクリックします。  
管理対象サーバの構成情報が表示されます。
4. [HVM] – [HVM 基本情報] を選択します。
5. [HVM の高度な設定編集] ボタンをクリックします。
6. 画面の内容に沿って、設定します。
7. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
8. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

論理分割の設定内容は、ブレードサーバ情報を表示した画面の [HVM] タブで参照できます。

### 関連項目

- [3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する](#)
- [3.4.1 論理分割の設定とは](#)
- [3.4.2 論理分割を設定する](#)
- [3.4.5 HVM の構成情報を参照する](#)

## 3.4.4 USB 自動アタッチ設定を変更する

USB 自動アタッチ設定を変更する手順について説明します。

USB 自動アタッチを設定すると、LPAR が起動した場合に、割り当てられた USB を自動的にアタッチできます。

次のどちらかを指定して設定します。

- すべての LPAR が対象  
起動した LPAR に、割り当てられたすべての USB がアタッチされます。
- 特定の LPAR が対象  
自動アタッチしたい USB に、目的の LPAR を選択して設定します。  
USB が LPAR に自動でアタッチされないようにするには、USB をアタッチする LPAR を何も指定しないように設定します。

### 事前に確認しておく情報

- ブレードサーバが論理分割の対象である

### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動
- 目的の LPAR への USB 割り当て  
特定の LPAR を指定して、自動で USB をアタッチするよう設定する場合に実施します。

USB 自動アタッチ設定を変更する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、[ブレード] を選択します。
3. サーバの一覧から、設定を変更したい LPAR が属する [サーバ名] のリンクをクリックします。  
管理対象サーバの構成情報が表示されます。
4. [HVM] - [USB] を選択し、[自動 Attach 設定編集] ボタンをクリックします。
5. 画面の内容に沿って、設定します。
6. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
7. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

USB 自動アタッチ設定の状態は、ブレードサーバ情報を表示した画面の [HVM] - [USB] で確認できます。

#### 関連項目

- [3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する](#)
- [3.4.1 論理分割の設定とは](#)
- [4.7.4 LPAR の USB アタッチとは](#)
- [5.2.15 サーバの情報を参照する](#)

### 3.4.5 HVM の構成情報を参照する

HVM の構成情報を参照します。

HVM ID, HVM IP アドレスなどの基本情報、および PCI 設定など拡張情報を参照できます。

HVM の構成情報を参照する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、[ブレード] を選択します。
3. サーバの一覧から、情報を参照したい [サーバ名] のリンクをクリックします。  
管理対象サーバの構成情報が表示されます。
4. [HVM] タブを選択します。

#### 関連項目

- [3.4.1 論理分割の設定とは](#)
- [3.4.2 論理分割を設定する](#)
- [3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する](#)

### 3.4.6 LPAR を作成する

LPAR を作成する方法を説明します。LPAR を作成する際に、プロセッサ、メモリー、NIC、FC、および USB 割り当てについても設定します。

#### 事前に確認しておく情報

- ブレードサーバが論理分割の対象である

### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

LPAR を作成する手順を次に示します。

1. [リソース] – [シャーシ & サーバ] – [サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、[ブレード] を選択します。
3. サーバの一覧から、LPAR を作成したい [サーバ名] のリンクをクリックします。  
管理対象サーバの構成情報が表示されます。
4. [HVM] – [LPAR] を選択します。
5. [LPAR 設定] メニューから [LPAR 作成] を選択します。  
ウィザードに従って、作成する LPAR の詳細を設定します。
6. LPAR の基本情報を設定する画面を表示し、LPAR 名などを設定します。  
この画面では、自動アクティブ順序も設定できます。
7. プロセッサを設定する画面で、スケジューリングモード、論理プロセッサ数などを設定します。
8. メモリーを設定する画面で、メモリーサイズなどを設定します。
9. NIC を設定する画面で、共有 NIC などを設定します。  
それぞれの共有 NIC の設定を変更するためには、目的の NIC を選択し、[Virtual NIC 編集]  
ボタンをクリックします。
10. FC を設定する画面で、共有 FC などを設定します。
11. USB を設定する画面で、LPAR に割り当てる USB を設定します。  
Web リモート KVM を使用して LPAR または LPAR 上のホストを操作したり、LPAR で USB  
を使用したりするために、LPAR に USB を割り当ててから、USB をアタッチする必要があります。
12. 確認画面で [プラン詳細] を展開し、設定したプランの内容を確認します。
13. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

作成した LPAR は、自動的に管理対象となります。

LPAR の設定内容は、LPAR の一覧画面で [LPAR Name] のリンクをクリックすると参照できます。

### 関連項目

- 3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する
- 3.4.1 論理分割の設定とは
- 3.4.7 LPAR の設定を変更する
- 3.4.8 LPAR を一括で作成する
- 5.2.16 LPAR の情報を参照する

## 3.4.7 LPAR の設定を変更する

プロセッサ、メモリー、NIC、FC、および USB 割り当てなど、LPAR の設定を変更します。

### 事前に確認しておく情報

- ブレードサーバが論理分割の対象である



### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

LPAR の設定を変更する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、設定を変更したい [LPAR Name] のリンクをクリックします。  
管理対象 LPAR の構成情報が表示されます。
3. 設定を変更したい項目があるタブを選択します。
4. 編集ボタンをクリックして、設定を変更します。
5. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
6. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR の設定内容は、LPAR の詳細画面で参照できます。

### 関連項目

- [3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する](#)
- [3.4.1 論理分割の設定とは](#)
- [3.4.6 LPAR を作成する](#)
- [3.4.8 LPAR を一括で作成する](#)
- [5.2.16 LPAR の情報を参照する](#)

## 3.4.8 LPAR を一括で作成する

LPAR を一括で作成する手順を説明します。

LPAR を作成したいブレードサーバまたは HVM を指定して、複数の LPAR を一括で作成できます。

LPAR を一括で作成すると、LPAR 番号、LPAR 名などにはデフォルト値が設定されます。LPAR を作成したあとで、LPAR ごとに設定を確認し、必要に応じて変更してください。

### 事前に確認しておく情報

- ブレードサーバが論理分割の対象である

### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

LPAR を一括で作成する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. 次のどちらかの方法で、LPAR の一覧を表示します。
  - a. [LPAR] - [LPAR] を選択します。
  - b. [サーバ] - [ブレード] を選択したあと、サーバの一覧から、LPAR を作成したい [サーバ名] のリンクをクリックします。  
表示された管理対象サーバの構成情報から、[HVM] - [LPAR] を選択します。
3. [LPAR 設定] メニューから、[デフォルト設定の LPAR 作成] ボタンをクリックします。

4. 画面の内容に沿って、設定します。  
 [選択] ボタンをクリックして、[HVM 選択] 画面で LPAR を作成したい HVM を選択することで、[HVM ID] を指定できます。  
 ただし、ブレードサーバを選択して、LPAR を一括で作成する場合は、HVM が特定されるため、[選択] ボタンは表示されません。
5. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
6. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

作成した LPAR の設定を変更します。

#### 関連項目

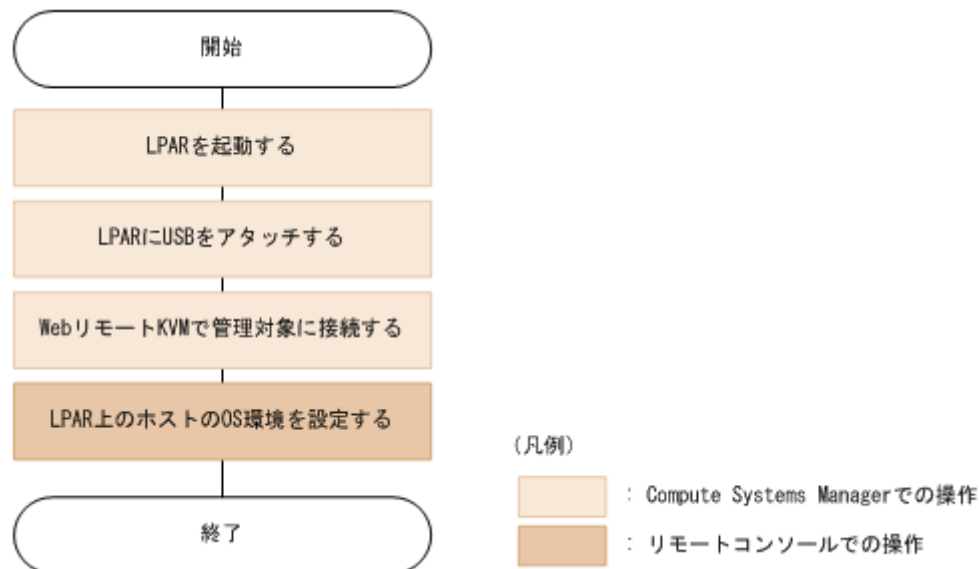
- [3.3.5 ブレードサーバを論理分割の対象に追加する](#)
- [3.4.1 論理分割の設定とは](#)
- [3.4.6 LPAR を作成する](#)
- [3.4.7 LPAR の設定を変更する](#)

### 3.4.9 LPAR にホストを作成する手順の概要

作成した LPAR に、ホストを作成する手順の概要について説明します。

LPAR にホストを作成するためには、Web リモート KVM と連携した操作が必要です。ホストを作成する手順の中で、LPAR 上のホストの OS 環境を設定する場合に、LPAR をリモートコンソールで操作します。

LPAR にホストを作成する手順の作業フローを次に示します。この作業は、LPAR ごとに実行する必要があります。



また、デプロイメントマネージャーを使用して、LPAR を複製できます。複製元の LPAR にホストが作成されていれば、LPAR を複製することで、複製先の LPAR にホストを作成できます。

#### 関連項目

- [1.3.3 管理対象を登録する流れ](#)
- [3.4.10 LPAR にホストを作成するための確認事項](#)

- [3.4.11 LPAR にホストを作成する](#)
- [4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは](#)

## 3.4.10 LPAR にホストを作成するための確認事項

LPAR にホストを作成する前に、確認しておく情報、および完了しておく操作について説明します。

### 事前に確認しておく情報

- LPAR に設定されている FC の WWN 情報  
LPAR の詳細画面で参照できます。

### 事前に完了しておく操作

- LPAR 上の OS 環境設定時に指定するデバイスの割り当て  
Device Manager などを使用して、LPAR に、ブートに使用できるデバイスとしてストレージシステムのボリュームを割り当てます。このとき、LPAR に設定されている FC の WWN 情報を使用してください。  
Device Manager での操作の詳細については、マニュアル「*Hitachi Command Suite ユーザーズガイド*」を参照してください。
- LPAR の FC 設定  
OS をインストールする場合は、ブートできるようにするポートは 1 つだけにしてください。複数のポートを有効にしていると、正しく認識できないことがあります。冗長化のために、複数のポートを使用して運用する場合は、OS をインストールしたあとに、LPAR の FC 設定を変更してください。
- LPAR の起動および LPAR への USB のアタッチ  
USB の自動アタッチを設定することで、LPAR 起動時、自動的に USB をアタッチさせることもできます。

### 関連項目

- [3.4.4 USB 自動アタッチ設定を変更する](#)
- [3.4.9 LPAR にホストを作成する手順の概要](#)
- [3.4.11 LPAR にホストを作成する](#)
- [4.1.17 LPAR を起動する](#)
- [4.7.5 LPAR に USB をアタッチする](#)
- [5.2.16 LPAR の情報を参照する](#)

## 3.4.11 LPAR にホストを作成する

LPAR にホストを作成する手順について説明します。

1. ホストを作成する LPAR に、Web リモート KVM で接続します。
2. リモートコンソールで、OS 環境を設定します。  
OS 環境は、次の順で設定します。
  - a. ブートに使用するデバイスの選択  
インストール環境に合わせてデバイスの起動順位も設定してください。
  - b. OS のインストール
  - c. OS のシャットダウン

リモートコンソールを使用した OS 環境の設定については、ブレードサーバのマニュアルを参照してください。

ホストを作成するすべての LPAR で作業が完了したあと、USB が自動アタッチされないよう設定してください。

そのままにしておくと、意図しないときに USB がアタッチされるおそれがあります。

#### 関連項目

- 3.4.4 USB 自動アタッチ設定を変更する
- 3.4.9 LPAR にホストを作成する手順の概要
- 3.4.10 LPAR にホストを作成するための確認事項
- 4.7.3 Web リモート KVM で管理対象に接続する

## 3.5 リソース情報の削除

リソースを管理対象にする必要がなくなった場合、リソース情報を Compute Systems Manager のデータベースから削除できます。

### 3.5.1 リソース情報の削除とは

Compute Systems Manager が探索したリソースに関する情報は、Compute Systems Manager のデータベースに保存されています。リソースを廃棄するときは、Compute Systems Manager のデータベースからリソースに関する情報を削除します。リソース情報は、リソースが管理対象であるかどうかに関係なく、Compute Systems Manager のデータベースから削除できます。

#### 関連項目

- 3.3.1 リソースの管理対象への追加と除外とは
- 3.5.2 データベースからホストの情報を削除する
- 3.5.3 データベースからハイパーバイザーと仮想マシンの情報を削除する
- 3.5.4 データベースからブレードサーバとシャーシの情報を削除する
- 3.5.5 データベースからラックマウントサーバの情報を削除する

### 3.5.2 データベースからホストの情報を削除する

ホストおよびそのホストに関するすべての情報は Compute Systems Manager のデータベースから削除できます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ホスト] タブを選択します。
3. ホストの一覧から、情報を削除するホストを選択します。
4. [リソース削除] をクリックします。
5. 情報を削除するホストと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

削除したホストはホストの一覧に表示されなくなります。ホストは管理対象から外れ、Compute Systems Manager のデータベースからも削除されます。また、ホストに搭載されたハイパーバイザーの情報も削除されます。



**重要** Device Manager とホストの情報を同期している場合でも、Compute Systems Manager でホストを削除する操作は Device Manager に影響しません。

#### 関連項目

- 3.5.1 リソース情報の削除とは
- 3.5.3 データベースからハイパーバイザーと仮想マシンの情報を削除する

### 3.5.3 データベースからハイパーバイザーと仮想マシンの情報を削除する

ハイパーバイザーを削除すると、ハイパーバイザーや、関連する仮想マシンに関するすべての情報がデータベースから削除できます。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ハイパーバイザー] タブを選択します。
3. ハイパーバイザーの一覧で、データベースから情報を削除するハイパーバイザーを選択します。
4. [リソース削除] をクリックします。
5. 情報を削除するハイパーバイザーと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

削除したハイパーバイザーは、ハイパーバイザー一覧に表示されなくなります。ハイパーバイザーは管理対象から外され、Compute Systems Manager のデータベースからも削除されます。ハイパーバイザー上で起動していた仮想マシンの情報やハイパーバイザーを含むホストの情報も削除されます。削除した仮想マシンは、[探索済みリソース] タブの [仮想マシン] タブにある仮想マシン一覧に表示されなくなります。

#### 関連項目

- 3.5.1 リソース情報の削除とは
- 3.5.2 データベースからホストの情報を削除する

### 3.5.4 データベースからブレードサーバとシャーシの情報を削除する

シャーシを廃棄するときなど、Compute Systems Manager で管理対象とする必要がなくなった場合は、ブレードサーバとシャーシの情報をデータベースから削除します。ブレードサーバの情報はシャーシ単位で管理されているため、特定のブレードサーバだけを廃棄するときは、この操作は不要です。



**重要** ブレードを廃棄する場合は、論理分割やデプロイメントマネージャーの対象、または N+M コールドスタンバイグループから管理対象リソースを削除する必要があります。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [シャーシ] タブを選択します。
3. シャーシの一覧から、情報を削除するシャーシを選択します。
4. [リソース削除] をクリックします。
5. 情報を削除するシャーシと関連するリソースを確認し、[OK] をクリックします。

削除されたシャーシはシャーシの一覧に表示されなくなります。シャーシは管理対象から外れ、Compute Systems Manager のデータベースからも削除されます。また、シャーシに搭載されたブレードサーバの情報や、ブレードサーバ上の LPAR の情報も削除されます。

削除されたブレードサーバおよび LPAR は、[探索済みリソース] タブの [ブレード] および [LPAR] タブの一覧に表示されなくなります。

#### 関連項目

- 3.3.10 ブレードサーバを論理分割の対象から削除する
- 3.5.1 リソース情報の削除とは
- 4.9.5 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する
- 4.3.5 N+M コールドスタンバイグループからブレードを削除する

### 3.5.5 データベースからラックマウントサーバの情報を削除する

ラックマウントサーバを廃棄するときなど、Compute Systems Manager で管理対象とする必要がなくなった場合は、ラックマウントサーバの情報をデータベースから削除します。

1. [管理] タブで [管理リソース] を選択します。
2. [探索済みリソース] タブで [ラックマウント] タブを選択します。
3. サーバの一覧から、情報を削除するラックマウントサーバを選択します。
4. [リソース削除] をクリックします。
5. 情報を削除するラックマウントサーバを確認し、[OK] をクリックします。

ラックマウントサーバは管理対象から外れ、ラックマウントサーバに関するすべての情報が Compute Systems Manager データベースから削除されます。

#### 関連項目

- 3.5.1 リソース情報の削除とは

## 管理対象の操作

この章では、管理対象リソースに対して実行できる操作について説明します。

- 4.1 電源管理
- 4.2 ランプ操作
- 4.3 N+M コールドスタンバイの設定と運用
- 4.4 LPAR のマイグレーション
- 4.5 電力キャッピング
- 4.6 タスク管理
- 4.7 関連ソフトウェアと連携する場合の管理対象の操作
- 4.8 VMM と連携する場合の仮想リソースの操作
- 4.9 デプロイメントマネージャーの設定と運用
- 4.10 ファームウェアの更新

## 4.1 電源管理

遠隔地から管理対象リソースの電源を管理するための Compute Systems Manager の設定方法について説明します。

### 4.1.1 電源管理とは

リソースの管理インターフェース情報を BMC に登録するか、WoL を有効にすることで、管理クライアントから管理対象や HVM の電源を制御できます。電源の制御によって、ホストの OS の起動も操作できます。

電源管理は、操作する対象やその動作によって、操作の種類が異なります。

電源管理の操作の種類を次に示します。

#### 管理対象の電源 ON または起動

- 電源 ON  
ホスト、サーバ、または仮想マシンの電源を ON にします。  
ホストの電源を ON にすると、OS が起動します。  
サーバまたは仮想マシンの電源を ON にすると、ホストに OS またはゲスト OS がインストールされている場合は、OS も起動します。  
論理分割の機能を使用しているブレードサーバでは HVM も起動します。LPAR の設定によって、HVM 上の LPAR も起動します。
- 起動  
LPAR 上のホストに OS がインストールされている場合、OS を起動します。

#### 管理対象の電源 OFF または停止

- 強制電源 OFF  
ホスト、サーバ、または仮想マシン上の OS またはゲスト OS をシャットダウンしないで電源を OFF にします。
- 停止  
LPAR 上のホストの OS をシャットダウンしないで停止します。
- シャットダウン  
ホストの OS をシャットダウンしたあと、電源を OFF にします。  
HVM では、LPAR 上のホストの OS をシャットダウンしたあと、シャットダウンします。

#### 管理対象の再起動

- リブート  
ホストの OS をシャットダウンしたあと、電源を ON にします。
- リセット  
仮想マシンまたはサーバで、強制電源 OFF にしたあと、電源を ON にします。
- 再起動  
HVM をシャットダウン、または LPAR を停止したあと、起動します。  
HVM を再起動した場合、LPAR の設定によって、HVM 上の LPAR も起動します。



**重要** ハイパーバイザーとして稼働するホストでは、ハイパーバイザーの設定によって仮想マシンの電源が管理されます。

---



また、電源管理タスクのスケジュールを設定することで、次のように運用できます。

- ・ 毎週末にホストをシャットダウンする。
- ・ 毎月第 1 土曜日にホストをリブートする。
- ・ 毎週末、サーバをシャットダウンする。

#### 関連項目

- ・ 4.1.2 電源を管理するための確認事項
- ・ 4.1.5 ホストの電源を ON にする
- ・ 4.1.6 ホストをシャットダウンする
- ・ 4.1.7 ホストの電源を強制的に OFF にする
- ・ 4.1.8 ホストをリブートする
- ・ 4.1.9 仮想マシンの電源を ON にする
- ・ 4.1.10 仮想マシンをリセットする
- ・ 4.1.11 仮想マシンの電源を強制的に OFF にする
- ・ 4.1.12 サーバの電源を ON にする
- ・ 4.1.13 サーバをリセットする
- ・ 4.1.14 サーバの電源を強制的に OFF にする
- ・ 4.1.15 HVM をシャットダウンする
- ・ 4.1.16 HVM を再起動する
- ・ 4.1.17 LPAR を起動する
- ・ 4.1.18 LPAR を停止する
- ・ 4.1.19 LPAR を再起動する
- ・ 4.1.20 ホストの電源管理のスケジュール設定例
- ・ 4.1.21 サーバの電源管理のスケジュール設定例

## 4.1.2 電源を管理するための確認事項

管理対象の電源を管理する前に、確認しておく情報や完了しておく操作について説明します。

#### 事前に確認しておく情報

- ・ 電源を管理するホストの名称および IP アドレス
- ・ 電源を管理するブレードサーバの名称、そのブレードサーバを格納しているシャーシの名称、およびブレードのロット番号
- ・ 電源を管理するラックマウントサーバの名称および BMC の IP アドレス
- ・ 電源を管理する仮想マシンの名称、および仮想マシンが稼働しているハイパーバイザーの名称
- ・ 電源を管理する LPAR の名称、または LPAR の番号
- ・ LPAR が作成されている HVM の ID

#### 事前に確認しておく情報（日立製でないサーバ上のホストの電源を管理する場合）

- ・ BMC の IP アドレス
- ・ BMC の Admin 権限を持つユーザーの IPMI ログイン ID とパスワード

### 事前に完了しておく操作

- ホストに BMC を設定する（日立製でないサーバ上のホストの電源を管理する場合）
- 電源管理のタイムアウトを指定する（デフォルトの設定を変更する場合）
- リソース情報を更新して、最新の電源状態を確認する（任意）
- ハイパーバイザーで仮想マシンに関する電源管理を設定する（ハイパーバイザーの電源と連動して仮想マシンの電源を管理する場合）
- HVM の自動シャットダウンなどを設定する（HVM の電源を管理する場合）
- LPAR の自動アクティブ順序を設定する（LPAR の電源を管理する場合）
- 操作対象リソースに加えて、操作対象リソース上で動作するリソースが属するリソースグループをユーザーグループに割り当てる

### 関連項目

- 3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する
- 3.4.6 LPAR を作成する
- 3.4.7 LPAR の設定を変更する
- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.3 BMC を設定する
- 4.1.4 電源管理のタイムアウト時間を設定する
- 5.2.18 管理対象の情報の更新とは
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

## 4.1.3 BMC を設定する

日立製でないサーバにマウントされた物理ホストの電源を ON にしたり、強制的に OFF にしたりするには、電源管理を開始する前に、ホストに BMC の情報を設定します。



**重要** ホストに BMC が設定されていない場合、Compute Systems Manager は WoL を使用してホストの電源を ON にしようとします。ホストのネットワークアダプタの WoL を有効にしておく必要があります。WoL を有効にする方法については、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド」を参照してください。

1. [リソース] タブで BMC 設定を実施するホストを選択します。
2. [その他の操作] メニューから [BMC IP アドレス指定] をクリックします。
3. 必要な項目を入力し、[OK] をクリックします。



**重要** ホストの管理インターフェースへの接続時に、パスワードまたはユーザー名の使用がサポートされていない場合があります。そのような場合、[ユーザー ID を使用しない] または [パスワードを使用しない] を選択します。

BMC 設定を登録するホストの [BMC IP アドレス] 列に BMC IP アドレスが表示されます。このホストの電源を Compute Systems Manager で管理できるようになります。

### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

## 4.1.4 電源管理のタイムアウト時間を設定する

電源管理のタイムアウトを、電源管理の種類ごとに設定します。この操作は、デフォルトの設定値を変更したい場合や前回の設定を変更したい場合に実行してください。

1. [管理] タブから [システム設定] を選択します。
2. [タイムアウト] をクリックします。
3. [タイムアウト設定編集] をクリックします。
4. タイムアウト時間を秒単位で指定し、[OK] をクリックします。

新しい設定を確認するには、[管理] タブを選択し、[システム設定] - [タイムアウト] の順にクリックします。

### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)

## 4.1.5 ホストの電源を ON にする

ホストの電源を ON にします。



**重要** ハイパーバイザーとして稼働するホストの場合、ハイパーバイザーの設定によって、ハイパーバイザー上の仮想マシンの電源が制御されます。

1. [リソース] タブのホストの一覧から、電源を ON にするホストを選択します。
2. [電源制御] をクリックし、[電源 ON] を選択します。
3. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
4. [実行] ボタンをクリックします。

電源 ON の処理が開始されます。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、電源 ON の処理は続行されます。

管理対象ホストの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.6 ホストをシャットダウンする](#)
- [4.1.7 ホストの電源を強制的に OFF にする](#)

## 4.1.6 ホストをシャットダウンする

管理対象ホストをシャットダウンします。



**重要** ハイパーバイザーとして稼働するホストの場合、ハイパーバイザーの設定によって、ハイパーバイザー上の仮想マシンの電源が制御されます。

1. [リソース] タブのホストの一覧から、シャットダウンするホストを選択します。
2. [電源制御] をクリックし、[OS シャットダウン] を選択します。
3. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
4. [実行] をクリックします。

シャットダウンの処理が開始されます。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、シャットダウンの処理は続行されます。

管理対象ホストの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.5 ホストの電源を ON にする](#)

## 4.1.7 ホストの電源を強制的に OFF にする

OS を制御できないことを示すアラートが表示されたり、ホストのシャットダウンが失敗したりする場合、ホストの電源を強制的に OFF にします。

1. [リソース] タブのホストの一覧から、電源を強制的に OFF にするホストを選択します。
2. [電源制御] をクリックし、[強制電源 OFF] を選択します。
3. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
4. [実行] をクリックします。

スケジュールで指定した時間に、強制電源 OFF の処理が開始されます。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、シャットダウンの処理は続行されます。

管理対象ホストの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項
- 4.1.5 ホストの電源を ON にする

## 4.1.8 ホストをリポートする

管理対象ホストをリポートします。



**重要** ハイパーバイザーとして稼働するホストの場合、ハイパーバイザーの設定によって、ハイパーバイザー上の仮想マシンの電源が制御されます。

1. [リソース] タブのホスト一覧から、リポートするホストを選択します。
2. [電源制御] をクリックし、[OS 再起動] を選択します。
3. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
4. [実行] をクリックします。

リポートの処理が開始されます。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、リポートの処理は続行されます。

管理対象ホストの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

## 4.1.9 仮想マシンの電源を ON にする

仮想マシンの電源を ON にします。この操作は通常、ホストが搭載されていない仮想マシンに対して実行します。仮想マシンにホストが搭載されていれば、この操作によって、ゲスト OS も起動します。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [仮想マシン] を選択します。
3. ツリーを展開して、電源を ON にする仮想マシンのタイプを選択します。
4. 仮想マシンの一覧から、電源を ON にする仮想マシンを選択します。
5. [電源制御] をクリックし、[電源 ON] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。

- a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐ実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] をクリックします。  
電源 ON の処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、電源 ON の処理は Compute Systems Manager によって続行されます。

仮想マシンの電源状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.10 仮想マシンをリセットする](#)
- [4.1.11 仮想マシンの電源を強制的に OFF にする](#)

## 4.1.10 仮想マシンをリセットする

仮想マシンをリセットします。仮想マシンのリセットは、電源を強制的に OFF にしたあと、電源を ON にします。仮想マシン上のホストをリポートできない場合、このオプションを使用してホストの OS を再起動できます。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [仮想マシン] を選択します。
3. ツリーを展開し、電源をリセットする仮想マシンのタイプを選択します。
4. 仮想マシンの一覧から、電源をリセットする仮想マシンを選択します。  
複数の仮想マシンを同時に選択できます。
5. [電源制御] をクリックし、[電源リセット] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐ実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] をクリックします。  
電源リセットの処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、電源リセットの処理は続行されます。

仮想マシンの電源状態は、[リソース] タブで確認できます。

## 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

### 4.1.11 仮想マシンの電源を強制的に OFF にする

障害の発生によって仮想マシンが制御できず、通常の方法では電源を OFF にできない場合、管理対象の仮想マシンの電源を強制的に OFF にします。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [仮想マシン] を選択します。
3. ツリーを展開し、強制的に電源を OFF にする仮想マシンのタイプを選択します。
4. 仮想マシンの一覧から、強制的に電源を OFF にする仮想マシンを選択します。  
複数の仮想マシンを同時に選択できます。
5. [電源制御] をクリックし、[強制電源 OFF] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] ボタンをクリックします。  
強制電源 OFF の処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、強制電源 OFF の処理は続行されます。

仮想マシンの電源状態は、[リソース] タブで確認できます。

## 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項
- 4.1.9 仮想マシンの電源を ON にする

### 4.1.12 サーバの電源を ON にする

管理対象サーバの電源を ON にします。複数のブレードでサーバを構成している場合、サーバ単位で電源が ON になります。

サーバ上の仮想マシンや HVM も起動します。LPAR の設定によって、HVM 上の LPAR も起動します。



**重要** サーバにホストがマウントされている場合、OS も起動します。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] をクリックします。

3. ツリーを展開し、電源を ON にするサーバのタイプを選択します。
4. サーバの一覧から、電源を ON にするサーバを選択します。  
複数のサーバを同時に選択できます。
5. [電源制御] をクリックし、[電源 ON] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
7. 必要に応じて、[スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
8. [実行] ボタンをクリックします。  
電源 ON の処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、電源 ON の処理は続行されます。

管理対象サーバの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.13 サーバをリセットする](#)
- [4.1.14 サーバの電源を強制的に OFF にする](#)

### 4.1.13 サーバをリセットする

管理対象サーバをリセットします。サーバのリセットは、電源を強制的に OFF にしたあと、電源を ON にします。複数のブレードでサーバを構成している場合、サーバ単位でリセットします。



**重要** サーバ上のホストをリブートできない場合、このオプションを使用します。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] をクリックします。
3. ツリーを展開し、電源をリセットするサーバのタイプを選択します。
4. サーバの一覧から、電源をリセットするサーバを選択します。  
複数のサーバを同時に選択できます。
5. [電源制御] をクリックし、[電源リセット] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] をクリックします。  
電源リセットの処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。





重要 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、電源リセットの処理は続行されます。

管理対象サーバの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

### 4.1.14 サーバの電源を強制的に OFF にする

サーバを制御できないことを示すアラートが表示されたり、サーバの電源 OFF に失敗したりする場合、サーバの電源を強制的に OFF にします。複数のブレードでサーバを構成している場合、サーバ単位で強制的に電源を OFF にします。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] をクリックします。
3. ツリーを展開し、強制的に電源を OFF にするサーバのタイプを選択します。
4. サーバの一覧から、強制的に電源を OFF にするサーバを選択します。  
複数のサーバを同時に選択できます。
5. [電源制御] をクリックし、[強制電源 OFF] を選択します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. さらに、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] をクリックします。  
強制電源 OFF の処理が開始されます。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



重要 処理中に Compute Systems Manager をログアウトしても、強制電源 OFF の処理は続行されます。

管理対象サーバの電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項
- 4.1.12 サーバの電源を ON にする

### 4.1.15 HVM をシャットダウンする

HVM をシャットダウンします。この操作では、LPAR 上のホストや、HVM 上の LPAR を停止したあとで、HVM をシャットダウンします。サーバの電源も OFF にします。

1. [リソース] タブで、[シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ブレード] を選択します。
2. サーバの一覧から、HVM をシャットダウンしたいサーバを選択します。

3. [電源制御] ボタンをクリックし、[HVM 電源 OFF] を選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されるプランを確認します。
5. 必要に応じて、[スケジュール設定] を開いてタスクのスケジュールを設定します。  
タスクをあとで実行したり、繰り返し実行したりできます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
6. [実行] ボタンをクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

HVM の電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項
- 4.1.12 サーバの電源を ON にする

### 4.1.16 HVM を再起動する

HVM を再起動します。LPAR の設定によって、HVM 上の LPAR と、LPAR 上のホストも起動します。

1. [リソース] タブで、[シャーン & サーバ] - [サーバ] - [ブレード] を選択します。
2. サーバの一覧から、HVM を再起動したいサーバを選択します。
3. [電源制御] ボタンをクリックし、[HVM 再起動] を選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されるプランを確認します。
5. 必要に応じて、[スケジュール設定] を開いてタスクのスケジュールを設定します。  
タスクをあとで実行したり、繰り返し実行したりできます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
6. [実行] ボタンをクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

HVM の電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

### 4.1.17 LPAR を起動する

停止している LPAR を起動します。

#### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

LPAR を起動する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで、[シャーン & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、起動したい LPAR を選択します。
3. [電源制御] ボタンをクリックし、[Activate] を選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されるプランを確認します。

5. 必要に応じて、[スケジュール設定] を開いてタスクのスケジュールを設定します。  
タスクをあとで実行したり、繰り返し実行したりできます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
6. [実行] ボタンをクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR の電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.18 LPAR を停止する](#)
- [4.1.19 LPAR を再起動する](#)

## 4.1.18 LPAR を停止する

LPAR 上のホストが異常停止した場合などに LPAR を停止します。

1. [リソース] タブで、[シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、停止したい LPAR を選択します。
3. [電源制御] ボタンをクリックし、[Deactivate] を選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されるプランを確認します。
5. 必要に応じて、[スケジュール設定] を開いてタスクのスケジュールを設定します。  
タスクをあとで実行したり、繰り返し実行したりできます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
6. [実行] ボタンをクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR の電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.1.2 電源を管理するための確認事項](#)
- [4.1.17 LPAR を起動する](#)

## 4.1.19 LPAR を再起動する

LPAR 上のホストが異常停止した場合などに LPAR を再起動します。

1. [リソース] タブで、[シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、再起動したい LPAR を選択します。
3. [電源制御] ボタンをクリックし、[Reactivate] を選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されるプランを確認します。
5. 必要に応じて、[スケジュール設定] を開いてタスクのスケジュールを設定します。  
タスクをあとで実行したり、繰り返し実行したりできます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
6. [実行] ボタンをクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR の電源の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.2 電源を管理するための確認事項

### 4.1.20 ホストの電源管理のスケジュール設定例

異なるシナリオ向けに電源管理のスケジュールを設定できます。多くの場合、同じ結果をもたらすスケジュールの組み合わせが複数あります。特定の結果を達成するために使用する、ホストの電源管理のスケジュール設定例を次に示します。

#### 例 1：毎週末、ホストをシャットダウンする場合

毎週末、ホストをシャットダウンするために、次の 2 つのタスクを作成します。

図 4-1 毎週金曜日の 23:00 にホストをシャットダウンするタスク

OSシャットダウンプラン確認

OSシャットダウンプランを確認し、[実行]をクリックしてください。あとで実行、または繰り返し実行する場合は、スケジュール設定を開き、スケジュールリングしてください。

★ プランサマリー		
OSシャットダウン	ユーザーID	System
	ターゲット種別	ホスト
	E-mail通知	通知しない
	E-mail通知アドレス	
	ホストのOSシャットダウン完了までの最大待ち時間[秒]	300
	ハイパーバイザーとゲストOSのシャットダウン完了までの最大待ち時間[秒]	600

✖ プラン詳細

タスク名: \* OSシャットダウン-1

説明:

★ スケジュール設定

今すぐ実行

あとで実行:

日付: 2014-02-12

時刻: 17:47

繰り返し:

繰り返しタイプ: \* 毎週

時刻: \* 23:00

周期: 毎週

日  月  火  水

木  金  土

開始日時: \* 2014-04-01

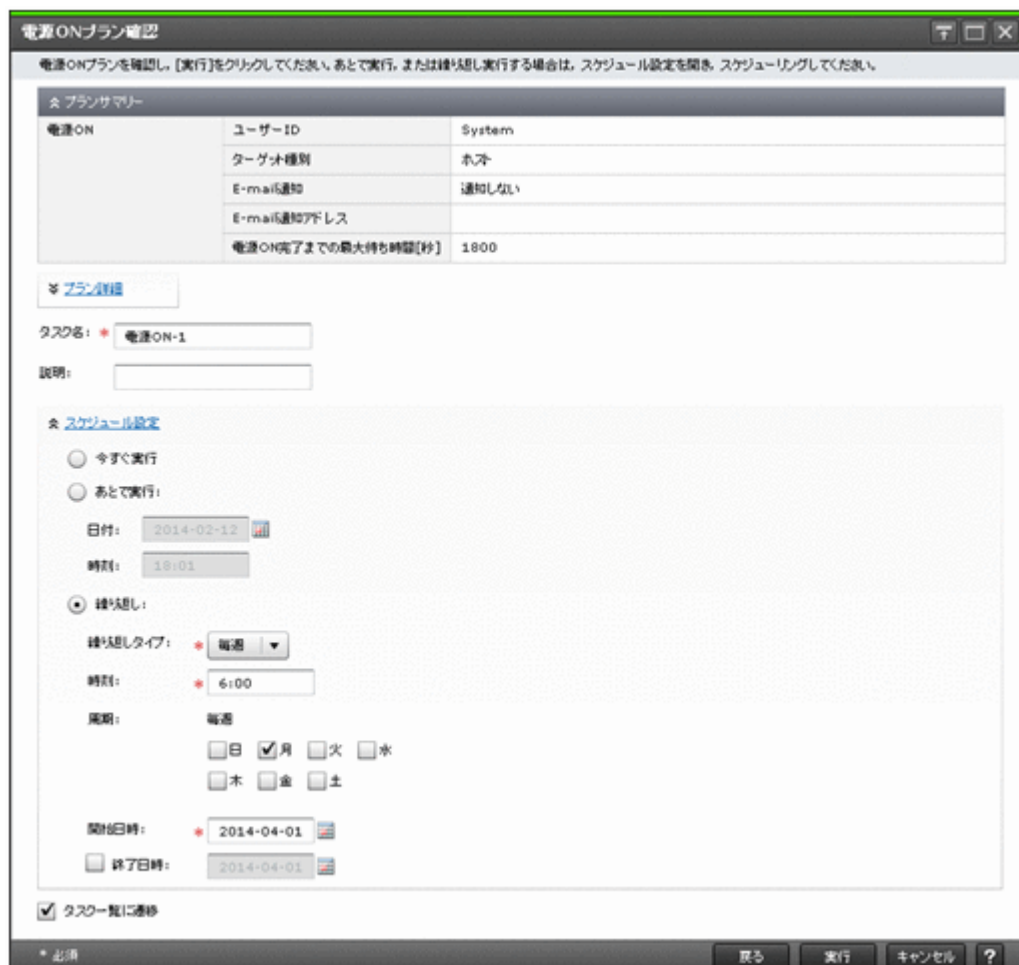
終了日時: 2014-04-01

タスク一覧に遷移

\* 必須

戻る 実行 キャンセル ?

図 4-2 毎週月曜日の 6:00 にホストの電源を ON にするタスク



#### 例 2 : 金曜日（2012 年 5 月 4 日）が休業日のため、前日の木曜日にホストをシャットダウンする場合

例 1 の設定を使用し、2012 年 5 月 4 日の週だけ木曜日の夜にホストをシャットダウンする場合は、次の操作を実施します。

1. 例 1 のタスクのスケジュールを、終了日が 2012 年 5 月 3 日になるよう変更する。
2. 2012 年 5 月 3 日の 23:00 にホストをシャットダウンするタスクを作成する。
3. 毎週金曜日の 23:00 にホストをシャットダウンするタスクを作成し、タスクの開始日を 2012 年 5 月 5 日に設定する。

#### 例 3 : 毎月第 1 土曜日にホストをリポートする場合

毎月第 1 土曜日にホストをリポートするには、次のタスクを作成します。

- ・ 毎月第 1 土曜日の 23:00 にホストをリポートするタスク

#### 例 4 : 今月だけホストをリポートしない場合

例 3 の設定を使用している場合で、今月だけホストをリポートしないようにするには、次の操作を実施します。

- ・ 来月からホストを定期的のリポートするように、タスクのスケジュールを変更する。

## 関連項目

- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.5 ホストの電源を ON にする
- 4.1.6 ホストをシャットダウンする
- 4.1.8 ホストをリブートする

### 4.1.21 サーバの電源管理のスケジュール設定例

サーバの電源管理のスケジュール設定例を次に示します。

LPAR が稼働しているサーバと論理分割の機能を使用していないサーバが混在する構成の場合、論理分割の設定によって作成するタスクが変わることがあります。

#### 例 1：毎週末、サーバをシャットダウンする場合

毎週末、サーバをシャットダウンするために、次の 2 つのタスクを作成します。

図 4-3 毎週金曜日の 23:00 にサーバ上のホストをシャットダウンするタスク

OSシャットダウンプラン確認

OSシャットダウンプランを確認し、[実行]をクリックしてください。あとで実行、または繰り返し実行する場合は、スケジュール設定を開き、スケジュールリングしてください。

プランサマリー		
OSシャットダウン	ユーザー ID	System
	ターゲット種別	ホスト
	E-mail通知	通知しない
	E-mail通知アドレス	
	ホストのOSシャットダウン完了までの最大待ち時間[秒]	300
	ハイパーバイザーとゲストOSのシャットダウン完了までの最大待ち時間[秒]	600

タスク名: \* OSシャットダウン-1

説明:

スケジュール設定

今すぐ実行

あとで実行:

日付: 2014-02-12

時刻: 17:47

繰り返し:

繰り返しタイプ: \* 毎週

時刻: \* 23:00

周期: 毎週

日  月  火  水

木  金  土

開始日時: \* 2014-04-01

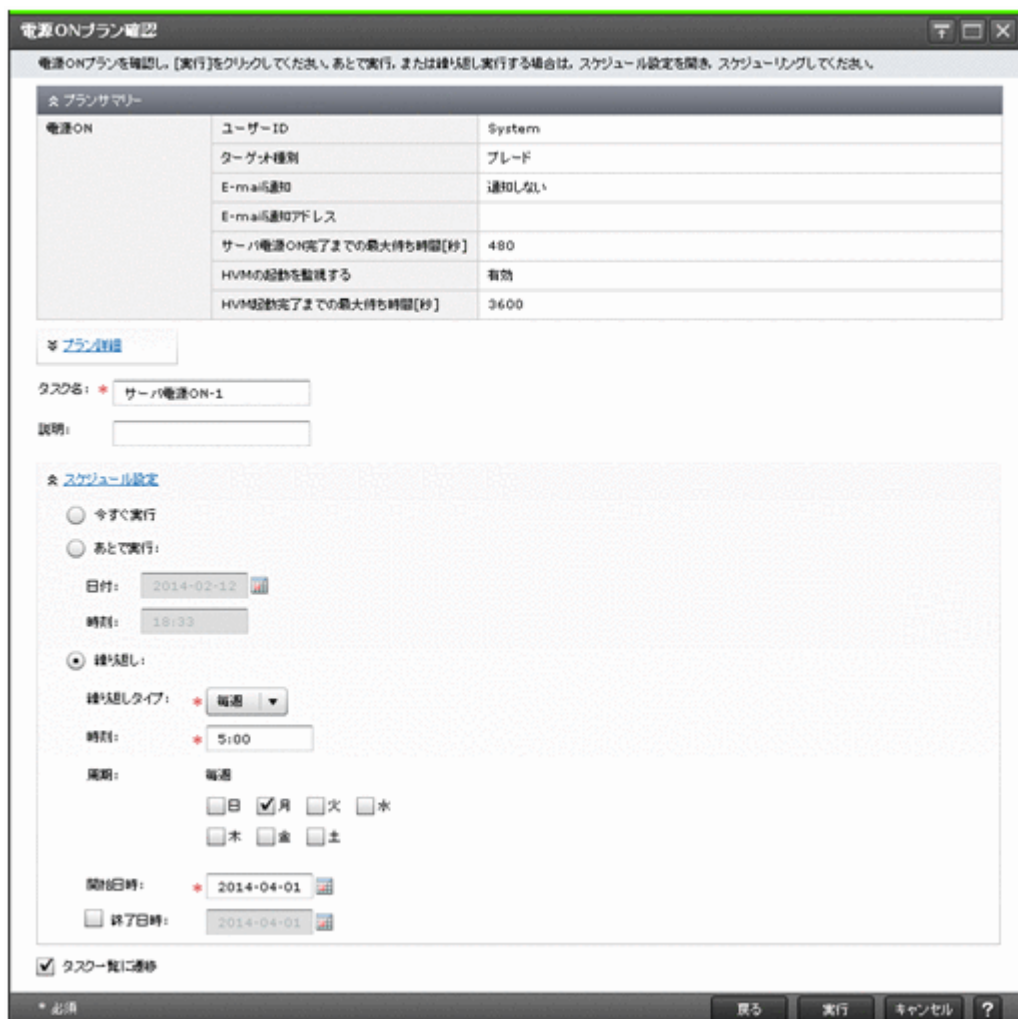
終了日時: 2014-04-01

タスク一覧に遷移

\* 必須

戻る 実行 キャンセル ?

図 4-4 毎週月曜日の 5:00 にサーバの電源を ON にするタスク



例 2：毎週末、LPAR が稼働しているサーバが混在している構成で、サーバをシャットダウンする場合

LPAR が稼働しているサーバが混在している構成で、毎週末、サーバをシャットダウンするために、次の 4 つのタスクを作成します。

図 4-5 毎週金曜日の 23:00 に LPAR が稼働していないサーバ上のホストをシャットダウンするタスク

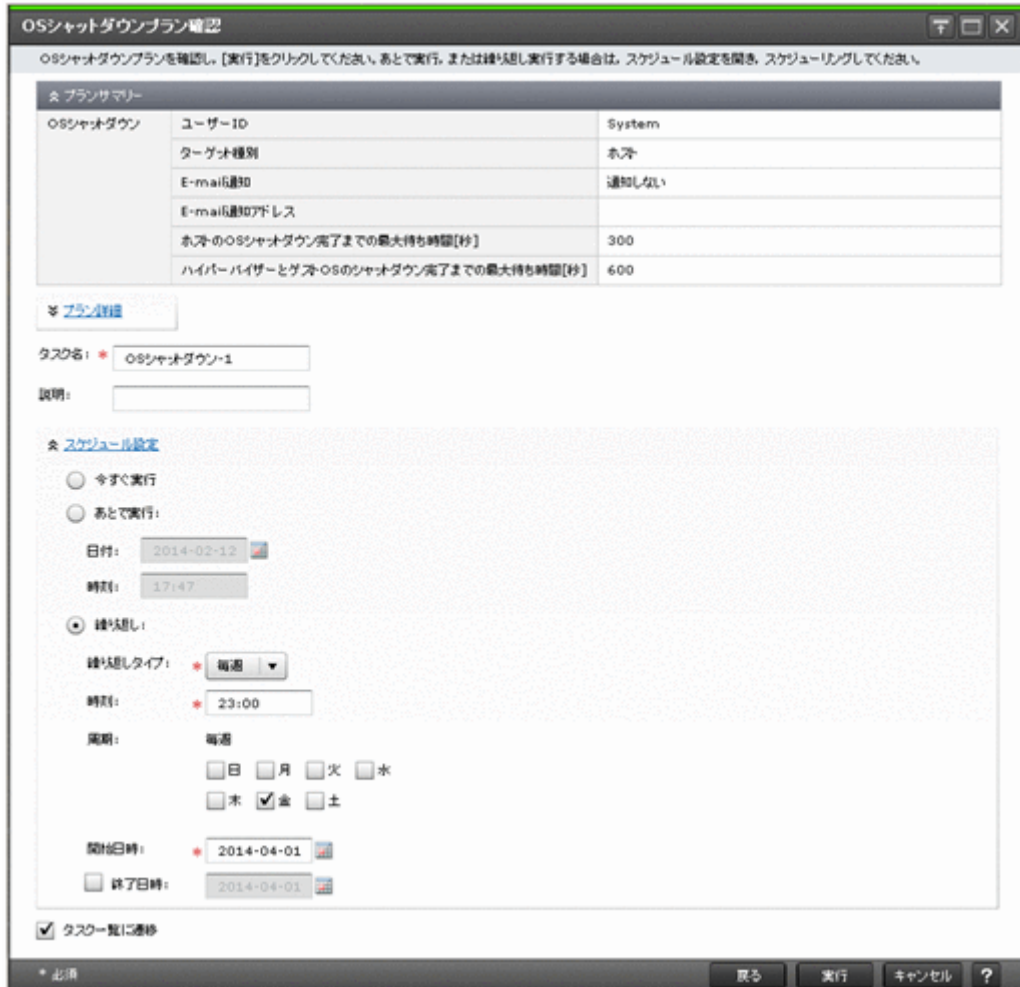




図 4-6 毎週金曜日の 23:00 に LPAR が稼働している HVM をシャットダウンするタスク

HVM電源OFFプラン確認

HVM電源OFFプランを確認し、[実行]をクリックしてください。あとで実行、または繰り返し実行する場合は、スケジュール設定を開き、スケジュールングしてください。

プランサマリー		
HVM電源OFF	ユーザーID	System
	ターゲット種別	Blade
	E-mail通知	通知しない
	E-mail通知アドレス	
	OSシャットダウン完了までの最大待ち時間[秒]	300
	HVM電源OFF完了までの最大待ち時間[秒]	300
	OSシャットダウン失敗時、LPARを強制的にDeactivateする	無効

プラン詳細

タスク名: \* HVM電源OFF-1

説明:

スケジュール設定

今すぐ実行  
 あとで実行:  
 日付: 2014-02-12  
 時刻: 18:48  
 繰り返し:  
 繰り返しタイプ: \* 毎週  
 時刻: \* 23:00  
 周期: 毎週  
 日  月  火  水  
 木  金  土  
 開始日時: \* 2014-04-01  
 終了日時: 2014-04-01

タスク一覧に遷移

\* 必須

戻る 実行 キャンセル ?

図 4-7 毎週月曜日の 5:00 にサーバの電源を ON にするタスク

電源ONプラン確認

電源ONプランを確認し、[実行]をクリックしてください。あとで実行、または繰り返し実行する場合は、スケジュール設定を開き、スケジュールリングしてください。

* プランサマリー		
電源ON	ユーザーID	System
	ターゲット種別	ブレード
	E-mail通知	通知しない
	E-mail通知アドレス	
	サーバ電源ON完了までの最大待ち時間[秒]	480
	HVMの起動を監視する	有効
	HVM起動完了までの最大待ち時間[秒]	3600

※ プラン詳細

タスク名: \* サーバ電源ON-1

説明:

\* スケジュール設定

今すぐ実行  
 あとで実行:  
 日付: 2014-02-12  
 時刻: 18:33

繰り返し:  
 繰り返しタイプ: \* 毎週  
 時刻: \* 5:00  
 周期: 毎週  
 日  月  火  水  
 木  金  土

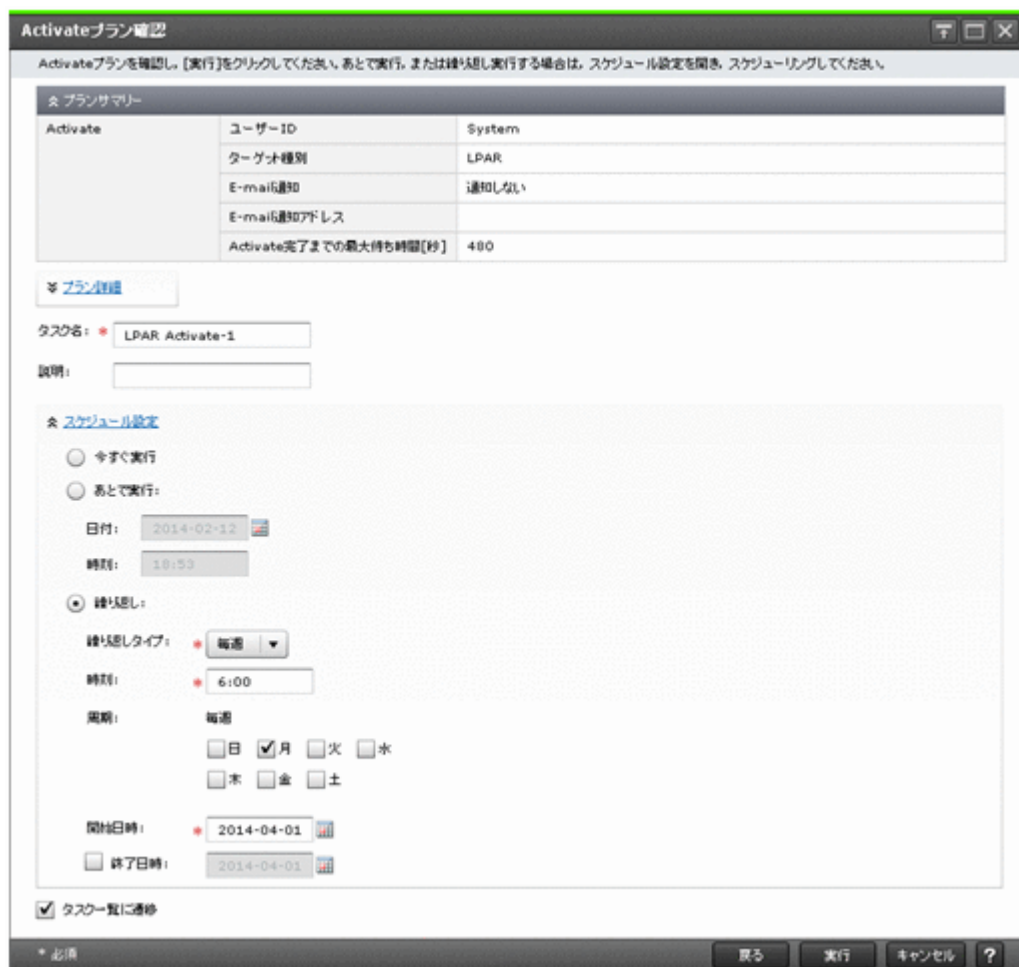
開始日時: \* 2014-04-01  
 終了日時: 2014-04-01

タスク一覧に追加

\* 必須

戻る 実行 キャンセル ?

図 4-8 毎週月曜日の 6:00 に LPAR を起動するタスク



LPAR が稼働しているサーバで、HVM の自動シャットダウンと LPAR の自動アクティブ順序を設定した場合、上記 4 つのタスクを作成する必要はありません。例 1 のタスクを作成することで、スケジュールを設定できます。

#### 関連項目

- 3.4.3 論理分割の拡張設定を変更する
- 3.4.6 LPAR を作成する
- 3.4.7 LPAR の設定を変更する
- 4.1.1 電源管理とは
- 4.1.6 ホストをシャットダウンする
- 4.1.12 サーバの電源を ON にする
- 4.1.15 HVM をシャットダウンする
- 4.1.17 LPAR を起動する

## 4.2 ランプ操作

Compute Systems Manager を使用して、管理対象サーバまたはシャーンの LID を操作できます。

## 4.2.1 ランプ操作とは

マシン室にあるサーバまたはシャーシに障害が発生した場合など、管理クライアントから LID を点灯または消灯させることで、障害が発生したサーバまたはシャーシを特定できます。

制御できる LID は、次の場所にあります。

- シャーシのフロントパネル
- シャーシの各モジュール
- ブレードサーバ
- ラックマウントサーバ

ブレードサーバの LID を操作するには、ブレードサーバの一覧からサーバを選択するか、シャーシの一覧からブレードを選択します。複数のブレードでサーバを構成している場合、ブレードサーバの一覧でサーバを選択して LID を操作すると、サーバを構成するすべてのブレードの LID が点灯または消灯します。

### 関連項目

- [4.2.2 シャーシのランプを操作する](#)
- [4.2.3 シャーシのモジュールのランプを操作する](#)
- [4.2.4 サーバのランプを操作する](#)

## 4.2.2 シャーシのランプを操作する

シャーシを構成するモジュールやブレードサーバに障害が発生した場合など、該当するシャーシを特定したいときにシャーシのフロントパネルの LID を点灯させます。また、シャーシの確認後は LID を消灯させます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [シャーシ] - [シャーシ] の順に選択します。
3. シャーシの一覧から LID を操作したいシャーシを選択します。
4. [その他の操作] をクリックし、[LID 点灯] または [LID 消灯] を選択します。
5. [OK] をクリックします。

LID の状態は、[リソース] タブで確認できます。

### 関連項目

- [4.2.1 ランプ操作とは](#)

## 4.2.3 シャーシのモジュールのランプを操作する

シャーシのモジュールに障害が発生した場合など、該当するモジュールを特定したいときに LID を点灯させます。また、モジュールの確認後は LID を消灯させます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [シャーシ] - [シャーシ] の順に選択します。
3. [シャーシ名] のリンクをクリックします。
4. LID を操作したいモジュールのタブを選択します。
5. [状態] タブで [LID 点灯] または [LID 消灯] をクリックします。
6. [OK] をクリックします。

LID の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- ・ 4.2.1 ランプ操作とは

## 4.2.4 サーバのランプを操作する

サーバに障害が発生した場合など、該当するサーバを特定したいときに LID を点灯させます。また、サーバの確認後は LID を消灯させます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] をクリックします。
3. ツリーを展開し、サーバの種類を選択します。
4. サーバの一覧から、LID を操作したいサーバを選択します。
5. [その他の操作] をクリックし、[LID 点灯] または [LID 消灯] を選択します。
6. [OK] をクリックします。

LID の状態は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- ・ 4.2.1 ランプ操作とは

## 4.3 N+M コールドスタンバイの設定と運用

N+M コールドスタンバイグループを作成して切り替えテストを実行することで、エラーがないかどうかを調べ、N+M コールドスタンバイの切り替えプランを確認できます。また、現用ブレードと予備ブレードを追加できます。ブレードのステータスの確認、現用ブレードから予備ブレードへの手動による切り替え、予備ブレードから現用ブレードへの切り戻し、ブレードの初期ステータスへの回復ができます。

### 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは

Compute Systems Manager は、N+M コールドスタンバイに対応しています。コールドスタンバイとは、エラー発生時に現用ブレードの代わりに予備ブレードが稼働されるように、多数の現用ブレード (N) に対して複数の予備ブレード (M) を電源 OFF の状態で用意しておくことです。

このタスクを実行するには、N+M コールドスタンバイのライセンスを登録しておく必要があります。

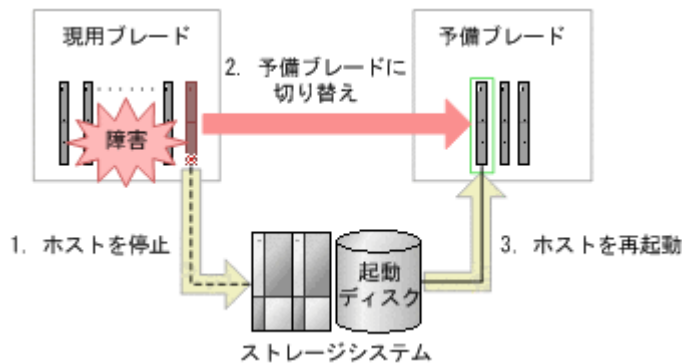
日立製ブレードサーバを使用している場合、ブレードを N+M コールドスタンバイの構成にできません。N+M コールドスタンバイグループをあらかじめ構成しておくこと、現用ブレードでエラーが発生した場合、その現用ブレードは同一グループ内の予備ブレードに自動的に切り替わります。現用ブレードでタスクを実行していたホストは切り替え後、予備ブレードで再起動され、運用を再開します。

また、切り替え先の予備ブレードを診断することで、異常がある予備ブレードを事前に検知できます。予備ブレードは、定期的に、または手動で診断できます。異常がある予備ブレードは自動的に切り替えの対象外になります。

N+M コールドスタンバイには、次のような利点があります。

- 複数の現用ブレードに対して必要な予備ブレードは1台だけなので、低コストでシステムの可用性が向上します。
- 複数の予備ブレードを構成した場合、複数の現用ブレードでエラーが発生しても、切り替え機能によって運用を続行できます。

N+M コールドスタンバイの概要を、次の図に示します。



エラーに対処したあと、予備ブレードから現用ブレードに切り戻しを実行することで、現用ブレードで運用を再開できます。または、予備ブレードを現用ブレードに変更することで、予備ブレードで運用を続行することもできます。

#### 関連項目

- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する](#)
- [4.3.4 N+M コールドスタンバイグループにブレードを追加する](#)
- [4.3.5 N+M コールドスタンバイグループからブレードを削除する](#)
- [4.3.6 予備ブレードを手動で診断する](#)
- [4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする](#)
- [4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する](#)
- [4.3.9 予備ブレードから現用ブレードに切り戻す](#)
- [4.3.10 予備ブレードを現用ブレードに変更する](#)
- [4.3.11 現用ブレードを予備ブレードに手動で切り替える](#)
- [4.3.12 切り替えに失敗したブレードの状態を元に戻す](#)
- [6.2.17 自動アカウントロックを設定する](#)

## 4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項

N+M コールドスタンバイを構成するには、次の事項を確認しておく必要があります。

#### ブレードのハードウェアの状態

現用および予備のブレードが同じ機種である必要があります。そのほかのブレードのハードウェア条件または設定の詳細については、ブレードサーバのマニュアルを参照してください。

#### ブレードの状態

切り替え時の予備ブレード、および切り戻し時の現用ブレードが、次の状態であること。

- 電源 OFF
- 障害が発生していない
- 管理対象である

## 事前に完了しておく操作

- N+M コールドスタンバイグループの作成
- N+M コールドスタンバイの切り替えテスト

現用ブレードと予備ブレードのすべての組み合わせ、または特定の組み合わせのどちらかでテストできます。

すべての組み合わせでテストする場合、所要時間は割り当てられた予備ブレードの数によって決まります。[全サーバテスト] チェックボックスを同時に選択すれば、現用ブレードから予備ブレードの、最低限の組み合わせで切り替えおよび切り戻しがテストされ、時間を短縮できます。

また、切り替え後から切り戻し開始までの待ち時間を、必要に応じて設定します。予備ブレードに、ホストまたは仮想マシン上のホストがある場合、ホストのサービスが起動するまでの時間を考慮して設定してください。

## 関連項目

- 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは
- 4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する
- 4.3.4 N+M コールドスタンバイグループにブレードを追加する
- 4.3.6 予備ブレードを手動で診断する
- 4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする

## 4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する

N+M コールドスタンバイグループを作成し、現用ブレードと予備ブレードを割り当てられます。グループを作成すると、現用ブレードと予備ブレードの間で N+M コールドスタンバイテスト（切り替えおよび切り戻し）を実施できます。

### 事前に確認しておく情報

- 自動切り替え時の遅延時間およびタイムアウトの設定  
N+M コールドスタンバイグループ作成時の詳細設定で、デフォルト値と異なる値を指定する場合には、設定する値を決めておいてください。  
自動切り替え時の遅延時間は、ログファイルが生成される時間を確保できるように指定します。また、タイムアウトの設定は、起動およびシャットダウンの時間を考慮して、切り替えまたは切り戻しのタスクが完了するまでの待ち時間を指定します。

N+M コールドスタンバイを設定する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. [グループ作成] をクリックします。
3. ウィザードに表示される指示に従って、N+M コールドスタンバイグループを作成し、現用ブレードと予備ブレードを割り当てます。  
必要に応じて、定期的に診断する予備ブレードとスケジュールを登録します。
4. サマリーが表示される画面で、N+M コールドスタンバイの設定を確認します。  
必要に応じて、[詳細設定] を展開し、自動切り替え時のメール通知方法および遅延時間、ならびにタイムアウトを設定します。  
実稼働環境で N+M コールドスタンバイを使用するには、切り替えテスト（切り替えおよび切り戻し）を実行しておく必要があります。必ず [続けて N+M コールドスタンバイテスト設定をします。] オプションを選択してください。
5. [実行] をクリックします。

N+M コールドスタンバイグループが作成されます。

6. グループに含まれる現用ブレードと予備ブレードの間で、N+M コールドスタンバイの切り替えテストを実施します。  
実施するテストを選択し、必要な項目を設定します。
7. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、切り替え後から切り戻し開始までの待ち時間などを設定します。
8. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. さらに、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
9. [実行] をクリックします。  
N+M コールドスタンバイテストが開始されます。

テストの進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。また、タスクの詳細を表示して、N+M コールドスタンバイが完了しているかどうかを確認できます。

N+M コールドスタンバイグループは、[リソース] タブからも確認できます。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする](#)
- [7.1.2 トラブルシューティング事例](#)

## 4.3.4 N+M コールドスタンバイグループにブレードを追加する

既存の N+M コールドスタンバイグループに、現用ブレードまたは予備ブレードを追加します。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、ブレードを追加したい [グループ名] のリンクをクリックします。
3. [現用ブレード] または [予備ブレード] タブを選択します。
4. [現用ブレード編集] または [予備ブレード編集] をクリックします。
5. [現用ブレード] または [予備ブレード] ダイアログで、追加するブレードを選択し、[追加] をクリックします。  
予備ブレードの場合、必要に応じて、定期的に診断するブレードとスケジュールを登録します。
6. [OK] をクリックします。

追加した現用ブレードまたは予備ブレードで、N+M コールドスタンバイの切り替えおよび切り戻しをテストします。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする](#)



## 4.3.5 N+M コールドスタンバイグループからブレードを削除する

既存の N+M コールドスタンバイグループから、不要となった現用ブレードまたは予備ブレードを削除します。

### 事前に確認しておく情報

- 対象のブレードが削除できる状態である  
[現用ブレード] または [予備ブレード] タブにある切り替え状態が、空白であることを確認してください。

N+M コールドスタンバイグループからブレードを削除する手順を次に示します。

- [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
- N+M コールドスタンバイグループの一覧で、ブレードを削除したい [グループ名] のリンクをクリックします。
- [現用ブレード] または [予備ブレード] タブを選択します。
- [現用ブレード編集] または [予備ブレード編集] をクリックします。
- [現用ブレード] または [予備ブレード] ダイアログで、削除するブレードを選択し、[削除] をクリックします。
- 画面の指示に従い、[OK] をクリックします。

### 関連項目

- 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは

## 4.3.6 予備ブレードを手動で診断する

障害が発生している予備ブレードがあるか、手動で診断します。

### 事前に完了しておく操作

- 診断する予備ブレードの電源 OFF

予備ブレードを手動で診断する手順を次に示します。

- [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
- N+M コールドスタンバイグループの一覧で、診断したい予備ブレードを含む [グループ名] のリンクをクリックします。
- [予備ブレード] タブを選択します。
- 診断したい予備ブレードを一覧から選択して、[予備ブレード診断] をクリックします。
- [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。  
タスク名を更新したり、説明を入力したりできます。  
また、[スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定できます。
- [実行] をクリックします。

診断の進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。また、タスクの詳細を表示して、予備ブレードの診断が完了しているかどうかを確認できます。

また、予備ブレードの診断結果は、N+M コールドスタンバイグループの [予備ブレード] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.14 サーバの電源を強制的に OFF にする
- 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは
- 4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する
- 4.3.4 N+M コールドスタンバイグループにブレードを追加する

### 4.3.7 N+M コールドスタンバイをテストする

既存の N+M コールドスタンバイグループに現用ブレードや予備ブレードを追加した場合、そのグループを選択し、N+M コールドスタンバイの（切り替えおよび切り戻し）テストを実施します。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、テストを実施したいグループの [グループ名] のリンクをクリックします。
3. [切り替えペア] タブで、テストを実施するグループを選択し、[N+M コールドスタンバイテスト] をクリックします。
4. 実施するテストを選択し、必要な項目を設定します。
5. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、切り替え後から切り戻し開始までの待ち時間などを設定します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
7. [実行] をクリックします。  
N+M コールドスタンバイテストが開始されます。

テストの進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。タスクの詳細を表示して、N+M コールドスタンバイが完了しているかどうかを確認できます。

#### 関連項目

- 4.3.1 N+M コールドスタンバイとは
- 4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項
- 7.1.2 トラブルシューティング事例

### 4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する

現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認できます。例えば、ブレードが通常どおり運用されているか、切り替え機能が正しく実行されているかなどを確認できます。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、状態を確認したいグループの [グループ名] をクリックします。
3. [切り替えペア] タブで、切り替え状態を確認します。
4. [現用ブレード] タブをクリックして、現用ブレードの詳細情報を確認します。
5. [予備ブレード] タブをクリックして、予備ブレードの詳細情報を確認します。

現用ブレードでエラーが発生し、管理対象ホストで予備ブレードへの切り替えが実行された場合、[タスク & アラート] タブで、現用ブレードから受信されたアラートの詳細や、切り替え処理の進捗状況および実行結果を確認できます。



**重要** Compute Systems Manager の停止中にシャーンまたは現用ブレードでエラーが発生した場合、Compute Systems Manager が起動しても、自動的に切り替えは実行されません。その場合、必要に応じて、切り替えを手動で実行する必要があります。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.11 現用ブレードを予備ブレードに手動で切り替える](#)
- [7.1.2 トラブルシューティング事例](#)

### 4.3.9 予備ブレードから現用ブレードに切り戻す

現用ブレードの障害が解決したあとに、予備ブレードから現用ブレードへの切り戻しを実行できます。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、切り戻しを実行する予備ブレードを含むグループの [グループ名] のリンクをクリックします。
3. [切り替えペア] タブを選択します。
4. 切り戻しを実行する切り替えペアを選択し、[現用ブレードへの切り戻し] をクリックします。
5. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、現用ブレードの電源状態などを設定します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
7. 必要に応じて [スケジュール設定] を開き、タスクのスケジュールを指定します。タスクは、すぐに実行することも、あとで実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
8. [実行] をクリックします。  
切り戻し処理が開始されます。

N+M コールドスタンバイグループの [切り替えペア] タブで、切り戻しの結果を確認します。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する](#)

### 4.3.10 予備ブレードを現用ブレードに変更する

Compute Systems Manager によってブレードが予備に切り替わったあと、そのブレードを現用に変更して運用を続行できます。変更前の現用ブレードは、N+M コールドスタンバイグループから自動的に外れます。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、現用ブレードに変更する予備ブレードを含むグループの [グループ名] のリンクをクリックします。
3. [切り替えペア] タブを選択します。

4. 予備ブレードから現用ブレードにしたい組み合わせを選択し、[予備ブレードの現用化] ボタンをクリックします。
5. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
6. [実行] をクリックします。  
予備ブレードから現用ブレードに変更する処理が開始されます。

N+M コールドスタンバイグループの [切り替えペア] タブで、予備ブレードを現用ブレードに変更した結果を確認します。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する](#)

### 4.3.11 現用ブレードを予備ブレードに手動で切り替える

ブレードサーバ環境の移行や定期的なテストのために、現用ブレードから予備ブレードへの切り替えを手動で実行できます。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、予備ブレードに手動で切り替える現用ブレードを含むグループの [グループ名] のリンクをクリックします。
3. [現用ブレード] タブで予備ブレードに切り替える現用ブレードを選択し、[予備ブレードへの切り替え] をクリックします。
4. 予備ブレードの一覧から、切り替える予備ブレードを選択します。
5. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、切り替える予備ブレードの電源状態などを設定します。
6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
7. 必要に応じて [スケジュール設定] を開き、タスクのスケジュールを指定します。タスクは、すぐに実行することも、あとで実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
8. [実行] をクリックします。  
手動切り替え処理が開始されます。

N+M コールドスタンバイグループの [切り替えペア] タブで、手動で切り替えた結果を確認します。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する](#)

### 4.3.12 切り替えに失敗したブレードの状態を元に戻す

Compute Systems Manager が切り替えに失敗した場合、切り替えに失敗した原因を調査して対処します。その後、現用ブレードおよび予備ブレードの切り替え状態を解除して、元の状態に戻します。

切り替えに失敗したブレードの状態を元に戻す手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [N+M コールドスタンバイグループ] を選択します。
2. N+M コールドスタンバイグループの一覧で、切り替えに失敗したブレードを含むグループの [グループ名] をクリックします。
3. [切り替えペア] タブで、切り替え状態が [失敗] と表示されている行を選択します。
4. [切り替え状態復旧] をクリックします。
5. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示される現用および予備のブレードの組み合わせを確認します。
6. [実行] をクリックします。

選択した行は N+M コールドスタンバイグループの [切り替えペア] タブに表示されなくなり、ブレードが切り替えられる状態になります。

#### 関連項目

- [4.3.1 N+M コールドスタンバイとは](#)
- [4.3.2 N+M コールドスタンバイを運用するための確認事項](#)
- [4.3.8 現用ブレードおよび予備ブレードの状態を確認する](#)
- [7.1.2 トラブルシューティング事例](#)

## 4.4 LPAR のマイグレーション

### 4.4.1 LPAR のマイグレーションとは

Compute Systems Manager では、あるブレードサーバに作成された LPAR を異なるブレードサーバに移動できます。

LPAR をマイグレーションすることで、ブレードサーバの可用性を向上したり、リソースを有効活用したりできます。

LPAR は次のどちらかの方法でマイグレーションできます。

- 停止している LPAR を対象にマイグレーション  
これを、シャットダウンモードでのマイグレーションと呼びます。
- 起動している LPAR を対象にマイグレーション  
これを、コンカレントメンテナンスモードでのマイグレーションと呼びます。  
停止している LPAR を対象にマイグレーションするよりも、マイグレーション完了までに時間が掛かります。

LPAR をマイグレーションする場合は、事前にシャットダウンモードでテストを実施することをお勧めします。

#### 関連項目

- [4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項](#)
- [4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする](#)
- [4.4.4 停止している LPAR をマイグレーションする](#)
- [4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする](#)
- [4.4.6 LPAR のマイグレーションの失敗を復旧する](#)
- [4.4.7 コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する](#)

## 4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項

LPAR, ブレードサーバ, および管理サーバについて, LPAR をマイグレーションする前に確認しておく情報および完了しておく操作を説明します。

### 事前に確認しておく情報

- LPAR をマイグレーションするための LPAR およびブレードサーバの前提条件  
前提条件は, それぞれのモードでマイグレーションするときに表示される次の画面で確認できません。
  - [シャットダウンマイグレーションプラン] 画面
  - [コンカレントメンテナンスマイグレーションプラン] 画面LPAR をマイグレーションするための前提条件の詳細については, ブレードサーバのマニュアルを参照してください。

### 事前に完了しておく操作

- 移動元および移動先に指定するブレードサーバ上の HVM の起動
- 移動元および移動先に指定するブレードサーバ上の HVM の構成情報をバックアップ  
障害が発生した場合に備えて, Web コンソールで HVM の構成情報をバックアップします。HVM の構成情報のバックアップおよびリストアは, Web コンソールで実施する必要があります。
- LPAR をコンカレントメンテナンスモードでマイグレーションする場合, 移動元 LPAR で一時的に使用される FC の WWPN (マイグレーション WWPN) を, 通常の運用に使用する FC の WWPN と同じホストグループに登録  
次のどちらかの操作を実行します。
  - マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする  
マイグレーション WWPN の自動登録を有効にしておくこと, コンカレントメンテナンスマイグレーションのタスク実行時に Device Manager と連携して自動で登録します。
  - Device Manager などを使用して登録する  
Device Manager などを使用して, 移動元 LPAR のすべてのマイグレーション WWPN を, 対応する WWPN が登録されているストレージシステムのホストグループに追加します。  
Device Manager での操作の詳細については, マニュアル「*Hitachi Command Suite ユーザーズガイド*」を参照してください。

### 関連項目

- 4.4.1 LPAR のマイグレーションとは
- 4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする
- 4.4.4 停止している LPAR をマイグレーションする
- 4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする

## 4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする

コンカレントメンテナンスマイグレーションを実行する際に, Compute Systems Manager が Device Manager に接続して, マイグレーション WWPN を自動で登録する機能を有効にします。

### 事前に完了しておく操作

- Device Manager との接続の設定

マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする手順を次に示します。

1. [管理] - [論理分割] - [マイグレーション WWPN の自動登録] を選択します。
2. [設定編集] ボタンをクリックします。
3. [マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする] チェックボックスを選択します。

#### 関連項目

- [2.9 Device Manager との接続を設定する](#)
- [4.4.1 LPAR のマイグレーションとは](#)
- [4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項](#)
- [4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする](#)

## 4.4.4 停止している LPAR をマイグレーションする

停止している LPAR をマイグレーションする手順について説明します。

#### 事前に完了しておく操作

- 移動元の LPAR の停止

停止している LPAR をマイグレーションする手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャージ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、マイグレーションしたい LPAR を選択します。
3. [LPAR 設定] メニューから、[シャットダウンマイグレーション] を選択します。
4. 画面の内容に沿って、マイグレーションする LPAR の情報などを設定します。
5. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
6. 必要に応じて、[スケジュール設定] を選択して、タスクのスケジュールを設定します。  
タスクはあとで実行できます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
7. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR のマイグレーション状態は、LPAR の一覧画面の [マイグレーション状態] で確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.18 LPAR を停止する](#)
- [4.4.1 LPAR のマイグレーションとは](#)
- [4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項](#)
- [4.4.6 LPAR のマイグレーションの失敗を復旧する](#)

## 4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする

起動している LPAR をマイグレーションする手順について説明します。

#### 事前に完了しておく操作

- 移動元の LPAR の起動

起動している LPAR をマイグレーションする手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、マイグレーションしたい LPAR を選択します。
3. [LPAR 設定] メニューから、[コンカレントメンテナンスマイグレーション] を選択します。
4. 画面の内容に沿って、マイグレーションする LPAR の情報、マイグレーションパスの情報などを設定します。
5. [プラン確認] ボタンをクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
6. 必要に応じて、[スケジュール設定] を選択して、タスクのスケジュールを設定します。  
タスクはあとで実行できます。デフォルトは [今すぐ実行] です。
7. [実行] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

LPAR のマイグレーション状態は、LPAR の一覧画面の [マイグレーション状態] で確認できます。

#### 関連項目

- [4.1.17 LPAR を起動する](#)
- [4.4.1 LPAR のマイグレーションとは](#)
- [4.4.2 LPAR をマイグレーションするための確認事項](#)
- [4.4.3 マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする](#)
- [4.4.6 LPAR のマイグレーションの失敗を復旧する](#)
- [4.4.7 コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する](#)

## 4.4.6 LPAR のマイグレーションの失敗を復旧する

LPAR のマイグレーションが失敗した場合に、復旧する手順を説明します。LPAR のマイグレーション状態は、LPAR の一覧画面の [マイグレーション状態] で確認できます。

マイグレーション状態が [リカバリー要] の場合、Compute Systems Manager で復旧できます。

マイグレーション状態が [リカバリー不可] の場合、Compute Systems Manager では復旧できません。マイグレーション前にバックアップしておいた HVM の構成情報を Web コンソールでリストアする必要があります。

#### 事前に完了しておく操作

- HVM の起動

LPAR のマイグレーションが失敗した場合に、Compute Systems Manager で復旧する手順を次に示します。

1. [リソース] - [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧から、復旧したい LPAR を選択します。
3. [LPAR 設定] メニューから、[マイグレーション状態のリカバリー] を選択します。
4. [OK] ボタンをクリックします。

タスクの進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [4.4.1 LPAR のマイグレーションとは](#)
- [4.4.4 停止している LPAR をマイグレーションする](#)



- 4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする

## 4.4.7 コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する

コンカレントメンテナンスモードで、起動している LPAR をマイグレーションする場合の待ち時間を変更する手順について説明します。

マイグレーションの待ち時間は、マイグレーションが完了するまでの時間を考慮して設定してください。

コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する手順を次に示します。

1. [管理] - [論理分割] - [設定] を選択します。
2. [設定編集] ボタンをクリックします。
3. マイグレーションが完了するまでの最大待ち時間を、秒単位で設定します。
4. [OK] ボタンをクリックします。

### 関連項目

- 4.4.1 LPAR のマイグレーションとは
- 4.4.5 起動している LPAR をマイグレーションする

## 4.5 電力キャッピング

Compute Systems Manager を使用して、日立製シャーシおよびサーバの消費電力を制御（上限を設定）できます。

### 4.5.1 電力キャッピングとは

Compute Systems Manager を使用すると、消費電力があらかじめ設定した許容範囲を超えないように、管理対象シャーシおよびサーバの消費電力を制御できます。

消費電力を抑えるには、電力キャッピングを使用します。

電力キャッピングを使用するには、シャーシまたはラックマウントサーバの電力監視のライセンスが必要です。

電力キャッピングを有効にすると、サーバ上のホストの CPU 使用率が高くなり、ホストで稼働するアプリケーションに影響を及ぼすおそれがあります。事前に、ホストの性能に余裕があることを確認してください。

### 関連項目

- 4.5.2 シャーシの電力キャッピングを有効にする
- 4.5.3 シャーシの電力キャッピングを無効にする
- 4.5.4 ラックマウントサーバの電力キャッピングを有効にする
- 4.5.5 ラックマウントサーバの電力キャッピングを無効にする
- 4.5.6 電力キャッピングのスケジュール例
- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは

## 4.5.2 シャーシの電力キャッピングを有効にする

シャーシの電力キャッピングを有効にして、シャーシの消費電力を制御できます。さらに、そのシャーシに搭載されている特定のブレードサーバを電力キャッピングの対象外にすることもできます。

消費電力を抑えると、シャーシの電圧やブレードサーバの CPU 周波数が低下して、サーバ上のホストで稼働するアプリケーションに影響を及ぼすおそれがあります。事前に、ホストの性能に余裕があることを確認してください。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [シャーシ] - [シャーシ] を選択します。  
管理対象の [シャーシ] 一覧が表示されます。
2. [シャーシ電力情報表示] をクリックします。
3. 電力キャッピングを有効にするシャーシを選択します。
4. [キャッピング開始] をクリックします。
5. 消費電力の上限値を設定します。
6. シャーシ内の特定のブレードサーバを電力キャッピングの対象外にしたい場合は、[シャーシ内の対象ブレード] を開き、電力キャッピングを有効にしないブレードサーバのチェックボックスからチェックを外します。
7. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐ実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
8. [実行] をクリックします。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。



**重要** 電力キャッピングの設定は、ブレードサーバを再起動したあとに適用される機種があります。ブレードサーバに設定が適用されているかどうかを確認するには、[リソース] タブのブレードサーバ一覧で [ブレード電力情報表示] ボタンをクリックします。

[リソース] タブの [シャーシ] 一覧から [シャーシ電力情報表示] を選択すると、シャーシの消費電力が正しく制御されているかどうかを確認できます。

[リソース] タブの [ホスト] 一覧から [性能情報表示] を選択すると、電力キャッピングを使用しているシャーシで稼働しているホストの性能が、影響を受けていないことを確認できます。

### 関連項目

- [4.5.1 電力キャッピングとは](#)
- [4.5.3 シャーシの電力キャッピングを無効にする](#)

## 4.5.3 シャーシの電力キャッピングを無効にする

シャーシの電力キャッピングを無効にして、シャーシの消費電力の制御を中止できます。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [シャーシ] - [シャーシ] を選択します。  
管理対象の [シャーシ] 一覧が表示されます。
2. [シャーシ電力情報表示] をクリックします。
3. 電力キャッピングを無効にするシャーシを選択します。

4. [キャッピング停止] をクリックします。
5. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
6. [実行] をクリックします。

シャーシの電力キャッピングが無効になります。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

#### 関連項目

- ・ [4.5.1 電力キャッピングとは](#)
- ・ [4.5.2 シャーシの電力キャッピングを有効にする](#)

## 4.5.4 ラックマウントサーバの電力キャッピングを有効にする

ラックマウントサーバの電力キャッピングを有効にして、サーバの消費電力を制御できます。

消費電力を抑えると、サーバの電圧や CPU 周波数が低下して、サーバ上のホストで稼働するアプリケーションに影響を及ぼすおそれがあります。事前に、ホストの性能に余裕があることを確認してください。

#### 事前に確認しておく情報

- ・ 電力キャッピングを有効にしたいラックマウントサーバに搭載されているホストの性能に余裕がある
1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ラックマウント] を選択します。

管理対象のラックマウントサーバ一覧が表示されます。
  2. [ラックマウント電力情報表示] をクリックします。
  3. 電力キャッピングを有効にするサーバを選択します。
  4. [キャッピング開始] をクリックします。
  5. 消費電力の上限値を設定します。
  6. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
    - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
    - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
  7. [実行] をクリックします。

進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

[リソース] タブのラックマウントサーバ一覧から [ラックマウント電力情報表示] を選択すると、ラックマウントサーバの消費電力が正しく制御されているかどうかの状態を確認できます。

[リソース] タブのホスト一覧から [性能情報表示] を選択すると、電力キャッピングを有効にしたラックマウントサーバで稼働しているホストの性能が、影響を受けていないことを確認できます。

#### 関連項目

- 4.5.1 電力キャッピングとは
- 4.5.5 ラックマウントサーバの電力キャッピングを無効にする

### 4.5.5 ラックマウントサーバの電力キャッピングを無効にする

電力キャッピングを無効にして、サーバの消費電力の制御を中止できます。

1. [リソース] タブで、[シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ラックマウント] を選択します。  
管理対象のラックマウントサーバ一覧が表示されます。
2. [ラックマウント電力情報表示] をクリックします。
3. 電力キャッピングを無効にするサーバを選択します。
4. [電力キャッピング停止] をクリックします。
5. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
  - a. ここでは、タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
6. [実行] をクリックします。  
選択したサーバの電力キャッピングが無効になります。  
進捗状況や実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

#### 関連項目

- 4.5.1 電力キャッピングとは
- 4.5.4 ラックマウントサーバの電力キャッピングを有効にする

### 4.5.6 電力キャッピングのスケジュール例

電力キャッピングのスケジュールを設定する場合の例を示します。

平日の営業時間内にシャーシ 10 台の電力キャッピングを有効にするには、次の 2 つのタスクを作成します。

図 4-9 シャーシ 10 台を選択して月曜日から金曜日の午前 9 時に電力キャッピングを有効にするタスク

電力キャッピング開始プラン確認

電力キャッピングプランを確認し、【実行】をクリックしてください。あとで実行、または繰り返し実行する場合はスケジュール設定を開き、スケジュールリングしてください。

プランサマリー		
電力キャッピング開始	ユーザー ID	System
	ターゲット種別	シャーシ
	値	64 %
	E-mail通知	通知しない
	E-mail通知アドレス	

プラン詳細

タスク名: \* キャッピング開始-1

説明:

スケジュール設定

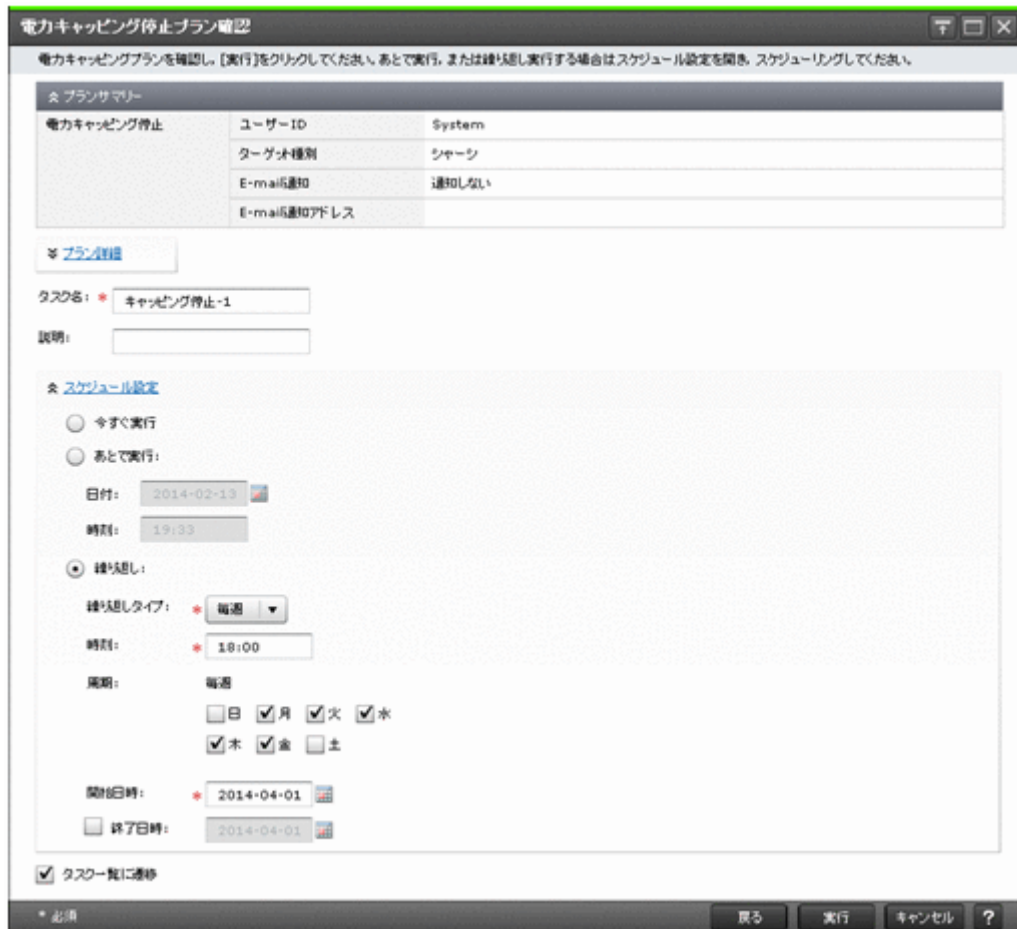
今すぐ実行  
 あとで実行:  
 日付: 2014-02-13  
 時刻: 19:09  
 繰り返し:  
 繰り返しタイプ: \* 毎週  
 時刻: \* 9:00  
 周期: 毎週  
 日  月  火  水  
 木  金  土  
 開始日時: \* 2014-04-01  
 終了日時: 2014-04-01

タスク一覧に遷移

\* 必須

戻る 実行 キャンセル ?

図 4-10 月曜日から金曜日の午後 6 時に、シャーシ 10 台の電力キャッピングを有効から無効にするタスク



#### 関連項目

- 4.5.1 電力キャッピングとは
- 4.5.2 シャーシの電力キャッピングを有効にする
- 4.5.3 シャーシの電力キャッピングを無効にする

## 4.6 タスク管理

Compute Systems Manager で作成・管理できるタスクについて説明します。

### 4.6.1 タスク管理とは

Compute Systems Manager では、ユーザーのリソースに対する操作はタスクとして登録されます。

タスクの開始前に管理サーバが停止した場合、タスクは管理サーバが起動したときに実行されます。ただし、タスクの実行期限を過ぎたあとで管理サーバが起動したときは、タスクは実行されません。

また、タスクの実行中に管理サーバが停止した場合、タスクは失敗します。

失敗したタスクは、必要に応じて再登録してください。

現在のタスクの進捗状況や過去に実行したすべてのタスクの実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

[タスク & アラート] タブでは、次の操作を実行できます。

- タスクのスケジュールを変更する
- 実行中のタスクをキャンセルする
- エラー終了したタスクを履歴に移動する
- 不要なタスクを削除する



#### 重要

- 登録されたタスク数と履歴に移動したタスク数の合計が 1,000 件を超えると、その合計が 700 件になるまで完了日付が古いものから定期的に削除されます。ただし、削除されるのは、履歴に移動したタスクです。
- 外部認可サーバと連携していて、外部認可サーバ側で外部認可ユーザーの所属する認可グループを変更した場合は、そのユーザーの実行待ち状態のタスクを登録し直してください。タスクを登録し直さないと、そのタスクは正しく実行されません。

なお、登録し直す必要があるタスクは、管理対象の各リソースに対して次の操作を実行するタスクです。

- 電源 ON, 電源 OFF, または再起動

ホスト, 仮想マシン, サーバ, HVM, LPAR

- 管理対象の情報の更新

ホスト, ハイパーバイザー, 仮想マシン, シャーシ, サーバ, LPAR

- 性能情報および電力情報の更新

ホスト, シャーシ, サーバ

#### 関連項目

- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.6.2 タスクの状態を確認する](#)
- [4.6.3 タスクのスケジュールを変更する](#)
- [4.6.4 実行中のタスクをキャンセルする](#)
- [4.6.5 エラー終了したタスクを履歴に移動する](#)
- [4.6.6 タスクを削除する](#)
- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する](#)

## 4.6.2 タスクの状態を確認する

タスクの一覧を参照すると、各タスクの状態を確認できます。

1. [タスク & アラート] タブで [タスク] を選択します。
2. [タスク一覧] タブで、タスクの状態を確認します。  
タスクの状態 ([完了] または [キャンセル]) は、[履歴] タブでも確認できます。



**参考** タスク一覧には、登録されたすべてのタスクが表示されます。

3. タスクの詳細を表示するには、タスク名のリンクをクリックします。

#### 関連項目

- [4.6.1 タスク管理とは](#)
- [4.6.3 タスクのスケジュールを変更する](#)

- 4.6.4 実行中のタスクをキャンセルする
- 4.6.5 エラー終了したタスクを履歴に移動する
- 4.6.6 タスクを削除する

### 4.6.3 タスクのスケジュールを変更する

実行待ち状態のタスクのスケジュールを変更できます。例えば、定期的に行うように予定されているタスクを省略できます。

1. [タスク & アラート] タブで [タスク] を選択します。
2. [タスク一覧] タブで、スケジュールを変更するタスクを選択し、[タスクリスケジュール] をクリックします。
3. スケジュールを変更し、[OK] をクリックします。  
タスクのスケジュールが変更されます。

[タスク & アラート] タブのタスク一覧で、タスクのスケジュールが変更されていることを確認します。

#### 関連項目

- 4.6.1 タスク管理とは
- 4.6.2 タスクの状態を確認する
- 4.6.4 実行中のタスクをキャンセルする
- 4.6.6 タスクを削除する

### 4.6.4 実行中のタスクをキャンセルする

実行中のタスクをキャンセルできます。例えば、ホストの検索に時間が掛かり過ぎているタスクをキャンセルできます。

1. [タスク & アラート] タブで [タスク] を選択します。
2. [タスク一覧] タブで、キャンセルするタスクを選択し、[タスクキャンセル] をクリックします。
3. タスクの一覧で、キャンセルするタスクが正しいことを確認します。
4. [OK] をクリックします。  
タスクがキャンセルされます。

[履歴] タブで、タスクの状態を確認できます。

#### 関連項目

- 4.6.1 タスク管理とは
- 4.6.2 タスクの状態を確認する

### 4.6.5 エラー終了したタスクを履歴に移動する

エラー終了したタスクは、[履歴] タブに移動できます。



**重要** 手動で [履歴] タブに移動できるのは、失敗したタスクに限られます。

---



1. [タスク & アラート] タブで [タスク] を選択します。
2. [タスク一覧] タブで、移動するタスクを選択し、[履歴に移動] をクリックします。
3. 移動するタスクの一覧が正しいことを確認します。
4. [OK] をクリックします。  
選択したタスクが [履歴] タブに移動されます。

#### 関連項目

- 4.6.1 タスク管理とは
- 4.6.2 タスクの状態を確認する
- 4.6.6 タスクを削除する

## 4.6.6 タスクを削除する

不要になったタスクを削除できます。タスクを削除すると、[タスク一覧] タブまたは [履歴] タブのタスクの一覧に表示されなくなります。実行中のタスクは削除できません。

1. [タスク & アラート] タブで [タスク] を選択します。
2. [タスク一覧] タブまたは [履歴] タブで、削除するタスクを選択し、[タスク削除] をクリックします。
3. タスクの一覧で、削除するタスクが正しいことを確認します。
4. [OK] をクリックします。  
選択したタスクが削除されます。

#### 関連項目

- 4.6.1 タスク管理とは
- 4.6.2 タスクの状態を確認する
- 4.6.5 エラー終了したタスクを履歴に移動する

## 4.7 関連ソフトウェアと連携する場合の管理対象の操作

Compute Systems Manager から Web コンソールおよび Web リモート KVM にアクセスし、使用できます。

### 4.7.1 管理対象を操作できる関連ソフトウェアとは

管理クライアントから関連ソフトウェアにアクセスすることで、管理対象サーバを運用したり、管理対象サーバの詳細情報を確認できます。

Compute Systems Manager は、日立製サーバに同梱されている次のソフトウェアと連携できます。

- Web コンソール：シャシおよびサーバの情報を参照したり、遠隔操作したりします。
- Web リモート KVM：ホストまたはサーバを遠隔操作します。

#### 関連項目

- 4.7.2 Web コンソールで管理対象に接続する
- 4.7.3 Web リモート KVM で管理対象に接続する

## 4.7.2 Web コンソールで管理対象に接続する

Compute Systems Manager から Web コンソールにアクセスして、日立製シャーシおよびサーバの詳細情報を閲覧したり、遠隔操作したりできます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、操作したい管理対象を選択します。
3. [その他の操作] メニューから [Web Console 起動] を選択します。

Web コンソールのログイン画面が表示されます。

### 関連項目

- [4.7.1 管理対象を操作できる関連ソフトウェアとは](#)

## 4.7.3 Web リモート KVM で管理対象に接続する

Compute Systems Manager から管理対象に Web リモート KVM で接続して、情報を参照したり、遠隔操作したりできます。

### 事前に完了しておく操作

- LPAR 上のホスト、または LPAR を参照する場合、LPAR への USB のアタッチ

Web リモート KVM で管理対象に接続する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [ホスト] または [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. ツリーを展開して、操作したい管理対象を選択します。
3. [その他の操作] メニューから [KVM 通信] を選択します。

Web リモート KVM のログイン画面が表示されます。

### 関連項目

- [4.7.1 管理対象を操作できる関連ソフトウェアとは](#)
- [4.7.4 LPAR の USB アタッチとは](#)

## 4.7.4 LPAR の USB アタッチとは

Web リモート KVM を使用して LPAR または LPAR 上のホストを操作したり、LPAR で USB を使用したりするためには、LPAR に USB をアタッチする必要があります。

USB を LPAR にアタッチするには、目的の LPAR にあらかじめ USB を割り当てておく必要があります。

LPAR を作成すると USB はデフォルトで割り当てられます。LPAR に割り当てる USB は、LPAR 作成時や、LPAR の設定で変更できます。1つの USB が複数の LPAR に割り当てられていても、USB をアタッチできる LPAR は1つだけです。

ほかの LPAR に USB がアタッチされている場合は、USB をデタッチしたあと、目的の LPAR に USB をアタッチします。

### 関連項目

- [3.4.6 LPAR を作成する](#)
- [4.7.3 Web リモート KVM で管理対象に接続する](#)

- [4.7.5 LPAR に USB をアタッチする](#)
- [4.7.6 LPAR から USB をデタッチする](#)

## 4.7.5 LPAR に USB をアタッチする

LPAR に USB をアタッチします。USB の自動アタッチを設定しておくと、LPAR 起動時に USB が自動的にアタッチされます。

### 事前に完了しておく操作

- LPAR への USB の割り当て
- HVM の起動
- LPAR の起動

LPAR に USB をアタッチする手順を次に示します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧画面で [LPAR Name] のリンクをクリックします。
3. [USB] タブでアタッチする USB を選択し、[Attach USB] ボタンをクリックします。
4. [OK] をクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

### 関連項目

- [3.4.4 USB 自動アタッチ設定を変更する](#)
- [3.4.7 LPAR の設定を変更する](#)
- [4.7.4 LPAR の USB アタッチとは](#)
- [4.7.6 LPAR から USB をデタッチする](#)

## 4.7.6 LPAR から USB をデタッチする

LPAR から USB をデタッチします。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧画面で [LPAR Name] のリンクをクリックします。
3. [USB] タブでデタッチする USB を選択し、[Detach USB] ボタンをクリックします。
4. [OK] をクリックします。

進捗状況および実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。

### 関連項目

- [4.7.4 LPAR の USB アタッチとは](#)
- [4.7.5 LPAR に USB をアタッチする](#)

## 4.8 VMM と連携する場合の仮想リソースの操作

VMM を起動して接続を設定し、仮想リソースを管理するための情報について説明します。

## 4.8.1 VMM との接続を設定する

VMM への接続を設定して、仮想リソースの遠隔操作を有効にします。

1. [管理] タブから [仮想化設定] - [VMM ブラウザ設定] を選択します。
2. [ブラウザ設定作成] をクリックします。
3. 連携したい VMM を設定します。
4. 接続の設定を確認し、[OK] をクリックします。

### 関連項目

- [4.8.2 VMM と連携して仮想リソースを操作する](#)

## 4.8.2 VMM と連携して仮想リソースを操作する

Compute Systems Manager から VMM にアクセスして、タスクを完了したり、仮想リソースの詳細情報を確認したりできます。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [ハイパーバイザー] で、ハイパーバイザーの種類を選択します。
3. ハイパーバイザーの一覧から、VMM で操作したいハイパーバイザーを選択します。
4. [その他の操作] をクリックし、[VMM 起動] を選択します。

VMM のログイン画面が表示されます。



**参考** VMM を使用して完了した作業の結果を確認するには、Compute Systems Manager でハイパーバイザー情報を更新します。

---

### 関連項目

- [4.8.1 VMM との接続を設定する](#)

## 4.9 デプロイメントマネージャーの設定と運用

### 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは

デプロイメントマネージャーを使用すると、同じ環境の管理対象リソースを複数複製できます。ディスク障害または破損が発生している場合、管理対象リソースのディスクデータを復元することもできます。

デプロイメントマネージャーを使用するには、デプロイメントマネージャーのライセンスが必要です。



**重要** デプロイメントマネージャーは、管理サーバの OS が Windows の場合に運用できます。

---

次の管理対象リソースをデプロイメントマネージャーで操作できます。

- 日立製のサーバ
- ハイパーバイザー上の仮想マシン
- LPAR

デプロイメントマネージャーを使用して、次の操作を実行できます。

- 管理対象リソースのディスクのデータをイメージファイルとしてバックアップし、管理サーバに保存する
- イメージファイルを管理対象リソースにリストアする
- イメージファイルを管理する
- 特定の管理対象リソースの環境を、異なる管理対象リソースに複製する

#### 関連項目

- 4.9.2 デプロイメントマネージャーを使用するための確認事項
- 4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する
- 4.9.4 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加する
- 4.9.5 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する
- 4.9.6 管理対象リソースのディスク構成をチェックする
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.9 イメージファイルを管理する
- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは

## 4.9.2 デプロイメントマネージャーを使用するための確認事項

デプロイメントマネージャーを使用するための管理対象リソースの確認事項を説明します。

- 管理対象リソースのリモート操作（PXE ブート）が優先されるように設定する  
 Compute Systems Manager が停止している間に管理対象リソースのブート設定を変更した場合は、Compute Systems Manager を起動してから、管理対象リソースを再起動しておいてください。  
 設定の詳細については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。
- タスクの設定から完了までの間に、管理対象リソースのハードウェア設定を変更しない



**重要** 次に示すデプロイメントマネージャーを使用した操作の場合、デフォルトでは、操作する管理対象リソースの電源はタスクの開始前に自動で OFF になり、タスクの終了後に自動で ON になります。

- 管理対象リソースのディスク構成のチェック
- 管理対象リソースのディスクのデータのバックアップまたはリストア
- 管理対象リソースのスナップショットの取得
- マスターイメージのデプロイ

デプロイメントマネージャーを使用するための確認事項については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する
- 4.9.6 管理対象リソースのディスク構成をチェックする
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する

- 4.9.14 マスターイメージをデプロイする

### 4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する

Compute Systems Manager を使用して、デプロイメントマネージャーを設定します。次の設定を変更することを推奨します。

- イメージファイルの格納パス
- デプロイメントマネージャーおよび DHCP サーバが使用する IP アドレス

#### 事前に完了しておく操作

- クラスタ環境でデプロイメントマネージャーを使用している場合、デプロイメントマネージャーのサービスをオフラインにする

デプロイメントマネージャーを設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [デプロイメント] - [設定] を選択します。
2. [設定編集] ボタンをクリックします。
3. 必要に応じて設定を変更し、[OK] ボタンをクリックします。

クラスタ環境でデプロイメントマネージャーを使用している場合、設定を変更したあと、デプロイメントマネージャーのサービスをオンラインにします。

クラスタ環境でのデプロイメントマネージャーのサービス、およびクラスタ環境でサービスをオンラインまたはオフラインにする操作については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.2 デプロイメントマネージャーを使用するための確認事項
- 4.9.9 イメージファイルを管理する

### 4.9.4 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加する

デプロイメントマネージャーで管理対象リソースを使用するには、デプロイメントマネージャーに、リソースを追加し設定する必要があります。

1. [管理] タブから [デプロイメント] - [デプロイメントリソース] を選択します。
2. デプロイメントマネージャーに追加する管理対象リソースのタブを選択し、[デプロイメントリソース追加] ボタンをクリックします。
3. ウィザードの指示に従って、デプロイメントマネージャーで使用する管理対象リソースを追加します。
4. [実行] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する
- 4.9.5 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する

## 4.9.5 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する

デプロイメントマネージャーで不要になった管理対象リソースをデプロイメントマネージャーから削除できます。

ブレードを交換したり移動したりすると、ブレードサーバ上の管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの管理対象として参照できなくなります。デプロイメントマネージャーから削除したあとで、追加し直してください。

管理対象リソースをデプロイメントマネージャーの対象から削除する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [デプロイメント] - [デプロイメントリソース] を選択します。
2. 管理対象リソースのタブを選択し、デプロイメントマネージャーから削除するリソースを選択します。
3. [デプロイメントリソース削除] ボタンをクリックします。

### 関連項目

- [4.9.1 デプロイメントマネージャーとは](#)
- [4.9.3 デプロイメントマネージャーを設定する](#)
- [4.9.4 管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加する](#)

## 4.9.6 管理対象リソースのディスク構成をチェックする

次のどれかのタスクの実行を計画しているすべての管理対象リソースに対して、ディスク情報をチェックすることを推奨します。

- 管理対象リソースのディスクをバックアップする
- 管理対象リソースのイメージファイルをリストアする
- 管理対象リソースのマスターイメージをデプロイする

管理対象リソースのディスク構成をチェックする手順を次に示します。

1. [リソース] タブの [よく使うタスク] の一覧から、[デプロイメント] - [ディスク構成チェック] を選択します。
2. ディスク構成をチェックしたい管理対象リソースを選択し、[追加] ボタンをクリックします。
3. タスクの開始前に選択したリソースの電源を手動で OFF にするには、[タスク実行前に、選択されたリソースの電源を手動で OFF にする] チェックボックスを選択します。
4. [プラン確認] ボタンをクリックし、表示されるタスク情報が正しいことを確認します。
  - a. タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクは、すぐに実行することも、あとで実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
5. [実行] ボタンをクリックします。

タスクが正常に終了したあとで、[リソース] タブから該当する管理対象リソースを選択すると、ディスク構成を参照できます。

### 関連項目

- [4.9.1 デプロイメントマネージャーとは](#)
- [4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする](#)

- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.14 マスターイメージをデプロイする

## 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする

管理対象リソースのディスク全体、または各パーティションを管理サーバにバックアップできます。バックアップで取得したディスクのデータのファイルを、イメージファイルと呼びます。

ディスク障害や破損が発生したときに、管理対象リソースをリストアできます。

管理対象リソースのディスクデータをバックアップする手順を次に示します。

1. [リソース] タブの [よく使うタスク] の一覧から、[デプロイメント] – [システムバックアップ] を選択します。
2. ウィザードの指示に従って、管理対象リソースとディスクオプションを選択します。
3. 既存のプロファイルを変更するには、バックアッププロファイルを選択するか、[バックアッププロファイル編集] ボタンをクリックします。
4. 電源設定を確認し、必要に応じて変更します。タスクの開始前に選択したリソースの電源を手動で OFF にするには、[タスク実行前に、選択されたリソースの電源を手動で OFF にする] チェックボックスを選択します。
5. 表示されるタスク情報が正しいことを確認します。
  - a. タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
6. [実行] ボタンをクリックします。

### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.9 イメージファイルを管理する
- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは

## 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする

ディスク障害やディスク破損が発生した場合には、管理サーバに保存されたイメージファイルを使用して、管理対象リソースにディスクデータをリストアできます。

1. [リソース] タブの [よく使うタスク] の一覧から、[デプロイメント] – [システムリストア] を選択します。
2. ウィザードの指示に従って、管理対象リソースとイメージファイルを選択します。
3. 電源設定を確認し、必要に応じて変更します。タスクの開始前に選択したリソースの電源を手動で OFF にするには、[タスク実行前に、選択されたリソースの電源を手動で OFF にする] チェックボックスを選択します。
4. 表示されるタスク情報が正しいことを確認します。
  - a. タスク名の更新や説明の入力もできます。



- b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクをすぐに実行するか、あとで実行するかを選択できます。また、指定した間隔でタスクを繰り返し実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
5. [実行] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.9 イメージファイルを管理する
- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは

## 4.9.9 イメージファイルを管理する

デプロイメントマネージャーを使用して取得した、バックアップまたはスナップショットのデータのファイルを、イメージファイルと呼びます。

イメージファイルの管理では、次の操作を実行できます。

- イメージファイルを削除する
- イメージファイルのファイル情報を編集する
- イメージファイルをデプロイメントマネージャーが管理している格納パスにコピーする (イメージファイルのインポート)



**注意** イメージファイルを削除すると復元できなくなるため、リストアまたはデプロイする可能性があるイメージファイルを削除する場合は、その前にほかの場所にバックアップしてください。

イメージファイルを管理する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [デプロイメント] - [イメージファイル管理] を選択します。
2. イメージファイルを選択し、使用したい機能のボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する

## 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは

デプロイメントマネージャーを使用して、ある管理対象リソースと同じ環境 (OS, アプリケーションなど) をほかの管理対象リソースに複製できます。この機能をデプロイと呼びます。

管理対象リソースを複製するために、次のデータを用意します。

- スナップショット  
複製元の管理対象リソースのディスクから、固有情報を削除したデータ  
固有情報を削除するには、Sysprep ツールを使用します。

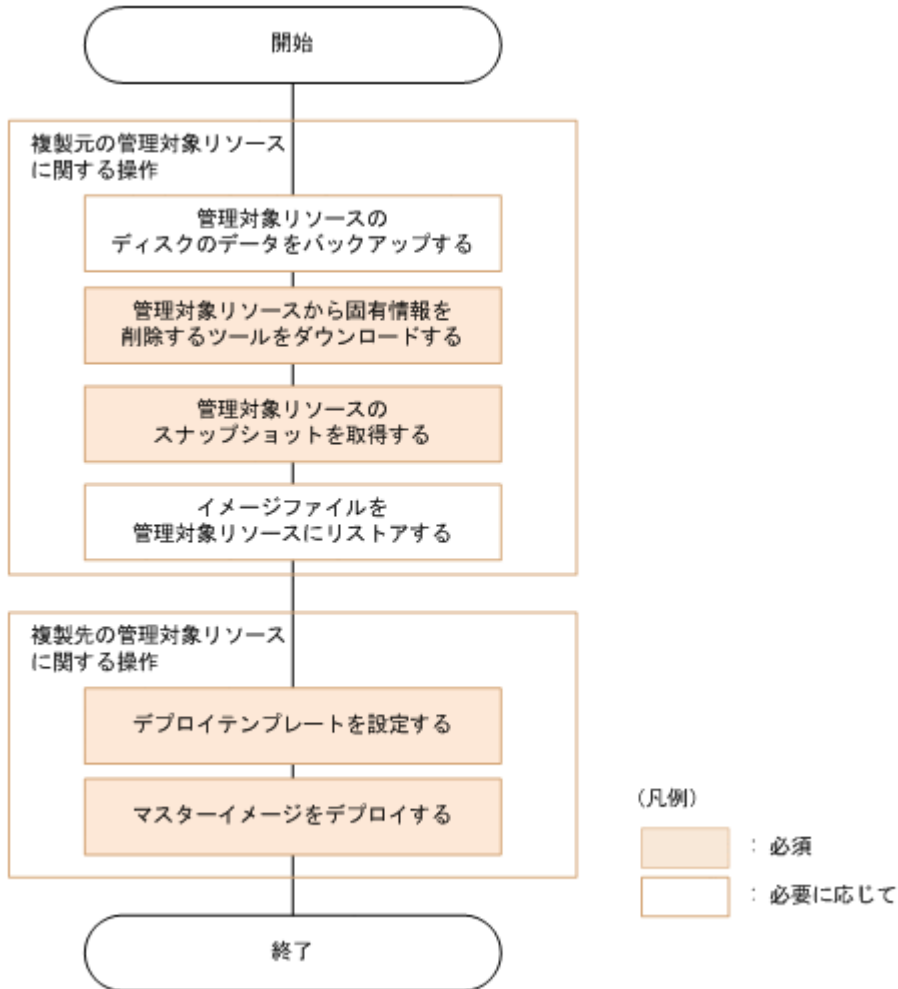
- デプロイテンプレート  
複製先の管理対象リソースのディスクに設定する固有情報
- マスターイメージ  
スナップショットにデプロイテンプレートを設定したデータ

マスターイメージを複製先の管理対象リソースにデプロイすることで、環境を複製できます。



**注意** 複製元の管理対象リソースのスナップショットを取得するため、固有情報を削除する前に、ディスクのデータをバックアップすることをお勧めします。  
固有情報が削除された状態で複製元の管理対象リソースのディスクは使用できません。バックアップを取得しておけば、複製元の管理対象リソースにリストアすることで、ディスクを元に戻せます。

デプロイメントマネージャーを使用して管理対象リソースの環境をデプロイする作業フローを次に示します。



#### 関連項目

- 4.9.1 デプロイメントマネージャーとは
- 4.9.7 管理対象リソースのディスクのデータをバックアップする
- 4.9.8 管理対象リソースにディスクのデータをリストアする
- 4.9.11 管理対象リソースから固有情報を削除するツールをダウンロードする
- 4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する
- 4.9.13 デプロイテンプレートを設定する
- 4.9.14 マスターイメージをデプロイする

## 4.9.11 管理対象リソースから固有情報を削除するツールをダウンロードする

管理対象リソースの環境をほかの管理対象リソースに複製するときに、複製元の管理対象リソースのディスクから固有情報を削除する必要があります。そのため、固有情報を削除するツール (Sysprep) をダウンロードします。

### 事前に完了しておく操作

- 複製元の管理対象リソースへの管理者でのログイン

管理対象リソースから固有情報を削除するツールをダウンロードする手順を次に示します。

- 複製元の管理対象リソースでブラウザを起動し、Compute Systems Manager にログインします。
- [ツール] メニューから [ダウンロード] を選択します。
- ダウンロードの一覧から、複製元の管理対象リソースに対応する OS 用の Sysprep ツールを特定し、[ダウンロード] をクリックします。

ダウンロードした Sysprep ツールを使用して、管理対象リソースのディスクから固有値を削除します。

Sysprep ツールを使用して複製元の管理対象リソースから固有値を削除する方法については、ダウンロードした Sysprep ツールに同梱されている ReadMe ファイルを参照してください。

### 関連項目

- [4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは](#)
- [4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する](#)

## 4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する

複製元の管理対象リソースからスナップショットを取得し、管理サーバに保存します。スナップショットとして取得したデータのファイルを、イメージファイルと呼びます。

スナップショットは、管理対象リソースと同じ環境を、ほかの管理対象リソースに複製するときの元のデータになります。

### 事前に完了しておく操作

- 複製元の管理対象リソースのディスクからの固有情報削除

管理対象リソースのスナップショットを取得する手順を次に示します。

- [リソース] タブの [よく使うタスク] の一覧から、[デプロイメント] - [スナップショット] を選択します。
- ウィザードの指示に従って、複製元の管理対象リソースを選択します。
- 電源設定を確認し、必要に応じて変更します。タスクの開始前に選択したリソースの電源を手動で OFF にするには、[タスク実行前に、選択されたリソースの電源を手動で OFF にする] チェックボックスを選択します。
- 表示されるタスク情報が正しいことを確認します。
  - タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。

タスクは、すぐに実行することも、あとで実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。

5. [実行] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは
- 4.9.11 管理対象リソースから固有情報を削除するツールをダウンロードする
- 4.9.13 デプロイテンプレートを設定する

## 4.9.13 デプロイテンプレートを設定する

複製先の管理対象リソースにデプロイするときに使用するデプロイテンプレートを設定できます。

1. [管理] タブから [デプロイメント] - [デプロイメントテンプレート] を選択します。
2. [テンプレート作成] ボタンをクリックします。
3. ウィザードの指示に従って、複製先の管理対象リソースのデプロイテンプレートを設定します。別のデプロイテンプレートをコピーして、新しいデプロイテンプレートを作成することもできます。
4. [実行] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは
- 4.9.12 管理対象リソースのスナップショットを取得する
- 4.9.14 マスターイメージをデプロイする

## 4.9.14 マスターイメージをデプロイする

スナップショットにデプロイテンプレートを設定して、マスターイメージを作成します。マスターイメージを複製先の管理対象リソースにデプロイすることで、複製元の管理対象リソースと同じ環境を複製先の管理対象リソースに作成します。

#### 事前に確認しておく情報

- 複製元と複製先の管理対象リソースは、モデルおよびハードウェア構成が同じである

#### 事前に完了しておく操作

- 複製元の管理対象リソースのスナップショット取得
- 複製先の管理対象リソースのデプロイテンプレート設定

マスターイメージをデプロイする手順を次に示します。

1. [リソース] タブの [よく使うタスク] の一覧から、[デプロイメント] - [マスターイメージデプロイ] を選択します。
2. ウィザードの指示に従って、複製先の管理対象リソース、スナップショット、およびデプロイテンプレートを選択します。
3. タスクの開始前に選択したリソースの電源を手動で OFF にするには、[タスク実行前に、選択されたリソースの電源を手動で OFF にする] チェックボックスを選択します。
4. 表示されるタスク情報が正しいことを確認します。

- a. タスク名の更新や説明の入力もできます。
  - b. [スケジュール設定] を展開し、タスクのスケジュールを指定します。  
タスクは、すぐに実行することも、あとで実行することもできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
5. [実行] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- [4.9.10 デプロイメントマネージャーを使用した管理対象リソースの環境の複製とは](#)
- [4.9.13 デプロイテンプレートを設定する](#)

## 4.10 ファームウェアの更新

Compute Systems Manager を使用して、日立製シャーシまたはブレードサーバのファームウェアをアップデートできます。

### 4.10.1 ファームウェアの更新とは

Compute Systems Manager を使用して、日立製シャーシまたはブレードサーバのファームウェアをアップデートできます。

ファームウェアをアップデートできる対象を次に示します。

- シャーシ  
シャーシのマネジメントモジュールのファームウェアを更新します。
- ブレードサーバ  
ブレードサーバを構成するブレードのファームウェアを更新します。

#### 関連項目

- [4.10.2 シャーシのファームウェアを更新する](#)
- [4.10.3 ブレードサーバのファームウェアを更新する](#)

### 4.10.2 シャーシのファームウェアを更新する

Compute Systems Manager を使用して、シャーシのマネジメントモジュールのファームウェアをアップデートできます。アップデート処理が完了すると、更新されたファームウェアが適用されます。

#### 事前に完了しておく操作

- ファームウェアのファイルの入手

シャーシのファームウェアを更新する手順を次に示します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [シャーシ] - [シャーシ] を選択します。  
管理対象のシャーシ一覧が表示されます。
2. ファームウェアをアップデートするシャーシを 1 つまたは複数選択します。
3. [その他の操作] - [ファームウェアアップデート] を順にクリックします。
4. ファームウェアのファイルを選択します。
5. [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。

- 必要に応じて [スケジュール設定] を選択して、タスクのスケジュールを設定します。  
タスクは、あとで実行するようスケジュールを設定できます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
- [実行] ボタンをクリックします。  
ファームウェアアップデートタスクの実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。  
アップデートされたファームウェアのバージョンは、[リソース] タブのシャシー一覧、またはシャシーの詳細で確認できます。

#### 関連項目

- 4.10.1 ファームウェアの更新とは

### 4.10.3 ブレードサーバのファームウェアを更新する

Compute Systems Manager を使用して、ブレードサーバを構成するブレードのファームウェアをアップデートできます。アップデート処理が完了すると、更新されたファームウェアが適用されます。ただし、稼働中のブレードサーバのファームウェアをアップデートする場合、アップデート完了後にブレードサーバを再起動する必要があります。

#### 事前に完了しておく操作

- ファームウェアのファイルの入手

ブレードサーバのファームウェアを更新する手順を次に示します。

- [リソース] タブから [シャシー & サーバ] - [サーバ] - [ブレード] を選択します。  
管理対象のブレードサーバの一覧が表示されます。
- ファームウェアをアップデートするブレードサーバを 1 つまたは複数選択します。
- [その他の操作] - [ファームウェアアップデート] を順にクリックします。
- ファームウェアのファイルを選択します。
- [プラン確認] をクリックして、サマリーに表示されたタスクの内容を確認します。
- 必要に応じて [スケジュール設定] を選択して、タスクのスケジュールを設定します。  
タスクは、あとで実行するようスケジュールを設定したりできます。デフォルトでは [今すぐ実行] が設定されています。
- [実行] をクリックします。  
ファームウェアアップデートの実行結果は、[タスク & アラート] タブで確認できます。
- 稼働中のブレードサーバのファームウェアをアップデートした場合、ブレードサーバ上のホストをリポート、またはブレードサーバをリセットします。

アップデートされたファームウェアのバージョンは、[リソース] タブのブレードサーバ一覧、またはブレードサーバの詳細で確認できます。

#### 関連項目

- 4.1.8 ホストをリポートする
- 4.1.13 サーバをリセットする
- 4.10.1 ファームウェアの更新とは

## 稼働監視とアラート管理

この章では、管理対象リソースを監視し、アラートを管理する手順について説明します。

- 5.1 アラートの設定
- 5.2 管理対象の稼働状況の確認
- 5.3 管理対象の性能や消費電力の分析
- 5.4 CSV 形式での管理対象の情報の出力
- 5.5 管理対象のグルーピング
- 5.6 アラートへの対処

## 5.1 アラートの設定

アラートの受信, アラートの E メール通知, およびアラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定について説明します。

### 5.1.1 アラートの設定とは

Compute Systems Manager では, 管理対象リソースで発生した障害の情報 (アラート) を管理クライアントで監視できます。

障害の情報を監視するためには, 事前にアラートを設定します。

アラートに関して設定できる項目を次に示します。

- **SNMP トラップの受信設定**  
管理対象ホストから送られる SNMP トラップをアラートとして Compute Systems Manager で受信する場合に設定します。
- **E メールで通知するアラートレベルの設定**  
Compute Systems Manager が受信したアラートを E メールで通知する場合に設定します。  
通知するアラートのレベルをあらかじめ設定しておきます。アラートレベルの設定は, ユーザーごとに変更できます。



**重要** Compute Systems Manager の停止中に管理対象シャーンおよびサーバで発生したアラートは, Compute Systems Manager の起動後に受信できます。ただし, 受信したアラートは E メールで通知しません。

- **アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定**  
Compute Systems Manager がアラートを受信した場合に実行するスクリプトコマンドを設定します。  
スクリプトコマンドは管理サーバ上で実行されます。



**重要** Compute Systems Manager の停止中に管理対象シャーンおよびサーバで発生したアラートは, Compute Systems Manager の起動後に受信できます。ただし, アラートに設定したスクリプトコマンドは実行しません。

- **JP1/IM へのアラート情報通知の設定 (管理サーバの OS が Windows の場合)**  
Compute Systems Manager のアラート情報を JP1/IM で監視する場合に, JP1 イベント転送を設定します。  
Compute Systems Manager のアラート情報は, JP1 イベントとして JP1/IM に転送されます。



**重要** Compute Systems Manager の停止中に管理対象シャーンおよびサーバで発生したアラートは, Compute Systems Manager の起動後に受信できます。ただし, 受信したアラートは JP1/IM に通知しません。

管理サーバのアラート通知で, JP1 イベント転送機能を設定します。

- **性能アラートを受信するためのしきい値の設定**  
管理対象ホストで想定される性能問題が発生する前にアラートを受信する場合に, しきい値を設定します。  
各種性能情報および各ホストに対して, しきい値を設定できます。
- **アラートの保持件数の変更**  
アラートはシステムで設定された値を超えると, 定期的な日付の古いものから削除されます。  
Compute Systems Manager が保持するアラートの数が多くなり, アラートの一覧表示に時間が掛かる場合, アラートの保持件数を少なくできます。



## 関連項目

- 5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは
- 5.1.7 E メールで通知するアラートレベルを設定する
- 5.1.8 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定とは
- 5.1.12 アラート情報を JP1/IM に通知するよう設定する
- 5.1.13 性能情報のしきい値を設定する
- 5.1.14 アラートの保持件数を変更する
- 5.6.1 アラートへの対処とは

## 5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは

Compute Systems Manager が管理対象ホストから SNMP トラップを受信するためには、SNMP トラップをアラートに変換する必要があります。

SNMP トラップに割り当てられたアラート ID と SNMP トラップの OID を関連づけることで、SNMP トラップを受信できるようになります。

SNMP トラップの受信を有効にすると、管理対象ホストから出力された SNMP トラップはすべて、次に示すデフォルトのアラートに変換されます。

- アラート ID : 0x0000
- アラートレベル : 情報
- 場所 : その他
- アラートの内容 : ホストから SNMP トラップを受信

アラートをより慎重に管理するために、特定の SNMP トラップとデフォルトの 0x0000 以外のアラートを関連づけることができます。Compute Systems Manager では、SNMP トラップに関連づけられるアラートをデフォルトで用意しています。

さらに、SNMP トラップに関連づけられるアラートを独自に定義することもできます。

## 関連項目

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 5.1.3 SNMP トラップの受信を有効にする
- 5.1.4 SNMP トラップをアラートに関連づける
- 5.1.5 MIB ファイルで定義されている SNMP トラップを確認する
- 5.1.6 MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップを登録する

## 5.1.3 SNMP トラップの受信を有効にする

SNMP トラップの受信を有効にすると、管理対象リソースから出力された SNMP トラップはすべてアラートに変換されます。

1. [管理] タブで、[システム設定] - [SNMP] の順に選択します。
2. [SNMP 共通設定編集] ボタンをクリックします。
3. [SNMP トラップ受信を有効にする] チェックボックスを選択します。
4. コミュニティ名を入力します。
5. [OK] ボタンをクリックします。

管理対象ホストから出力されるすべての SNMP トラップが、アラートとして受信されます (デフォルト ID : 0x0000)。

#### 関連項目

- 5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは
- 5.1.4 SNMP トラップをアラートに関連づける

### 5.1.4 SNMP トラップをアラートに関連づける

SNMP トラップをアラート ID に関連づけることで、管理対象リソースから SNMP トラップを受信したときに表示される情報を変更できます。

Compute Systems Manager に SNMP トラップの受信を設定する前に、SNMP トラップを定義する MIB ファイルが管理サーバに登録されていることを確認します。MIB ファイルを登録する方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

MIB ファイルに定義されていない SNMP トラップがある場合、管理クライアントでユーザー定義の SNMP トラップを登録できます。

1. [管理] タブから [システム設定] を選択します。
2. [SNMP] を選択します。
3. [設定一覧] タブで、[SNMP 設定作成] ボタンをクリックします。
4. [アラート ID 選択] をクリックして表示される [アラート ID] 一覧で、予備のアラート ID のの中から SNMP トラップに関連づける ID を選択します。  
新しいアラートを定義する場合、アラートの内容が定義されていないアラート ID を選択します。
5. 必要に応じて、[アラートレベル]、[発生個所]、[アラート内容] を定義します。
6. [SNMP トラップ] で、アラートに関連づける SNMP トラップを選択します。
  - a. 関連づけたい SNMP トラップが表内で見つからない場合は、[SNMP トラップ追加] をクリックし、一覧から SNMP トラップを選択します。
  - b. 新しい SNMP トラップを定義する場合、[SNMP トラップ追加] をクリックして [SNMP トラップ追加] を展開します。必要な情報を追加し、指定したアラート ID に関連づける SNMP トラップを作成して [一覧に追加] をクリックすると、新しい SNMP トラップが一覧に追加されます。新しい SNMP トラップが選択されます。
7. [OK] ボタンをクリックします。  
設定が保存されます。

設定を確認するには、[管理] タブを選択し、[システム設定] - [SNMP] の順にクリックします。アラート ID のリンクをクリックすると、SNMP 設定のサマリーが表示されます。

#### 関連項目

- 5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは
- 5.1.6 MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップを登録する

### 5.1.5 MIB ファイルで定義されている SNMP トラップを確認する

MIB ファイルに記述された SNMP トラップの受信を有効にする前に、SNMP トラップの定義を確認できます。

#### 事前に完了しておく操作

- 管理サーバで、SNMP トラップの定義が記述されている MIB ファイルを登録する  
MIB ファイルを登録する方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager* 導入・設定ガイド」を参照してください。

Compute Systems Manager の GUI から、MIB ファイルを使用して登録した SNMP トラップの定義を変更したり、削除したりすることはできません。SNMP トラップの定義を変更または削除したい場合は、管理サーバで MIB ファイルを編集してください。

- [管理] タブから [システム設定] を選択します。
- [SNMP] を選択します。
- [MIB 定義の SNMP トラップ] タブを選択します。

#### 関連項目

- [5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは](#)

### 5.1.6 MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップを登録する

通常、SNMP トラップの定義は、MIB ファイルを使用して管理サーバで一括登録します。ただし、MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップは、管理クライアントで個別に登録することもできます。

- [管理] タブから [システム設定] を選択します。
- [SNMP] を選択します。
- [ユーザー定義の SNMP トラップ] タブで、[ユーザー定義 SNMP トラップ追加] ボタンをクリックします。
- 必要な値を入力し、[OK] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- [5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは](#)

### 5.1.7 E メールで通知するアラートレベルを設定する

Compute Systems Manager がアラート受信時に E メールで通知するアラートレベルを設定できます。アラートレベルは、ユーザーごとに設定できます。

#### 事前に完了しておく操作

- Compute Systems Manager の E メール通知を設定する
- ユーザーのプロファイルを編集して E メールアドレスを登録する

E メールで通知するアラートレベルを設定する手順を次に示します。

- [管理] タブから [イベント自動処理] を選択します。
- [E-mail 通知] を選択します。
- [設定編集] をクリックします。
- 通知を受けたいアラートレベルを選択し、[OK] ボタンをクリックします。

設定したアラートレベルの障害が発生した場合に、ユーザーは E メールを受け取れるようになります。

#### 関連項目

- 2.5.2 E メール通知を設定する
- 5.1.1 アラートの設定とは
- 6.2.4 ユーザーアカウントのプロファイルを編集する
- 6.2.5 自分のプロファイルを編集する

## 5.1.8 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定とは

イベント処理を自動化するため、アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドを作成・登録します。

スクリプトコマンドを使用する場合、次のことに注意してください。

- スクリプトコマンドは管理サーバ上で実行されます。
- **Compute Systems Manager** の停止中に管理対象シャーンおよびサーバで発生したアラートは、**Compute Systems Manager** の起動後に受信できます。ただし、アラートに設定したスクリプトコマンドは実行しません。アラートを確認し、必要に応じて対処してください。

#### 関連項目

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 5.1.9 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Windows)
- 5.1.10 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Linux)
- 5.1.11 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する
- 5.6.1 アラートへの対処とは

## 5.1.9 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Windows)

管理サーバの OS が Windows の場合、アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドは、次の条件を満たしている必要があります。

- 使用できる拡張子は .exe または .bat である。
- 使用できる文字数は 260 文字以内である。  
変数を使用する場合は、変数を展開したあとの文字列が、OS の制限値を超えないように指定します。
- フルパスが使用されている (PATH 環境変数で設定されるパスを除く)。  
ネットワークディレクトリは指定できません。
- コマンドによって表示または更新されるリソースに、Windows System アカウントによるアクセスが許可されている。
- アラート発生時に Windows の内部コマンドは実行できない。  
Windows の内部コマンドを実行するには、バッチファイルにコマンドを記述するか、cmd /c コマンドを使用します。
- カレントディレクトリは、<Hitachi Command Suite 共通コンポーネントのインストールディレクトリ>%uCPsB%CC%server%public%ejb%ComputeSystemsManagerWebService である。
- コマンド実行時に有効な環境変数は、Compute Systems Manager のプログラムのサービス起動時のシステム環境変数である。  
コマンド実行時には環境変数を読み込みません。

- ・ 半角スペースを含むコマンドパスや引数は引用符 (") で囲む。

次のコマンドは指定できません。

- ・ ウィンドウまたはダイアログを表示するコマンド
- ・ 対話が必要なコマンド  
ただし、Compute Systems Manager の CLI の `csm login` コマンドを指定する場合は、パラメーターにユーザー名とパスワードを指定することでログイン時の対話を回避できます。`csm login` コマンドについては、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager CLI リファレンスガイド」を参照してください。
- ・ Windows の 16 ビットアプリケーション
- ・ Windows の DDE を使用するプログラム
- ・ 常駐プログラム
- ・ ディスクの準備ができていないリムーバブルディスク上のプログラム

スクリプトコマンドで引数として指定できる変数を、次の表に示します。

変数	説明
%D	アラートを受信した日付 (YYYY-MM-DD) が出力されます。
%T	アラートを受信した時刻 (HH:MM:SS) が出力されます。
%M※	アラートが発生したリソースの名称が出力されます。 ホストの場合：<ホスト名> シャーシまたはブレードサーバの場合：<シャーシ名> ラックマウントサーバの場合：<サーバ名> LPAR の場合：<ブレードサーバ名>
%A	アラートが発生したリソースの IP アドレスが出力されます。
%L	アラートレベルの文字列が出力されます。 情報の場合：INFO 警告の場合：WARNING 障害の場合：ERROR
%I	アラート ID の文字列 (0xXXXX) が出力されます。
%S※	アラートの内容が出力されます。
%P※	アラートの発生した場所が出力されます。 ホストの場合：SNMP 設定編集で設定した発生個所 シャーシまたはブレードサーバの場合：<モジュールの種別名称>-Slot <スロット番号> ラックマウントサーバの場合：<モジュールの種別名称> LPAR の場合：Server Blade-Slot <スロット番号>-LPAR <LPAR 番号>  <スロット番号>はモジュールの種別によって出力されない場合や、複数のスロット番号を連結して出力されることがあります。
%H※	アラートが発生した HVM の ID が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。
%V※	アラートが発生した LPAR の名称が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。
%U※	アラートが発生した LPAR の番号が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。

注※

この変数は、引用符 (") で囲む必要があります。

コマンドの例を次に示します。

- コマンドの引数として「arg1」と「arg2」を指定する。  
"c:¥program files¥a¥a.exe" arg1 arg2
- コマンドの実行結果の出力先に「d:¥work.txt」を指定する。  
cmd /c "c:¥program files¥x¥x.bat" > d:¥work.txt
- コマンドの引数に変数を指定する。  
"c:¥program files¥a¥a.exe" %A "%S"

#### 関連項目

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 5.1.11 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する

### 5.1.10 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Linux)

管理サーバの OS が Linux の場合、アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドは、次の条件を満たしている必要があります。

- 実行権限を割り当てられた実行形式、またはシェルスクリプトファイルである。
- 使用できる文字数は 260 文字以内である。  
変数を使用する場合は、変数を展開したあとの文字列が、OS の制限値を超えないように指定します。
- フルパスが使用されている (PATH 環境変数で設定されるパスを除く)。  
NFS マウントのディレクトリを指定するには、root ユーザーでアクセスできるように権限を設定します。
- コマンドによって表示または更新されるリソースに、root ユーザーによるアクセスが許可されている。
- アラート発生時に Linux の内部コマンドは実行できない。  
Linux の内部コマンドを実行するには、シェルスクリプトファイルにコマンドを記述します。
- カレントディレクトリは、<Hitachi Command Suite 共通コンポーネントのインストールディレクトリ>/uCPSB/CC/server/public/ejb/ComputeSystemsManagerWebService である。
- コマンド実行時に有効な環境変数は、Compute Systems Manager のプログラムのサービス起動時のシステム環境変数である。  
コマンド実行時には環境変数を読み込みません。
- 半角スペースを含むコマンドパスや引数は引用符 (") で囲む。

次のコマンドは指定できません。

- 対話が必要なコマンド  
ただし、Compute Systems Manager の CLI の csm login コマンドを指定する場合は、パラメーターにユーザー名とパスワードを指定することでログイン時の対話を回避できます。csm login コマンドについては、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager CLI リファレンスガイド」を参照してください。
  - 常駐プログラム
  - ディスクの準備ができていないリムーバブルディスク上のプログラム
- スクリプトコマンドで引数として指定できる変数を、次の表に示します。

変数	説明
%D	アラートを受信した日付 (YYYY-MM-DD) が出力されます。
%T	アラートを受信した時刻 (HH:MM:SS) が出力されます。
%M※	アラートが発生したリソースの名称が出力されます。 ホストの場合：<ホスト名> シャーシまたはブレードサーバの場合：<シャーシ名> ラックマウントサーバの場合：<サーバ名> LPAR の場合：<ブレードサーバ名>
%A	アラートが発生したリソースの IP アドレスが出力されます。
%L	アラートレベルの文字列が出力されます。 情報の場合：INFO 警告の場合：WARNING 障害の場合：ERROR
%I	アラート ID の文字列 (0xXXXX) が出力されます。
%S※	アラートの内容が出力されます。
%P※	アラートの発生した場所が出力されます。 ホストの場合：SNMP 設定編集で設定した発生個所 シャーシまたはブレードサーバの場合：<モジュールの種別名称>-Slot <スロット番号> ラックマウントサーバの場合：<モジュールの種別名称> LPAR の場合：Server Blade-Slot <スロット番号>-LPAR <LPAR 番号>  <スロット番号>はモジュールの種別によって出力されない場合や、複数のスロット番号を連結して出力されることがあります。
%H※	アラートが発生した HVM の ID が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。
%V※	アラートが発生した LPAR の名称が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。
%U※	アラートが発生した LPAR の番号が出力されます。 空文字列で出力される場合があります。

#### 注※

この変数は、引用符 (") で囲む必要があります。

コマンドの例を次に示します。

- コマンドの引数に変数を指定する。

```
/test/test.sh %A "%S"
```

#### 関連項目

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 5.1.11 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する

## 5.1.11 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドを設定する

アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドを設定します。

#### 事前に完了しておく操作

- スクリプトコマンドを設定するアラートの受信設定
  - ホストで発生したアラートの場合、SNMP トラップの受信設定

- 。 性能情報のアラートの場合、性能情報のしきい値を設定

アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドを設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [イベント自動処理] を選択します。
2. [スクリプトコマンド] をクリックします。
3. [スクリプトコマンド作成] をクリックします。
4. [スクリプトコマンド名] フィールドにコマンド名を入力します。
5. [コマンドパス] フィールドに、アラートが発生したときに実行するスクリプトコマンドのフルパスを入力します。  
フルパスのあとにコマンドの引数を指定できます。
6. [リソース種別] で、コマンドを適用するリソースの種別を選択します。
7. [リソース] で [リソース追加] をクリックし、コマンド設定を適用するリソースを選択します。
8. [アラート ID] フィールドでは、[アラート ID 追加] をクリックして、一覧からアラート ID を 1 つまたは複数選択します。
9. ほかに必要な項目があれば指定し、ダイアログを閉じます。  
スクリプトコマンドが保存されます。

設定を確認するには、[管理] タブを選択し、[イベント自動処理] - [スクリプトコマンド] の順にクリックします。詳細を参照するには、スクリプトコマンドの名称をクリックします。

#### 関連項目

- ・ 5.1.2 SNMP トラップの受信設定とは
- ・ 5.1.8 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの設定とは
- ・ 5.1.9 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Windows)
- ・ 5.1.10 アラート発生時に実行するスクリプトコマンドの条件 (Linux)

## 5.1.12 アラート情報を JP1/IM に通知するよう設定する

Compute Systems Manager で JP1 イベント転送を設定すると、JP1/IM のセントラルコンソールを使用して Compute Systems Manager のアラート情報を監視できます。この機能は、管理サーバの OS が Windows の場合に利用できます。

#### 事前に確認しておく情報

- ・ JP1/Base と Compute Systems Manager が同じ管理サーバにインストールされている
  - ・ JP1/IM - Manager がインストールされたマシンに、イベント拡張属性定義ファイルがある  
イベント拡張属性定義ファイルについては、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。
1. [管理] タブで [システム設定] を選択します。
  2. [JP1 イベント] をクリックします。
  3. [設定編集] をクリックします。
  4. [JP1 イベント転送を有効化する] のチェックボックスを選択し、転送するアラートレベルを選択します。

Compute Systems Manager はアラート情報を JP1/IM に通知できるようになります。



#### 関連項目

- ・ 5.1.1 アラートの設定とは

### 5.1.13 性能情報のしきい値を設定する

Compute Systems Manager が取得する性能情報に対してしきい値を設定し、そのしきい値を超えたときにアラートを受信できます。

性能を分析できるのは、Compute Systems Manager の管理対象になっているホストだけです。

性能情報のしきい値を設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブで、[性能/電力監視] – [性能監視] – [性能監視設定作成] の順にクリックします。
2. 表示されたウィンドウで、性能アラートを受信させるしきい値を設定します。

性能情報がしきい値を超えたときに、管理対象ホストの性能に関するアラートを受信します。

#### 関連項目

- ・ 5.1.1 アラートの設定とは
- ・ 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- ・ 5.3.4 性能情報の種類と対象ホストを登録する

### 5.1.14 アラートの保持件数を変更する

アラートはシステムで設定された値を超えると、定期的に日付の古いものから削除されます。Compute Systems Manager が保持するアラートの数が多くなり、アラートの一覧表示に時間が掛かる場合、アラートの保持件数を少なくできます。

アラートの保持件数を変更する手順を次に示します。

1. [管理] タブから [システム設定] – [アラート] – [設定編集] を選択します。
2. [カスタム設定を使用する] ラジオボタンを選択します。
3. 必要な項目を設定します。  
すぐにアラートを削除する場合は、[すぐにアラートを削除する。] チェックボックスを選択します。



**参考** カスタム設定からシステム設定に戻すことで、システムで設定された値を使うことができます。

変更内容を確認するには、[管理] タブから [システム設定] – [アラート] を選択します。

#### 関連項目

- ・ 5.1.1 アラートの設定とは

## 5.2 管理対象の稼働状況の確認

Compute Systems Manager では、情報を確認するための方法を用意しています。

- ・ 管理対象リソースのサマリー情報と状態を確認するためのダッシュボード
- ・ タスクの状態を確認するためのグローバルモニタリングエリア

- ・ リソース、タスク、アラートに関する詳細情報の一覧にアクセスするためのタブ

## 5.2.1 サマリー情報の参照とは

Compute Systems Manager にログインすると、最初にダッシュボードが表示されます。ダッシュボードは、管理対象リソースの状況をひと目で理解して、次に何をする必要のあるかを把握するのに役立ちます。

ダッシュボードに表示されるレポートは、ユーザーごとにレイアウトを変更したり、非表示にしたりとカスタマイズできます。

論理グループを作成している場合は、レポートを論理グループごとに表示することもできます。論理グループを選択するドロップダウンメニューでは、パブリック論理グループのパスの先頭にスラント (/) が、プライベート論理グループのパスの先頭にチルダ (~) が表示されます。

ダッシュボードには次のレポートが表示されます。

- ・ リソース状態  
管理対象リソースの状態が表示されます。リソース種別を選択すると、選択したリソースの状態が表示されます。
- ・ アラート状態  
未解決アラートが発生しているリソースの数、および未解決アラートが多く発生している上位 3 つのリソースが表示されます。
- ・ 情報  
ログインしているユーザーの [To Do] リストと、発生したイベント（タスクおよびアラート）が表示されます。
- ・ 未解決アラート  
解決されていないアラートの一覧が表示され、解決のためアラートにアクセスできます。  
アラートの詳細を確認するには、アラートを選択して [アラート対処] ボタンをクリックします。[アラート詳細情報] ダイアログから、ほかのユーザーへのアラートの割り当て、状態の変更、Eメールでのアラートの共有を設定できます。

プラグインライセンスの登録状況に応じて、ダッシュボードに次のレポートが表示されます。

- ・ 性能監視  
過去 24 時間のホストの性能に関する情報が表示されます。表示するホストは、5 台まで指定できます。
- ・ 電力監視  
論理グループを選択している場合を除き、対応するすべての日立製シャーシ（ブレードサーバを含む）の合計消費電力量が表示されます。期間（日、週、月）を指定できます。

また、サマリー情報を参照するために、ダッシュボード以外にも次の機能を提供しています。

- ・ [リソース] タブ  
管理対象リソースの情報が表示されます。
- ・ グローバルモニタリングエリア  
画面の下部に、タスクの実行状況が表示されます。

### 関連項目

- ・ [5.2.2 ダッシュボードで管理対象の状態を監視する](#)
- ・ [5.2.3 ダッシュボードをカスタマイズする](#)

- 5.2.5 グローバルモニタリングエリアからタスクの状態を確認する
- 5.5.1 論理グループとは
- 5.6.3 アラートに対処する


## 5.2.2 ダッシュボードで管理対象の状態を監視する

Compute Systems Manager のダッシュボードには、リソースの運用状況、イベント、未解決アラートの一覧など、管理対象リソースのレポートがリアルタイムで表示されます。

Compute Systems Manager にログインすると、ダッシュボードが表示されます。別のタブが選択されている場合、[ダッシュボード] タブをクリックすることで、ダッシュボードをいつでも参照できます。

1. [ダッシュボード] タブをクリックします。
2. リソースの状態、アラートの状態、イベント、未解決アラートをレポートで確認します。



**参考** 特定のレポートの詳細を確認するには、 アイコンをクリックします。関連タブが表示され、管理対象リソースについての具体的な情報を確認できます。

### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは
- 5.2.3 ダッシュボードをカスタマイズする
- 5.2.7 ハイパーバイザー上のリソースの構成や関連を参照する
- 5.2.8 仮想マシンの構成や関連を参照する
- 5.2.9 HVM 上の LPAR の構成を参照する
- 5.2.10 LPAR の構成や関連を参照する
- 5.2.11 ホストの情報を参照する
- 5.2.12 ハイパーバイザーの情報を参照する
- 5.2.13 仮想マシンの情報を参照する
- 5.2.14 シャーシの情報を参照する
- 5.2.15 サーバの情報を参照する
- 5.2.16 LPAR の情報を参照する
- 5.6.3 アラートに対処する

## 5.2.3 ダッシュボードをカスタマイズする

ダッシュボードをカスタマイズして、レイアウトを変更したり、表示するレポートを選択したりできます。変更内容は Compute Systems Manager に保存されます。次のログイン時に、カスタマイズ設定を反映したダッシュボードが表示されます。


1. [ダッシュボード] タブで [ダッシュボード設定] をクリックします。
2. 設定を変更したあと、ダイアログを閉じます。  
ダッシュボードに表示する列数や、表示するレポートの件数を変更できます。
3. ダッシュボード上でレポートのレイアウトを変更するには、各レポートのタイトルバーをドラッグして移動します。

#### 関連項目

- [5.2.1 サマリー情報の参照とは](#)
- [5.2.2 ダッシュボードで管理対象の状態を監視する](#)

## 5.2.4 ダッシュボードに表示される性能レポートをカスタマイズする

性能レポートをダッシュボードに表示させるには、対象ホストやグラフの種類を設定します。変更内容は **Compute Systems Manager** に保存され、次のログイン時に、カスタマイズ設定を反映したダッシュボードが表示されます。

1. [ダッシュボード] で、[性能監視] のレポートを開きます。
2.  ツールアイコンをクリックして、[ダッシュボード性能監視設定] ダイアログを開きます。
3. ダッシュボードに表示したい性能監視の種類や、ホストを選択してダイアログを閉じます。

#### 関連項目

- [5.2.1 サマリー情報の参照とは](#)
- [5.2.2 ダッシュボードで管理対象の状態を監視する](#)

## 5.2.5 グローバルモニタリングエリアからタスクの状態を確認する

**Compute Systems Manager** のメインウィンドウの下部には、ユーザーが作成したタスクの状態が表示されます。状態のタイプごとのリンクをクリックすると、その状態にあるタスクの一覧が表示されます。

1. グローバルモニタリングエリアで、タスクの一覧を表示したい状態の横にあるリンクをクリックします。
2. タスクの一覧を確認します。
3. [閉じる] をクリックして、タスクの一覧を閉じます。

#### 関連項目

- [1.6.1 メインウィンドウの構成要素](#)
- [4.6.1 タスク管理とは](#)
- [5.2.1 サマリー情報の参照とは](#)

## 5.2.6 タスクの集計期間を設定する

終了したタスクの件数を集計する期間を設定します。集計期間はユーザーごとに指定できます。

1. グローバルモニタリングエリアで、[完了] または [失敗] のリンクをクリックします。
2. [集計期間設定] をクリックします。
3. タスクの集計を開始する日付を指定します。

指定した開始日以降に完了または失敗したタスクの一覧が表示されます。

#### 関連項目

- [5.2.1 サマリー情報の参照とは](#)
- [5.2.5 グローバルモニタリングエリアからタスクの状態を確認する](#)

## 5.2.7 ハイパーバイザー上のリソースの構成や関連を参照する

管理対象となったハイパーバイザーが管理しているリソースの構成や、ハイパーバイザーが搭載されているホスト、サーバとの関連を参照します。

1. [リソース] タブから [仮想化] - [ハイパーバイザー] を選択します。
2. ハイパーバイザーの種類を選択します。
3. リソースに関する情報を参照するハイパーバイザーを選択し、[トポロジー表示] をクリックします。

指定したハイパーバイザーのトポロジー図が表示されます。

### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

## 5.2.8 仮想マシンの構成や関連を参照する

管理対象となった仮想マシンに搭載されているリソースの構成や、仮想マシンが起動しているホスト、サーバとの関連を参照します。

1. [リソース] タブから [仮想化] - [仮想マシン] を選択します。
2. 仮想マシンの種類を選択します。
3. リソースの構成や関連情報を参照したい仮想マシンを選択し、[トポロジー表示] をクリックします。

指定した仮想マシンのトポロジー図が表示されます。

### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

## 5.2.9 HVM 上の LPAR の構成を参照する

HVM 上の LPAR の構成を参照します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ブレード] を選択します。
2. サーバの一覧画面で [サーバ名] のリンクをクリックします。
3. [HVM] - [LPAR] を選択します。

### 関連項目

- 3.4.6 LPAR を作成する
- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

## 5.2.10 LPAR の構成や関連を参照する

管理対象となった LPAR 上のホストの構成や、LPAR が作成されているブレードサーバの構成を参照します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧画面で構成や関連を参照したい LPAR を選択し、[トポロジー表示] ボタンをクリックします。

#### 関連項目

- 3.4.6 LPAR を作成する
- 3.4.11 LPAR にホストを作成する
- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

### 5.2.11 ホストの情報を参照する

管理対象ホストの構成情報を確認できます。

1. [リソース] タブで [ホスト] を選択します。
2. ツリーを展開して、情報を確認したいホストの OS を選択します。



**重要** Solaris ホストに対する操作は非サポートです。

---

3. ホストの一覧から情報を確認したいホストを選択します。

#### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

### 5.2.12 ハイパーバイザーの情報を参照する

ハイパーバイザーの構成情報を確認できます。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [ハイパーバイザー] で、ハイパーバイザーの種類を選択します。
3. ハイパーバイザーの一覧から、情報を確認する [ハイパーバイザー名] のリンクをクリックします。
  - ハイパーバイザーのサマリーを確認するには、[テキスト表示] をクリックします。
  - ハイパーバイザーに関連する図を確認するには、[トポロジー表示] をクリックします。
  - ハイパーバイザーに搭載された仮想マシンの情報を確認するには、[仮想マシン一覧] タブで [VM 名] のリンクをクリックします。

管理対象ハイパーバイザーの構成情報が表示されます。

#### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

### 5.2.13 仮想マシンの情報を参照する

仮想マシンの構成情報を確認します。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [仮想マシン] で、仮想マシンの種類を選択します。
3. 仮想マシンの一覧から、情報を確認する [VM 名] のリンクをクリックします。
  - 仮想マシンのサマリーを確認するには、[テキスト表示] をクリックします。
  - 仮想マシンに関連する図を確認するには、[トポロジー表示] をクリックします。

管理対象仮想マシンの構成情報が表示されます。

## 関連項目

- ・ 5.2.1 サマリー情報の参照とは

### 5.2.14 シャーシの情報を参照する

管理対象シャーシおよびそのシャーシに搭載されたブレードサーバの構成情報を確認できます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [シャーシ] を選択します。
3. ツリーを展開して、情報を確認するシャーシのタイプを選択します。
4. シャーシの一覧から、情報を確認する[シャーシ名]のリンクをクリックします。管理対象シャーシの構成情報が表示されます。  
シャーシに搭載されたブレードサーバに関する情報を確認するには、[サーバブレード] タブで [サーバ名] のリンクをクリックします。
5. シャーシの詳細なハードウェア情報を確認するには、[その他の操作] メニューから [シャーシ詳細表示] を選択します。

## 関連項目

- ・ 5.2.1 サマリー情報の参照とは

### 5.2.15 サーバの情報を参照する

管理対象サーバの構成情報や、次に示す情報を参照できます。

- ・ サーバに搭載されているホストの情報
- ・ ブレードサーバが搭載されているシャーシやブレードサーバ上の LPAR の情報
- ・ ストレージシステムのボリューム情報の取得を有効にしている場合、サーバに割り当てられているボリューム情報

サーバの情報を参照する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] を選択します。
3. ツリーを展開して、情報を参照するサーバのタイプを選択します。
4. 表示されたサーバの一覧から、情報を参照する [サーバ名] のリンクをクリックします。  
管理対象サーバの構成情報が表示されます。
  - サーバに搭載されているホストの情報を参照するには、サーバのサマリーにある [ホスト名] のリンクをクリックします。
  - ブレードサーバが搭載されているシャーシの情報を参照するには、サーバのサマリーにある [シャーシ名] のリンクをクリックします。
  - LPAR の情報を参照するには、[HVM] - [LPAR] を選択し、[LPAR Name] のリンクをクリックします。
  - サーバに割り当てられているストレージシステムのボリューム情報を参照するには、[ボリューム] タブを選択します。
5. ブレードサーバの詳細なハードウェア情報を参照するには、[その他の操作] メニューから [ブレード詳細表示] を選択します。

#### 関連項目

- 2.9 Device Manager との接続を設定する
- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

## 5.2.16 LPAR の情報を参照する

管理対象 LPAR の構成情報を参照します。また、次の情報を参照することもできます。

- LPAR 上のホストの情報
- LPAR が作成されているブレードサーバやシャーシの情報
- ストレージシステムのボリューム情報の取得を有効にしている場合、LPAR に割り当てられているボリューム情報

LPAR の情報を参照する手順を次に示します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [LPAR] - [LPAR] を選択します。
2. LPAR の一覧画面で情報を参照したい [LPAR Name] のリンクをクリックします。  
管理対象 LPAR の構成情報が表示されます。
  - LPAR 上のホストの情報を参照するには、サマリーにある [ホスト名] のリンクをクリックします。
  - LPAR が作成されているブレードサーバの情報を参照するには、サマリーにある [サーバ名] のリンクをクリックします。
  - シャーシの情報を参照するには、サマリーにある [シャーシ名] のリンクをクリックします。
  - LPAR に割り当てられているストレージシステムのボリューム情報を参照するには、[ボリューム] タブを選択します。

#### 関連項目

- 2.9 Device Manager との接続を設定する
- 3.4.6 LPAR を作成する
- 3.4.11 LPAR にホストを作成する
- 5.2.1 サマリー情報の参照とは

## 5.2.17 ストレージシステムの一覧を参照する

Compute Systems Manager でストレージシステムの一覧を参照できます。

#### 事前に確認しておく情報

- Compute Systems Manager と Device Manager が同一の管理サーバ上にインストールされている
- ストレージシステムの一覧を参照するユーザーが Device Manager のユーザーグループに登録されており、必要なリソースグループとロールが割り当てられている

#### 事前に完了しておく操作

- ストレージシステムの一覧表示を有効にする



ストレージシステムの一覧を表示するには、プロパティファイルを使って設定する必要があります。詳細は、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

- [Device Manager との接続を設定する](#)

ストレージシステムの一覧を参照する手順を次に示します。

1. [リソース] タブから [ストレージシステム] - [ストレージシステム] - [ストレージシステム] を選択します。
2. ストレージシステムの一覧から、情報を参照したい [ストレージシステム名] のリンクをクリックします。

#### 関連項目

- [2.9 Device Manager との接続を設定する](#)

## 5.2.18 管理対象の情報の更新とは

Compute Systems Manager で取得した管理対象の状態や未対処のアラートなどの情報が、実際の管理対象の構成情報と一致していない場合、管理対象を操作したときにエラーが発生するおそれがあります。最新の情報は、管理対象リソースの情報を更新することで、いつでも取得できます。

管理対象の情報は定期的に自動更新されます。ユーザーは、自動更新のタイミングを変えたり、自動更新しないように設定したりできます。

#### 関連項目

- [5.2.19 ホストの情報を更新する](#)
- [5.2.20 ハイパーバイザーの情報を更新する](#)
- [5.2.21 仮想マシンの情報を更新する](#)
- [5.2.22 シャーシの情報を更新する](#)
- [5.2.23 サーバの情報を更新する](#)
- [5.2.24 LPAR の情報を更新する](#)
- [5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する](#)

## 5.2.19 ホストの情報を更新する

ホストの最新情報を見たいときに、ホストの状態を更新します。

1. [リソース] タブをクリックします。
2. ホストの一覧から、情報を更新するホストを選択します。  
複数のホストを同時に選択できます。
3. [ホスト情報更新] をクリックします。

[リソース] タブで、ホストの状態を確認できます。

#### 関連項目

- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する](#)

## 5.2.20 ハイパーバイザーの情報を更新する

ハイパーバイザーの状態を更新すると、ハイパーバイザーの最新情報を確認できます。

1. [リソース] タブで [仮想化] を選択します。
2. [ハイパーバイザー] を選択します。
3. ツリーを展開して、情報を更新するハイパーバイザーのタイプを選択します。
4. ハイパーバイザーの一覧から、情報を更新するハイパーバイザーを選択します。  
複数のハイパーバイザーを同時に選択できます。
5. [ハイパーバイザー情報更新] ボタンをクリックします。

更新されたハイパーバイザーの情報は、[リソース] タブで確認できます。ハイパーバイザーにマウントされた仮想マシンの情報も更新されます。

### 関連項目

- 5.2.18 管理対象の情報の更新とは
- 5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する

## 5.2.21 仮想マシンの情報を更新する

仮想マシンの最新情報を見たいときに、仮想マシンの状態を更新します。

この操作を実行すると、仮想マシンが作成されているハイパーバイザーの状態も更新されます。

仮想マシンの情報を更新する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで、[仮想化] を選択します。
2. [仮想マシン] を選択します。
3. ツリーを展開して、仮想マシンの種類を選択します。
4. 仮想マシンの一覧から情報を更新したい仮想マシンを選択します。  
複数の仮想マシンを同時に選択できます。
5. [VM 情報更新] ボタンをクリックします。

更新した仮想マシンの情報は、[リソース] タブで確認できます。

### 関連項目

- 5.2.18 管理対象の情報の更新とは
- 5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する

## 5.2.22 シャーシの情報を更新する

シャーシの情報を更新すると、シャーシの状態の最新情報を確認できます。シャーシの状態を更新すると、そのシャーシに搭載された各ブレードサーバやブレードサーバ上の LPAR の状態も更新されます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [シャーシ] - [シャーシ] を選択します。
3. シャーシの一覧から、情報を更新したいシャーシを選択します。  
複数のシャーシを同時に選択できます。
4. [シャーシ情報更新] ボタンをクリックします。

更新されたシャーシの情報は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する](#)

## 5.2.23 サーバの情報を更新する

サーバの情報を更新すると、サーバの状態の最新情報を確認できます。ブレードサーバ上の LPAR の状態も更新されます。



**重要** ブレードを追加、交換、または移動した場合、ブレードが搭載されているシャーシの情報を更新する必要があります。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] を選択します。
3. ツリーを展開して、情報を更新するサーバのタイプを選択します。
4. サーバの一覧から、更新するサーバを選択します。  
複数のサーバを同時に選択できます。
5. [サーバ情報更新] ボタンをクリックします。

更新されたサーバの情報は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.2.19 ホストの情報を更新する](#)
- [5.2.22 シャーシの情報を更新する](#)
- [5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する](#)

## 5.2.24 LPAR の情報を更新する

LPAR の最新情報を見たいときに、LPAR の状態を更新します。

この操作を実行すると、LPAR が作成されているブレードサーバの状態も更新されます。

LPAR の情報を更新する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで、[シャーシ&サーバ] を選択します。
2. [LPAR] を展開し、[LPAR] を選択します。
3. LPAR の一覧から情報を更新したい LPAR を選択します。  
複数の LPAR を同時に選択できます。
4. [その他の操作] メニューをクリックし、[LPAR 情報更新] を選択します。

更新した LPAR の情報は、[リソース] タブで確認できます。

#### 関連項目

- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する](#)

## 5.2.25 管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する

管理対象リソースの情報を自動更新する間隔を設定できます。

1. [管理] タブで [システム設定] を選択します。
2. [更新間隔] を選択します。
3. [更新間隔の編集] をクリックします。
4. 値を指定し, [OK] をクリックします。

管理対象リソースの情報が自動更新されると, Compute Systems Manager が管理しているすべてのリソースの情報が更新されます。

自動更新間隔の設定を確認するには, [管理] タブで [システム設定] - [更新間隔] を選択します。



**重要** 管理対象リソースの性能情報と電力情報は, この手順に従って設定した間隔では更新されません。Compute Systems Manager が性能情報と電力情報を取得する際に使用するスケジュールの設定については, 性能情報および電力情報についてのトピックを参照してください。

### 関連項目

- 5.2.18 管理対象の情報の更新とは
- 5.2.19 ホストの情報を更新する
- 5.2.20 ハイパーバイザーの情報を更新する
- 5.2.21 仮想マシンの情報を更新する
- 5.2.22 シャーシの情報を更新する
- 5.2.23 サーバの情報を更新する
- 5.2.24 LPAR の情報を更新する
- 5.3.4 性能情報の種類と対象ホストを登録する

## 5.3 管理対象の性能や消費電力の分析

性能監視および電力監視を使用すると, 指定したリソースの性能情報と電力情報を取得できます。性能情報には, 性能関連のアラートを受信するためのしきい値を設定できます。

情報を取得することで, 性能情報を分析し, 容量拡張の計画に役立てることができます。性能関連のアラートが発生したときは, 該当する性能情報を確認し, 必要な変更を施すことで, 性能関連の問題に対処します。

### 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは

Compute Systems Manager は, 管理対象ホストからは性能情報を, 管理対象シャーシおよびサーバからは電力情報を取得します。取得した情報を分析することで, システム負荷, 性能要件, 消費電力を把握できるため, システム構成の最適化に役立ちます。

ホストの性能情報を取得するには, 性能監視のライセンス登録が必要です。

シャーシまたはサーバの電力情報を取得するには, シャーシまたはラックマウントサーバの電力監視のライセンス登録が必要です。

Compute Systems Manager が取得する性能情報および電力情報の種類を次の表に示します。

リソース種別	取得する情報の種類
ホスト	性能情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>• CPU 使用率</li> <li>• ディスク I/O 量</li> <li>• ディスク使用率</li> <li>• ネットワークパケット</li> <li>• メモリー使用率</li> <li>• I/O 待ちキューの長さ</li> </ul>
シャーシ	電力情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 入力電力 (AC)</li> <li>• 消費電力 (DC)</li> <li>• 吸気温度</li> <li>• 風量</li> </ul>
ブレードサーバ	電力情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 消費電力 (DC)</li> <li>• CPU 周波数</li> </ul>
ラックマウントサーバ	電力情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 入力電力 (AC)</li> <li>• 吸気温度</li> </ul>

Compute Systems Manager は、性能監視と電力監視のプロファイル設定に従って性能情報と電力情報を取得します。プロファイル設定は、リソースからどのような性能情報や電力情報を取得するかを定義しています。取得した情報を使用して、ホストの性能、シャーシの消費電力、サーバの消費電力を確認します。異なるリソースの性能情報と電力情報は、時系列グラフで比較できます。また、取得した性能情報や電力情報を CSV ファイルに出力することもできます。

性能情報については、取得した性能情報の種類ごと、またはホストごとに、しきい値を指定できます。しきい値を超えると、アラートを受信できます。

電力情報に基づいてシャーシおよびサーバの消費電力を最小限に抑えたい場合には、電力キャッピングを有効にします。

#### 関連項目

- [4.5.1 電力キャッピングとは](#)
- [5.1.1 アラートの設定とは](#)
- [5.3.2 性能情報を取得できるようにする](#)
- [5.3.3 電力情報を取得できるようにする](#)
- [5.4.1 CSV 形式での管理対象の情報の出力とは](#)

## 5.3.2 性能情報を取得できるようにする

ホストの性能情報を取得するには、性能情報の取得を有効にする必要があります。

1. [管理] タブで [性能/電力監視] - [性能監視] を選択します。
2. [性能監視共通設定編集] をクリックします。
3. [性能取得を有効にする] チェックボックスを選択します。
4. 性能関連のアラートを受信するためのしきい値を設定する場合、[しきい値を有効にする] チェックボックスを選択します。
5. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、しきい値の最大値とグラフの最大値を指定します。
6. [OK] をクリックします。

#### 関連項目

- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.4 性能情報の種類と対象ホストを登録する

### 5.3.3 電力情報を取得できるようにする

シャーシまたはサーバの電力情報を取得するには、電力情報の取得を有効にする必要があります。

1. [管理] タブで [性能/電力監視] - [電力監視] を順に選択します。
2. 電力情報を取得する管理対象リソースの種類を選択します。
3. [電力監視共通設定編集] をクリックします。
4. [電力情報取得を有効にする] チェックボックスを選択します。
5. 必要に応じて、[詳細設定] を展開し、電力情報のグラフに表示される最大値を変更します。
6. [OK] をクリックします。

#### 関連項目

- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.5 電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する

### 5.3.4 性能情報の種類と対象ホストを登録する

ホストの性能情報を分析する前に、取得する性能情報の種類と、対象ホストを登録します。性能情報の取得スケジュールおよびアラートを受信する場合のしきい値は、ホストごとにカスタマイズして設定したり、デフォルト値を変更して設定したりできます。

#### 事前に完了しておく操作

- 性能情報を分析するホストを管理対象に登録する
- 性能情報の取得を有効にする

性能情報の種類と対象ホストを登録する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [性能/電力監視] - [性能監視] を選択します。
2. [性能監視設定作成] ボタンをクリックします。
3. [設定名] にプロファイル名を入力します。
4. [スケジュール] で、ホストの性能情報を取得する間隔を設定します。
5. [性能情報取得] で、取得する性能情報の種類、しきい値のデフォルト設定を確認します。  
デフォルトの設定を変更しない場合、この手順を省略して対象のホストを選択します。デフォルトの設定を変更する場合は、次の手順に従います。
  - a. 変更するメトリックの行を選択します。
  - b. [性能取得設定編集] ボタンをクリックします。
  - c. 表示されるダイアログで必要な項目を入力してダイアログを閉じます。
  - d. ユーザーの設定を保存するには、[ユーザーデフォルトとして保存] ボタンをクリックします。  
ユーザー設定が保存され、次回からはシステムのデフォルト設定ではなく、ユーザーの設定が表示されるようになります。

[システムデフォルトに戻す] ボタンをクリックすると、システムのデフォルト設定が表示されます。

6. [対象ホスト] で [ホスト追加] ボタンをクリックし、対象ホストを選択してダイアログを閉じます。

対象ホストの性能情報を分析できるようになります。

#### 関連項目

- [5.1.13 性能情報のしきい値を設定する](#)
- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [5.3.2 性能情報を取得できるようにする](#)
- [5.3.6 ホストの性能情報を分析する](#)

### 5.3.5 電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する

シャーシまたはサーバの電力情報を分析する前に、取得する電力情報の種類と、電力情報を取得するリソースを登録しておく必要があります。ブレードサーバの電力情報を取得する場合、ブレードサーバが搭載されたシャーシごとに、電力情報の種類を指定できます。

#### 事前に完了しておく操作

- 電力情報を分析するリソースを管理対象に登録する
  - 電力情報の取得を有効にする
1. [管理] タブで [性能/電力監視] - [電力監視] を順に選択します。
  2. 電力情報を分析する管理対象リソースの種別を選択します。
  3. [電力監視設定作成] をクリックします。
  4. [設定名] にプロファイル名を入力します。
  5. [電力情報取得] で、情報を保存する間隔を選択します。
  6. 電力情報の種類と、電力情報を取得する管理対象リソースを選択します。
  7. [OK] をクリックして電力プロファイルを終了します。  
新しい電力プロファイルが [電力監視設定] の一覧に追加されます。

対象のシャーシまたはサーバの電力情報を分析できるようになります。

#### 関連項目

- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [5.3.3 電力情報を取得できるようにする](#)
- [5.3.7 シャーシの電力情報を分析する](#)
- [5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する](#)
- [5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する](#)

### 5.3.6 ホストの性能情報を分析する

指定したホストの最新の性能情報を一覧で表示したり、時系列のグラフで項目別に推移を確認したりできます。CPU 使用率やディスク使用率、項目同士の関係から負荷の高いホストや使用率の低いホストを特定するなど、ホストの性能を分析できます。さらに、この情報を使用してリソースの再配置や増強を検討できます。

1. [リソース] タブで [ホスト] を選択し、OS を選択します。
2. [性能情報表示] をクリックします。
3. ホストの最新性能情報の一覧を表示するには、[サマリー] タブをクリックします。  
性能情報の一覧を更新するには、更新するホストを選択し、[性能情報更新] をクリックします。
4. 性能情報の推移を確認するには、[ホスト性能] タブをクリックします。
5. [ホスト選択] をクリックして、[選択できるホスト (5 ホストまで選択可能)] の一覧から対象のホストを追加します。ホストを選択し、[OK] をクリックします。  
各項目タブで、性能情報を確認できます。
6. 項目同士の関係を確認するには、[性能メトリック] タブを選択します。
7. [ホスト選択] をクリックして、[選択できるホスト (5 ホストまで選択可能)] の一覧から対象のホストを追加します。ホストを選択し、[OK] をクリックします。  
選択したホストの、すべての性能情報の項目がグラフに表示されます。

CPU やディスクの利用率や、項目同士の相互関係を知り、負荷が集中しているホストや、余力のあるホストを確認できます。

#### 関連項目

- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [5.3.4 性能情報の種類と対象ホストを登録する](#)
- [5.4.3 ホストの性能情報を CSV 形式で出力する](#)

### 5.3.7 シャーシの電力情報を分析する

シャーシの最新の電力情報を一覧で表示したり、特定の項目の推移を時系列のグラフで確認したりできます。シャーシの消費電力情報を分析することで、シャーシの消費電力とファンの空気流量など、項目同士の関係に基づいて、消費電力の推移を把握できます。消費電力が許容範囲を超える場合、電力キャッピングを検討します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [シャーシ] - [シャーシ] を選択します。
2. [シャーシ電力情報表示] をクリックします。
3. [サマリー] タブをクリックし、シャーシの電力情報の現在値、合計値、平均値の一覧を確認します。  
現在値の確認中に最新情報を表示するには、[シャーシ電力情報更新] をクリックします。
4. 電力情報の推移を確認するには、[シャーシ電力] タブをクリックします。
5. [シャーシ選択] をクリックして、[選択できるシャーシ (5 シャーシまで選択可能)] の一覧から対象のシャーシを追加します。  
選択したシャーシの電力情報を項目ごとのタブで確認できます。
6. 項目同士の関係を確認するには、[シャーシ電力メトリック] を選択します。
7. [シャーシ選択] をクリックして、[選択できるシャーシ (5 シャーシまで選択可能)] の一覧から対象のシャーシを追加します。  
選択したシャーシの、すべての電力情報の項目がグラフに表示されます。

#### 関連項目

- [4.5.1 電力キャッピングとは](#)
- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [5.3.5 電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する](#)



- 5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する
- 5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する
- 5.4.4 シャーシの電力情報を CSV 形式で出力する

## 5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する

ブレードサーバの最新の電力情報を一覧で表示したり、特定の項目の推移を時系列のグラフで確認したりできます。ブレードサーバの消費電力情報を分析することで、ブレードサーバの消費電力と CPU 周波数など、項目同士の関係に基づいて、消費電力の推移を把握できます。消費電力が許容範囲を超える場合、ブレードサーバが搭載されたシャーシに対する電力キャッピングを検討します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ブレード] を選択します。
2. [ブレード電力情報表示] をクリックします。
3. [サマリー] タブをクリックして、ブレードサーバの電力情報の現在値、合計値、平均値の一覧を確認します。  
現在値の確認中に最新情報を表示するには、サーバを選択して [サーバ電力情報更新] をクリックします。
4. 電力情報の推移を確認するには、[サーバ電力] タブをクリックします。
5. [サーバ選択] をクリックして、[選択できるサーバ (5 サーバまで選択可能)] の一覧から対象のサーバを追加します。  
選択したブレードサーバの電力情報を項目ごとのタブで確認できます。
6. 項目同士の関係を確認するには、[サーバ電力メトリック] をクリックします。
7. [サーバ選択] をクリックして、[選択できるサーバ (5 サーバまで選択可能)] の一覧から対象のサーバを追加します。  
選択したブレードサーバの、すべての電力情報の項目がグラフに表示されます。

### 関連項目

- 4.5.1 電力キャッピングとは
- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.5 電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する
- 5.3.7 シャーシの電力情報を分析する
- 5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する
- 5.4.5 サーバの電力情報を CSV 形式で出力する

## 5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する

ラックマウントサーバの最新の電力情報を一覧で表示したり、特定の項目の推移を時系列のグラフで確認したりできます。このようにラックマウントサーバの消費電力情報を分析することで、サーバの消費電力と吸気温度の関係に基づいて、消費電力の推移を把握できます。消費電力が許容範囲を超える場合、電力キャッピングを検討します。

1. [リソース] タブから [シャーシ & サーバ] - [サーバ] - [ラックマウント] を選択します。
2. [ラックマウント電力情報表示] をクリックします。
3. [サマリー] タブをクリックして、ラックマウントサーバの電力情報の現在値、合計値、平均値の一覧を確認します。  
現在値の確認中に最新情報を表示するには、サーバを選択して [サーバ電力情報更新] をクリックします。

4. 電力情報の推移を確認するには、[サーバ電力] タブをクリックします。
5. [サーバ選択] をクリックして、ラックマウントサーバの一覧から対象のサーバを追加します。  
選択したラックマウントサーバの電力情報を項目ごとのタブで確認できます。
6. 項目同士の関係を確認するには、[サーバ電力メトリック] をクリックします。
7. [サーバ選択] をクリックして、ラックマウントサーバの一覧から対象のサーバを追加します。  
選択したラックマウントサーバの、すべての電力情報の項目がグラフに表示されます。

#### 関連項目

- 4.5.1 電力キャッピングとは
- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.5 電力情報の種類と対象シャーシ・サーバを登録する
- 5.3.7 シャーシの電力情報を分析する
- 5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する
- 5.4.5 サーバの電力情報を CSV 形式で出力する

### 5.3.10 性能情報を削除する

データベースに空き領域を確保したいときは、残すデータの起点日を検討し、不要な性能情報を手動で削除します。

1. [管理] タブをクリックします。
  2. [性能/電力監視] から [性能監視] を選択します。
  3. [性能情報削除] ボタンをクリックします。
  4. 性能情報を削除する前に、性能情報の容量を確認します。
  5. 残したいデータの起点となる日付を指定します。
  6. 削除後に残るデータの容量を確認し、[OK] をクリックして情報を削除します。
- 起点日より前の情報が削除され、性能情報を保存するための空き容量が増加します。

#### 関連項目

- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.6 ホストの性能情報を分析する

### 5.3.11 電力情報を削除する

取得した電力情報を削除して、データベースの空き容量を確保できます。データベース領域に空きを確保したいときは、残すデータの起点日を検討し、不要な電力情報を手動で削除します。

1. [管理] タブで、[性能/電力監視] - [電力監視] を順に選択します。
2. 電力情報を削除する管理対象リソースの種類を選択します。
3. [電力情報削除] ボタンをクリックします。
4. 電力情報を削除する前に、取得した電力情報の容量を確認します。
5. 残したいデータの起点となる日付を指定します。
6. 情報削除後の容量を確認し、[OK] をクリックして情報を削除します。

指定した期限より前に保存された情報が削除され、電力情報を保存するための空き容量が増加します。

#### 関連項目

- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.3.7 シャーシの電力情報を分析する
- 5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する
- 5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する

## 5.4 CSV 形式での管理対象の情報の出力

管理対象リソースからの情報を CSV ファイルに出力して保存できます。

### 5.4.1 CSV 形式での管理対象の情報の出力とは

Compute Systems Manager を使用して、管理対象リソースの情報を CSV ファイルに出力できます。

性能情報または電力情報を CSV ファイルに出力するには、プラグインライセンスが必要です。

Compute Systems Manager を使用して CSV ファイルに出力できる情報の種類を、次に示します。

- 管理対象リソースの構成情報
- ホストの性能情報
- シャーシの電力情報
- サーバの電力情報

#### 関連項目

- 5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは
- 5.4.2 管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する
- 5.4.3 ホストの性能情報を CSV 形式で出力する
- 5.4.4 シャーシの電力情報を CSV 形式で出力する
- 5.4.5 サーバの電力情報を CSV 形式で出力する

### 5.4.2 管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する

管理対象の構成情報を CSV ファイルに出力できます。出力した情報を加工することで、GUI とは異なる角度で情報を分析できます。

1. [リソース] タブをクリックします。
2. 管理対象リソースのツリーを展開し、構成情報を出力するリソースを選択します。
3. 出力のオプションを選択します。
  - 仮想マシンの場合、[CSV エクスポート] をクリックします。
  - そのほかのリソースの場合、[その他の操作] - [CSV エクスポート] を順に選択します。
4. [保存] をクリックして保存先を指定します。

指定した保存先に CSV ファイルとして出力されます。出力した情報を GUI とは異なる角度で分析できます。

#### 関連項目

- 5.2.1 サマリー情報の参照とは
- 5.4.1 CSV 形式での管理対象の情報の出力とは

### 5.4.3 ホストの性能情報を CSV 形式で出力する

ホストの性能情報を CSV ファイルに出力できます。出力した情報を加工することで、GUI とは異なる角度で情報を分析できます。

1. [リソース] タブで、[ホスト] から OS を選択します。
2. [性能情報表示] をクリックします。
3. [サマリー] タブのホスト一覧で、情報を出力するホストを選択し、[CSV エクスポート] をクリックします。
4. 出力する情報を選択し、情報を出力する期間の開始日と終了日を指定します。  
ホスト 1 台の情報を出力する場合、複数の項目を同時に選択できます。複数のホストの情報を出力する場合、選択できる項目は 1 つだけです。
5. [OK] をクリックします。
6. [保存] をクリックして保存先を指定します。

指定した保存先に CSV ファイルとして出力されます。出力した情報を GUI とは異なる角度で分析できます。

#### 関連項目

- 5.3.6 ホストの性能情報を分析する
- 5.4.2 管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する

### 5.4.4 シャーシの電力情報を CSV 形式で出力する

取得したシャーシの電力情報を CSV ファイルに出力できます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [シャーシ] を選択します。
3. [シャーシ電力情報表示] をクリックします。
4. [サマリー] タブのシャーシ一覧で、情報を出力するシャーシを選択し、[CSV エクスポート] をクリックします。
5. 表示されたウィンドウで、出力する情報の項目を選択し、情報を出力する期間の開始日と終了日を指定します。  
シャーシ 1 台の情報を出力する場合、複数の項目を同時に選択できます。複数のシャーシの情報を出力する場合、選択できる項目は 1 つだけです。
6. [OK] をクリックします。
7. [保存] をクリックして保存先を指定します。

指定した保存先に CSV ファイルとして出力されます。

#### 関連項目

- 5.3.7 シャーシの電力情報を分析する
- 5.4.2 管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する

### 5.4.5 サーバの電力情報を CSV 形式で出力する

取得したサーバの電力情報を CSV ファイルに出力できます。

1. [リソース] タブで [シャーシ & サーバ] を選択します。
2. [サーバ] を選択します。
3. ツリーを展開し、情報を出力するサーバのタイプを選択します。
4. ブレードサーバの場合、[ブレード電力情報表示] をクリックします。ラックマウントサーバの場合、[ラックマウント電力情報表示] をクリックします。
5. [サマリー] タブのサーバー一覧で、情報を出力するサーバを選択し、[CSV エクスポート] をクリックします。
6. 表示されたウィンドウで、出力する情報の項目を選択し、情報を出力する期間の開始日と終了日を指定します。  
サーバ 1 台の情報を出力する場合、複数の項目を同時に選択できます。複数のサーバの情報を出力する場合、選択できる項目は 1 つだけです。
7. [OK] をクリックします。
8. [保存] をクリックして保存先を指定します。

指定した保存先に CSV ファイルとして出力されます。

#### 関連項目

- 5.3.8 ブレードサーバの電力情報を分析する
- 5.3.9 ラックマウントサーバの電力情報を分析する
- 5.4.2 管理対象の構成情報を CSV 形式で出力する

## 5.5 管理対象のグルーピング

Compute Systems Manager を使用すると、管理者は管理対象リソースをフォルダや論理グループにグループ分けできます。

### 5.5.1 論理グループとは

論理グループとは、管理対象リソースを設置場所、組織、または用途別にグルーピングしたものです。

論理グループを利用すると、論理グループごとに管理対象の稼働状況や構成情報を確認したり、同じ論理グループに所属する管理対象に同じ操作を実施したりできます。

論理グループには次の 2 種類があります。

- フォルダ  
配下に論理グループ（フォルダ、リソースのグループ）を登録します。
- リソースのグループ  
リソースを登録します。この論理グループは最下層になります。

これらの論理グループの管理方法には次の2種類があります。

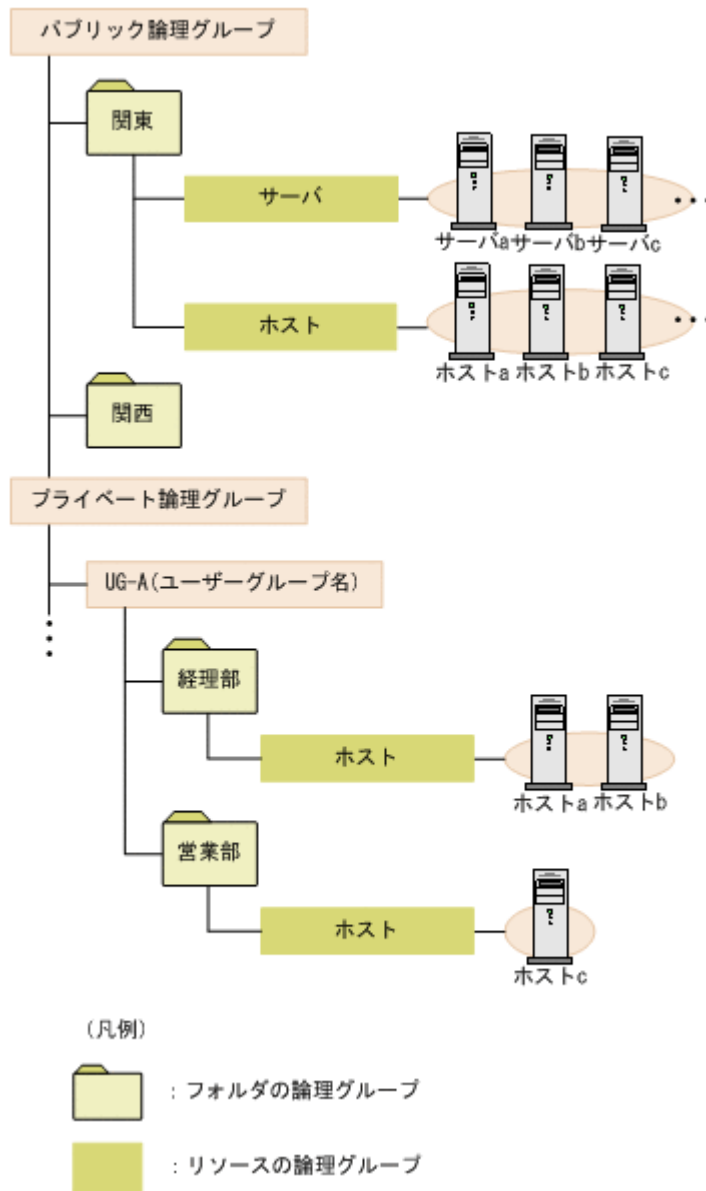
- パブリック論理グループ

Compute Systems Manager のユーザーであれば、属するユーザーグループに割り当てられたロールに応じて、誰でも参照、作成、編集、または削除できます。各論理グループは、[パブリック論理グループ]の配下に作成します。論理グループの階層を示す際に、パスの先頭はスラント (/) で表示されます。

- プライベート論理グループ

同じユーザーグループに属しているユーザーだけが、参照、作成、編集、および削除できます。各論理グループは、[プライベート論理グループ]の直下に作成されるユーザーグループごとのフォルダ (デフォルト:[<ユーザーグループ名>])の配下に作成します。論理グループの階層を示す際に、パスの先頭はチルダ (~) で表示されます。

フォルダと論理グループの階層を、次の図に示します。



作成した論理グループについては、階層構造を変更したり、リソースを追加または削除したりできます。各リソースを複数の論理グループに追加することもできます。

#### 関連項目

- 5.5.2 論理グループを作成する
- 5.5.3 論理グループを編集する
- 5.5.4 論理グループの情報を参照する
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール

## 5.5.2 論理グループを作成する

管理対象リソースを分類して管理するために、論理グループを作成します。

#### 事前に完了しておく操作

- 管理対象を探索して **Compute Systems Manager** に登録する

論理グループを作成する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [論理グループ] を選択します。
2. 論理グループの管理方法を選択します。  
プライベート論理グループの場合、[プライベート論理グループ] 下のユーザーグループを選択します。
3. [論理グループ作成] をクリックし、必要な項目を設定します。

[論理グループ] で、作成した論理グループやフォルダの階層を確認できます。

#### 関連項目

- 5.5.1 論理グループとは
- 5.5.3 論理グループを編集する
- 5.5.4 論理グループの情報を参照する

## 5.5.3 論理グループを編集する

論理グループを作成したあと、論理グループを移動したり、リソースを論理グループに追加または削除したりできます。

論理グループを編集する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [論理グループ] をクリックします。
2. 論理グループの一覧から、編集したい論理グループを選択します。
3. [論理グループ編集] をクリックし、必要な項目を設定します。

論理グループを移動した場合、[論理グループ] のツリーを展開すると変更後の構成を確認できるようになります。論理グループに属するリソースを変更した場合、論理グループ内のリソース一覧で変更後の内容を確認できます。

#### 関連項目

- 5.5.1 論理グループとは
- 5.5.2 論理グループを作成する
- 5.5.4 論理グループの情報を参照する

## 5.5.4 論理グループの情報を参照する

論理グループ内のリソースの数や、各リソースの稼働状況などを参照できます。

論理グループの情報を参照する手順を次に示します。

1. [リソース] タブで [論理グループ] をクリックします。
2. ツリーを展開して、情報を参照したい論理グループを選択します。

### 関連項目

- [5.5.1 論理グループとは](#)
- [5.5.2 論理グループを作成する](#)
- [5.5.3 論理グループを編集する](#)

## 5.6 アラートへの対処

Compute Systems Manager では、管理対象リソースで発生したエラーまたは障害への対処に役立つアラートの詳細情報を確認できます。

### 5.6.1 アラートへの対処とは

Compute Systems Manager では、管理対象リソースで発生したエラーや障害のアラート通知を確認できます。

通知されたアラートで、障害が発生したリソース名や、障害の具体的な場所に関する情報の詳細が参照できます。

アラート通知は、Eメールで受け取ることもできます。

アラートは、次に示す状態のうちのどれかに分類されます。

- 未対処
- 実行中
- 解決

すべてのアラートを見逃さないように、未対処のアラートをほかの担当者に割り当てたり、指定した担当者にEメールで通知したりできます。

担当者は、アラートを確認して対処します。また、割り当てられたアラートの対処を別のユーザーに依頼することもできます。

アラートは一覧から削除できます。アラートが100万件（最大保存件数）を超えると、定期的の日付の古いアラートから削除されます。削除後に保持されるアラート数は、約90万件（保持件数）です。アラートの最大保存件数と保持件数は、ユーザーが変更することもできます。

### 関連項目

- [5.1.1 アラートの設定とは](#)
- [5.1.14 アラートの保持件数を変更する](#)
- [5.6.2 アラートに対処するための確認事項](#)
- [5.6.3 アラートに対処する](#)
- [5.6.4 アラートに担当者を割り当てる](#)



- 5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する
- 5.6.6 アラートの一覧を参照する
- 5.6.7 アラートを削除する

## 5.6.2 アラートに対処するための確認事項

Compute Systems Manager でアラートを受信する前に、次のタスクを実施しておく必要があります。

- 管理対象ホストで、SNMP トラップが管理サーバに送信されるように設定する
- ホストのアラートを受信する場合、Compute Systems Manager で SNMP トラップの受信を設定する
- 性能アラートを受信する場合、性能情報のしきい値を設定する

アラートの送信に E メール通知を使用する場合は、次のタスクも実施しておく必要があります。

- Compute Systems Manager で、E メール通知を有効にして、SMTP サーバを設定する
- E メールを送受信する各ユーザーの E メールアドレスを登録する

### 関連項目

- 5.1.1 アラートの設定とは
- 5.6.1 アラートへの対処とは

## 5.6.3 アラートに対処する

アラートの詳細を確認し、未対処のアラートに対処します。対処が完了したら、アラートが解決したことをほかのユーザーに通知できます。

1. [ダッシュボード] で [未解決アラート] の一覧からアラートを選択し、[アラート対処] をクリックします。
2. アラートの詳細を確認し、アラートの原因となっている問題を解決するために適切な対処を実施します。
  - アラート情報を確認するには、[関連画面に移動する] チェックボックスを選択し、ドロップダウンメニューから関連する画面を選択し、[OK] をクリックします。
  - 問題を解決したら、[アラート詳細情報] ウィンドウに戻り、[更新状態] エリアで、[状態] を [解決済みにする] に変更します。
3. ほかのユーザーに E メールを送信するには、[アラート共有] エリアで [メッセージ作成] をクリックします。
4. 表示されるダイアログで必要な項目を入力します。
5. [送信] をクリックします。
6. さらに、[複数アラート更新] を展開してほかのアラートを選択し、状態を解決済みに変更することもできます。
7. [OK] をクリックして、ダイアログを閉じます。

選択したアラートの状態が、[解決] に変更されます。E メールをほかのユーザーに送信するように指定している場合、E メールが送信されます。

#### 関連項目

- 5.6.1 アラートへの対処とは
- 5.6.2 アラートに対処するための確認事項
- 5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する

### 5.6.4 アラートに担当者を割り当てる

対処が必要なアラートを特定のユーザーに割り当てることができます。割り当てたアラートは、担当者以外のユーザーが対処することもできます。

1. [ダッシュボード] で [未解決アラート] の一覧からアラートを選択し、[アラート対処] をクリックします。
2. [更新状態] エリアで、[状態] を [対処中] に変更します。
3. アラートを割り当てるユーザーを変更します。
4. ユーザーに E メールを送信するには、[アラート共有] エリアで [メッセージ作成] をクリックします。
5. 表示されるダイアログで必要な項目を入力します。
6. [送信] をクリックします。
7. ほかのアラートを同じ担当者に割り当てたい場合は、[複数アラート更新] を開いてアラート ID を選択します。
8. [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。

アラートに担当者が割り当てられ、アラートのステータスが [対処中] に変更されます。

#### 関連項目

- 5.6.1 アラートへの対処とは
- 5.6.2 アラートに対処するための確認事項
- 5.6.3 アラートに対処する
- 5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する

### 5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する

アラートを割り当てられたユーザーはアラートに対処できない場合、ほかのユーザーに委任して対処してもらうことができます。

アラートに担当者を割り当てるロールを持たない場合は、ほかのユーザーに E メールを送信し、自分に代わってアラートに対処してもらうように依頼します。

1. [ダッシュボード] で [未解決アラート] の一覧からアラートを選択し、[アラート対処] をクリックします。
2. [アラート共有] で [メッセージ作成] をクリックします。
3. 表示されるダイアログで必要な項目を入力します。
4. [送信] をクリックします。
5. [OK] をクリックして、ダイアログを閉じます。

指定したユーザーに E メールが送信されます。

#### 関連項目

- ・ 5.6.1 アラートへの対処とは
- ・ 5.6.2 アラートに対処するための確認事項
- ・ 5.6.3 アラートに対処する
- ・ 5.6.4 アラートに担当者を割り当てる

### 5.6.6 アラートの一覧を参照する

管理対象リソースで発生したアラート、およびアラートの状態を確認できます。

1. [タスク & アラート] タブで [アラート] を選択します。
2. ツリーを展開し、表示期間を選択します。

アラートおよびアラートの状態が一覧で表示されます。

#### 関連項目

- ・ 5.6.1 アラートへの対処とは
- ・ 5.6.3 アラートに対処する

### 5.6.7 アラートを削除する

解決済みかどうかに関係なく、任意のアラートを削除できます。

1. [タスク & アラート] タブで [アラート] を選択します。
2. ツリーを展開し、表示期間を選択します。
3. 一覧から削除するアラートを選択します。
4. [アラート削除] をクリックして、削除するアラートの一覧が正しいことを確認します。
5. [OK] をクリックします。

#### 関連項目

- ・ 5.6.1 アラートへの対処とは
- ・ 5.6.6 アラートの一覧を参照する



## ユーザー管理と管理対象へのアクセス制御

この章では、ユーザーアカウントの管理と、管理対象リソースに対するアクセス制御の設定について説明します。

- 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- 6.2 ユーザーの管理
- 6.3 リソースグループの管理
- 6.4 ユーザーグループの管理

## 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは

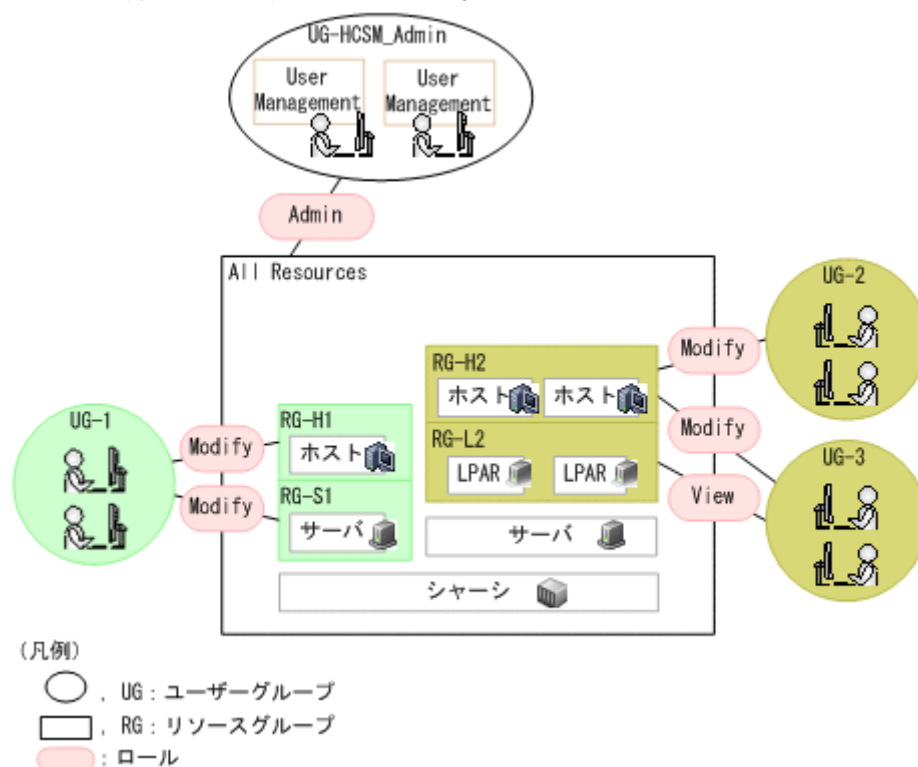
Compute Systems Manager の管理対象リソース、およびユーザーをグルーピングし、それぞれリソースグループ、およびユーザーグループとして管理します。ユーザーグループにリソースグループおよびロール（操作権限）を割り当てることで、管理対象に対するアクセスを制御できます。これによって、管理対象を会社や部門などで分割して運用するマルチテナントに対応できます。

管理対象に対するアクセス制御は、次の権限を持つシステム管理者が実施します。

- ビルトインリソースグループである All Resources に対する Admin ロール
- User Management 権限

システム管理者は、管理対象の種別ごとにリソースグループを、使用するリソースとロールが同じユーザーごとにユーザーグループを作成します。

アクセス制御の設定例を次の図に示します。



ユーザーは、割り当てられたリソースグループのリソースだけを、与えられたロールの権限で参照および操作できます。上図の例では、UG-1 のユーザーは、割り当てられているリソースグループ (RG-H1 と RG-S1) のリソースを参照および操作できます。しかし、割り当てられていないリソースグループ (RG-H2, RG-L2 など) のリソースは参照できません。

システム管理者は適切にリソースグループを作成し、ユーザーグループに適切なリソースグループとロールを割り当ててください。



**重要** 電源管理や情報の更新は、操作対象のリソース上で動作するリソースにも影響を与えます。システム管理者は、影響を受けるリソースをユーザーが確認できるように、操作対象のリソース上で動作するリソースが属するリソースグループもユーザーグループに割り当ててください。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.4.1 ユーザーグループとは

- ・ 6.4.2 ロールの種類
- ・ 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール

## 6.2 ユーザーの管理

ユーザーの管理について説明します。

### 6.2.1 ユーザー管理とは

Compute Systems Manager を使用するユーザーアカウントを作成し、その操作範囲に応じた権限やロールを設定します。

Compute Systems Manager をインストールすると、System アカウントがデフォルトで設定されます。デフォルトのパスワードは「manager」です。このアカウントを使用すると、すべての Hitachi Command Suite 製品の操作とユーザー管理の操作を実行できます。このアカウントは削除したり ID を変更したりできません。

ユーザーアカウントを作成した場合、必要に応じて、ほかのユーザーを管理する User Management 権限を割り当てます。また、ユーザーアカウントはユーザーグループに登録し、リソースグループを割り当てる必要があります。リソースグループを割り当てられていないユーザーは Compute Systems Manager にログインできません。

Hitachi Command Suite 製品は、ユーザーアカウントおよびユーザーグループを共有しています。ほかの Hitachi Command Suite 製品で作成したユーザーアカウントを Compute Systems Manager で作成したユーザーグループに追加することもできます。

LDAP ディレクトリサーバなどの外部認証サーバと連携して、ユーザーアカウントを管理することもできます。ただし、ビルトインの System アカウントを外部認証サーバで認証することはできません。

外部認証サーバと連携する場合、外部認可サーバを併用することで、Compute Systems Manager に対する各ユーザーの権限を外部認可サーバのグループ（認可グループ）単位で管理できます。外部認証サーバおよび外部認可サーバと連携するための管理サーバでの設定方法については、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド」を参照してください。

#### 関連項目

- ・ 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- ・ 6.2.2 ユーザーアカウントを作成する
- ・ 6.2.3 User Management 権限を設定する
- ・ 6.2.4 ユーザーアカウントのプロファイルを編集する
- ・ 6.2.5 自分のプロファイルを編集する
- ・ 6.2.6 ユーザーアカウントのパスワードを変更する
- ・ 6.2.7 自分のパスワードを変更する
- ・ 6.2.8 ユーザーアカウントをロックする
- ・ 6.2.10 ユーザーの認証方式を変更する
- ・ 6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について
- ・ 6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループに登録する
- ・ 6.2.13 Compute Systems Manager から認可グループを削除する

- 6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する
- 6.2.15 Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除する
- 6.4.2 ロールの種類
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール

## 6.2.2 ユーザーアカウントを作成する

Compute Systems Manager にアクセスするには、ユーザーアカウントが必要です。

ユーザーアカウントを作成する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] - [ユーザー] の順にクリックします。
2. [ユーザー追加] をクリックして、ユーザー ID とパスワードを入力します。
3. [OK] をクリックします。



### 重要

- ユーザーを削除すると、そのユーザーが登録していたタスクは失敗します。
- ユーザーアカウントが外部認証サーバで管理されている場合、パスワードの設定は外部認証サーバで実施してください。
- ユーザーアカウントが複数のドメインまたはレルムで構成される外部認証サーバで管理されている場合、ユーザー ID にはドメイン名またはレルム名を含めて入力してください。  
例: <ユーザー名>@<ドメイン名またはレルム名>  
ログイン時にも、上記の形式でユーザー ID を入力してください。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.4.1 ユーザーグループとは

## 6.2.3 User Management 権限を設定する

作成したユーザーがほかのユーザーを管理する場合、User Management 権限を設定します。

User Management 権限を設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] - [ユーザー] の順にクリックします。
2. ユーザーの一覧から、対象のユーザー名のリンクをクリックして [権限変更] ボタンをクリックします。
3. User Management 権限を設定します。



参考 外部認可サーバと連携する場合、外部認可ユーザーに対する User Management 権限は、ユーザーごとではなく、認可グループ単位で設定します。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループを登録する
- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール



## 6.2.4 ユーザーアカウントのプロファイルを編集する

ユーザーのフルネーム, E メールアドレス, および説明を編集できます。外部認可サーバでユーザーアカウントを管理している場合は, 外部認可サーバ側でプロファイルを編集してください。

ユーザーアカウントのプロファイルを編集する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] - [ユーザー] の順にクリックします。
2. ユーザーの一覧から, 対象のユーザー名のリンクをクリックして [プロフィール編集] ボタンをクリックします。
3. プロファイルの情報を編集し, [OK] をクリックします。

ユーザーの一覧で, 編集した内容が反映されたことを確認できます。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する

## 6.2.5 自分のプロフィールを編集する

自分のフルネーム, E メールアドレスなどの情報を編集します。

自分のプロフィールを編集する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [プロフィール] をクリックします。
2. [プロフィール編集] をクリックします。
3. プロファイルの情報を編集します。
4. [OK] をクリックします。

[プロフィール] を選択したときの画面で, 編集した内容が反映されたことを確認できます。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは

## 6.2.6 ユーザーアカウントのパスワードを変更する

管理者が, 自分以外のユーザーのパスワードを変更します。対象のユーザーを外部認証サーバで管理している場合は外部認証サーバ側で変更してください。

ユーザーアカウントのパスワードを変更する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] - [ユーザー] の順にクリックします。
2. ユーザーの一覧から, 対象のユーザー名のリンクをクリックして [パスワード変更] ボタンをクリックします。
3. 新しいパスワードを入力し, 確認します。
4. [OK] をクリックします。

パスワードを変更されたユーザーは, 新しいパスワードでログインできるようになります。

### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは

- ・ [6.2.7 自分のパスワードを変更する](#)

## 6.2.7 自分のパスワードを変更する

自分のパスワードを変更します。自分のユーザーアカウントが外部認証サーバで管理されている場合は外部認証サーバ側で変更してください。

自分のパスワードを変更する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [プロフィール] をクリックします。
2. [パスワード変更] をクリックします。
3. 新しいパスワードを入力し、確認します。
4. [OK] をクリックします。

新しいパスワードでログインできるようになります。

### 関連項目

- ・ [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- ・ [6.2.6 ユーザーアカウントのパスワードを変更する](#)

## 6.2.8 ユーザーアカウントをロックする

ログイン中のユーザーのアカウントを含む、あらゆる Compute Systems Manager ユーザーアカウントをロックできます。

アカウントをロックされたユーザーは、ログアウトおよびヘルプの参照以外の機能は実行できません。また、すべての Hitachi Command Suite 製品にログインできなくなります。

ユーザーアカウントをロックする手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] を選択します。
2. [ユーザー] を選択します。  
ユーザーの一覧が表示されます。
3. ロックするユーザーのチェックボックスを選択して、[ロック] をクリックします。



**重要** System アカウントをロックするには、設定を指定するためのプロパティファイルを使用する必要があります。詳細については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

### 関連項目

- ・ [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- ・ [6.2.9 ユーザーアカウントのロックを解除する](#)
- ・ [6.2.17 自動アカウントロックを設定する](#)

## 6.2.9 ユーザーアカウントのロックを解除する

手動でロックされたユーザーアカウント、または自動アカウントロック機能で自動的にロックされたユーザーアカウントのロックを解除できます。

ロックを解除されたユーザーは、すべての Hitachi Command Suite 製品にログインできるようになります。

ユーザーアカウントのロックを解除する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] を選択します。
2. [ユーザー] を選択します。  
ユーザーの一覧が表示されます。
3. ロックするユーザーのチェックボックスを選択して、[ロック解除] をクリックします。

#### 関連項目

- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- [6.2.8 ユーザーアカウントをロックする](#)
- [6.2.17 自動アカウントロックを設定する](#)

## 6.2.10 ユーザーの認証方式を変更する

Compute Systems Manager にログインするときの認証方式を変更し、外部認証サーバで認証します。Compute Systems Manager のアカウントとして認証するか、外部認証サーバで認証するかは、ユーザーごとに設定します。

管理サーバでの設定方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。

#### 事前に完了しておく操作

- 管理サーバでの、外部認証サーバと連携するための設定
- 外部認証サーバに Compute Systems Manager で使用するユーザー ID およびパスワードの登録

ユーザーの認証方式を変更する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] を選択します。
2. ツリーで [ユーザー] を選択し、認証方式を変更したいユーザーのチェックボックスを選択します。
3. [認証方式変更] をクリックします。
4. 認証方式を指定し、設定を更新します。
5. [ユーザー] 一覧の [認証方式] 列で、認証方式が正しく変更されていることを確認します。

#### 関連項目

- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- [6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループを登録する](#)

## 6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について

Compute Systems Manager に登録した認可グループに属するユーザー（外部認可ユーザー）は、Compute Systems Manager のユーザーと同様に Compute Systems Manager を操作できます。

外部認可ユーザーが Compute Systems Manager にログインすると、Compute Systems Manager は、外部認可サーバから次の情報を取得します。取得された情報は、[管理] タブ - [ユーザーグループ] - [外部認可ユーザー] タブの外部認可ユーザーの一覧で確認できます。

- ユーザー名

- E メールアドレス
- 所属する認可グループ



**重要** 外部認可サーバ側で次の操作をした場合、対象のユーザーは Compute Systems Manager にログインしてください。

- ユーザーアカウントの作成
- ユーザーの E メールアドレスまたは所属する認可グループの変更

ログインすることで、外部認可サーバ側で設定した情報が、Compute Systems Manager に反映されます。ログイン後に外部認可サーバ側で上記の操作をした場合は、再ログインしてください。

#### 関連項目

- 2.4.1 Compute Systems Manager へログインする
- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループを登録する
- 6.2.13 Compute Systems Manager から認可グループを削除する
- 6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する
- 6.2.15 Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除する

## 6.2.12 Compute Systems Manager に認可グループを登録する

外部認可ユーザーが Compute Systems Manager を利用できるように、Compute Systems Manager に認可グループを登録します。

#### 事前に完了しておく操作

- 管理サーバでの、外部認可サーバを併用した外部認証サーバ連携の設定  
管理サーバでの設定方法については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド*」を参照してください。
- 外部認可サーバ側での、ユーザー ID およびパスワードの登録  
Compute Systems Manager で使用するユーザー ID およびパスワードをあらかじめ登録しておきます。

Compute Systems Manager に認可グループを登録する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] を選択します。
2. ツリービューで [グループ] - [<ドメイン名>] を選択し、[グループ追加] をクリックします。
3. 必要な項目を指定します。  
[Distinguished Name] に認可グループの識別名を入力します。 [チェック DN] をクリックして、識別名が外部認可サーバに登録されているか確認します。
4. 必要に応じて、User Management 権限を設定します。  
追加した認可グループを [<ドメイン名>] から選択し、[権限変更] をクリックします。



**参考** 外部認可ユーザーに Compute Systems Manager の操作権限を与えるには、リソースグループの一覧で、認可グループに対してリソースグループとロールを割り当てます。

5. 権限を設定し、ダイアログを閉じます。

#### 関連項目

- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.2.10 ユーザーの認証方式を変更する
- 6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

## 6.2.13 Compute Systems Manager から認可グループを削除する

外部認可サーバ側で、Compute Systems Manager に登録した認可グループを削除する場合は、削除する前に、Compute Systems Manager からその認可グループを削除する必要があります。

#### 事前に完了しておく操作

- 対象の認可グループに属するユーザーが登録した、すべての実行待ち状態のタスクの削除
- アラートの対処を別のユーザーに依頼  
対象の認可グループに属するユーザーが、アラートの対処の担当者に割り当てられている場合は、アラートの対処を別のユーザーに依頼します。

Compute Systems Manager から認可グループを削除する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザー管理] を選択します。
2. ツリービューで [グループ] - [<ドメイン名>] を選択します。
3. 認可グループの一覧で対象の認可グループのチェックボックスを選択し、[グループ削除] ボタンをクリックします。
4. 削除する認可グループを確認し、[OK] ボタンをクリックします。

削除した認可グループは、認可グループの一覧に表示されなくなります。

#### 関連項目

- 4.6.6 タスクを削除する
- 5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する
- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について

## 6.2.14 外部認可ユーザーのプロファイルを変更する

外部認可サーバ側で、Compute Systems Manager に登録した外部認可ユーザーの E メールアドレス、または所属するグループを変更した場合は、その情報を反映させるための Compute Systems Manager での操作が必要です。



参考 外部認可ユーザーを Compute Systems Manager に登録したすべての認可グループから外した場合は、Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除してください。

#### 事前に完了しておく操作

- 外部認可サーバ側で、外部認可ユーザーの E メールアドレス、または所属するグループの変更

外部認可ユーザーの E メールアドレス、または所属するグループを変更したときに、Compute Systems Manager で実施する操作の手順を次に示します。

1. Compute Systems Manager にログインします。

ログインすることで、外部認可サーバ側で変更した情報が、Compute Systems Manager に反映されます。ログインしないと、E メール通知が正しく実行されません。

ログイン後に外部認可サーバ側でプロファイルを変更した場合も、情報を反映させるために再ログインしてください。

2. 管理対象の各リソースに対して、次に示す実行待ち状態のタスクがある場合は、タスクを登録し直します。
  - 電源 ON, 電源 OFF, または再起動  
ホスト, 仮想マシン, サーバ, HVM, LPAR
  - 管理対象の情報の更新  
ホスト, ハイパーバイザー, 仮想マシン, シャーシ, サーバ, LPAR
  - 性能情報および電力情報の更新  
ホスト, シャーシ, サーバ

タスクを登録し直さないと、変更した E メールアドレスが反映されず、タスクの実行結果が通知されません。所属グループを変更した場合は、タスクが正しく実行されません。
3. アラートの対処の担当者に割り当てられている場合は、アラートの対処を別のユーザーに依頼します。

#### 関連項目

- [2.4.1 Compute Systems Manager へログインする](#)
- [4.1.1 電源管理とは](#)
- [4.6.6 タスクを削除する](#)
- [5.2.18 管理対象の情報の更新とは](#)
- [5.3.1 性能情報および電力情報の分析とは](#)
- [5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する](#)
- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- [6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について](#)
- [6.2.15 Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除する](#)

## 6.2.15 Compute Systems Manager から外部認可ユーザーのアカウント情報を削除する

外部認可サーバ側で、Compute Systems Manager に登録した外部認可ユーザーを削除した場合、または外部認可ユーザーを Compute Systems Manager に登録したすべての認可グループから外した場合、Compute Systems Manager からそのユーザーのアカウント情報を削除する必要があります。



**重要** Compute Systems Manager からユーザーアカウント情報を削除しないと、アラート発生時にユーザーに E メールが送信されます。

#### 事前に完了しておく操作

- 対象のユーザーが登録したすべての実行待ち状態のタスクの削除
  - アラートの対処を別のユーザーに依頼
- 対象のユーザーがアラートの対処の担当者に割り当てられている場合は、アラートの対処を別のユーザーに依頼します。

外部認可ユーザーのアカウント情報を **Compute Systems Manager** から削除する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [外部認可ユーザー] タブで対象のユーザーを選択し、[外部認可ユーザー削除] ボタンをクリックします。
3. 削除するユーザーを確認し、[OK] ボタンをクリックします。

削除したユーザーは、[外部認可ユーザー] の一覧に表示されなくなります。

#### 関連項目

- [4.6.6 タスクを削除する](#)
- [5.6.5 アラートの対処を別のユーザーに依頼する](#)
- [6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について](#)

## 6.2.16 パスワードポリシーを設定する

パスワードポリシーを設定することで、ユーザーセキュリティを強化できます。

ユーザー認証に外部認証サーバを使用している場合、外部認証サーバで指定されている文字の種類のみ組み合わせを使用してパスワードがチェックされます。

設定したパスワードポリシーは、ユーザーアカウントを追加したときや既存のユーザーパスワードを変更したときに適用されます。そのため、既存のパスワードがパスワードポリシーを満たさない場合でも、ユーザーは引き続きそのパスワードでシステムにログインできます。

パスワードポリシーを設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [セキュリティ] を選択します。
2. [パスワード] を選択します。
3. [設定変更] をクリックして、新しいパスワードポリシーを入力します。
4. [OK] をクリックします。
5. [パスワード] を再び選択して、パスワードポリシーが設定されたことを確認します。

#### 関連項目

- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)

## 6.2.17 自動アカウントロックを設定する

同じユーザーに対して不正なパスワード入力が続いた場合に、そのユーザーを自動的にロックします。

自動アカウントロックを設定する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [セキュリティ] を選択します。
2. [アカウントロック] を選択します。
3. [設定変更] をクリックして、アカウントがロックされるまでのログイン連続失敗回数を指定します。
4. [OK] をクリックします。
5. [アカウントロック] を再び選択して、アカウントロックポリシーが設定されたことを確認します。



#### 重要

- Compute Systems Manager 以外の Hitachi Command Suite 製品を使用している場合、ほかの Hitachi Command Suite 製品でログインに失敗した回数も失敗回数としてカウントされます。
- 外部認証サーバと連携してユーザーを認証する場合、自動ロックの制御は、外部認証サーバでの設定が適用されます。
- System アカウントをロックの対象にするには、プロパティファイルを使って設定する必要があります。詳細は、マニュアル「Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド」を参照してください。

#### 関連項目

- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- [6.2.8 ユーザーアカウントをロックする](#)
- [6.2.9 ユーザーアカウントのロックを解除する](#)

## 6.3 リソースグループの管理

リソースグループの管理について説明します。

### 6.3.1 リソースグループとは

リソースグループは、Compute Systems Manager の管理対象リソースをグルーピングしたものです。

リソースグループには、次の種類があります。

- All Resources  
Compute Systems Manager のすべての管理対象リソースが登録されているビルトインリソースグループです。インストール時に自動で作成されます。
- ユーザー定義のリソースグループ  
Compute Systems Manager の管理対象リソースを登録するリソースグループです。運用する環境に応じて、システム管理者がリソース種別ごとに作成します。



重要 1つの管理対象リソースは、2つ以上のユーザー定義のリソースグループに登録できません。

#### 関連項目

- [6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは](#)
- [6.2.1 ユーザー管理とは](#)
- [6.3.2 リソースグループを作成する](#)
- [6.3.3 リソースグループを編集する](#)
- [6.4.1 ユーザーグループとは](#)

### 6.3.2 リソースグループを作成する

管理対象リソースへのアクセスを制御するために、リソースグループを作成します。

#### 事前に完了しておく操作

- リソースグループに追加するリソースを管理対象に登録する



リソースグループを作成する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [リソースグループ] を選択します。
2. [リソースグループ作成] ボタンをクリックします。
3. リソース種別, 追加する管理対象リソースなど必要な項目を設定します。

リソースグループの一覧で, 作成したリソースグループを確認できます。

#### 関連項目

- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.3.3 リソースグループを編集する

### 6.3.3 リソースグループを編集する

作成済みのリソースグループに管理対象リソースを追加したり, 削除したりします。

リソースグループを編集する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [リソースグループ] を選択します。
2. 対象のリソースグループを選択して [リソースグループ編集] ボタンをクリックします。
3. 必要な項目を設定します。

リソースグループの一覧で, リソースグループ名のリンクをクリックすると, 編集した内容が反映されたことを確認できます。

#### 関連項目

- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.3.2 リソースグループを作成する

## 6.4 ユーザーグループの管理

ユーザーグループの管理について説明します。

### 6.4.1 ユーザーグループとは

ユーザーグループは, ユーザーアカウントをグルーピングしたものです。ユーザーグループにリソースグループおよびロールを割り当てることで, 管理対象に対するアクセスを制御できます。

ユーザーグループには, 次の種類があります。

- **Compute Systems Manager** のビルトインユーザーグループ  
Compute Systems Manager の All Resources が割り当てられています。インストール時に, ロールに応じた次のユーザーグループが自動で作成されます。
  - HCSM\_AdminGroup
  - HCSM\_ModifyGroup
  - HCSM\_ViewGroup

必要に応じて, システム管理者がユーザーアカウントを追加して使用します。Compute Systems Manager をバージョン 8.0.1 以前からアップグレードすると, 既存のユーザーアカウントは権限に応じてこれらのユーザーグループに自動で追加されます。

- **Hitachi Command Suite 製品共通のビルトインユーザーグループ**  
各 Hitachi Command Suite 製品の All Resources が割り当てられています。インストール時に、ロールに応じた次のユーザーグループが自動で作成されます。
  - AdminGroup
  - ModifyGroup
  - ViewGroup必要に応じて、システム管理者がユーザーアカウントを追加して使用します。これらのユーザーグループは削除できません。名前や説明を変更したり、リソースグループとロールの割り当てを変更したりもできません。  
また、これら以外のビルトインユーザーグループが Compute Systems Manager の GUI に表示されることがありますが、Compute Systems Manager では使用しません。
- **ユーザー定義のユーザーグループ**  
Compute Systems Manager のリソースグループとロールを任意に割り当てられるユーザーグループです。必要に応じて、システム管理者が作成します。
- **認可グループ (外部認可サーバのグループ)**  
外部認可サーバと連携することで、Hitachi Command Suite 製品に登録した認可グループをユーザーグループとして利用できます。認可グループには、Compute Systems Manager のユーザーグループと同様に、リソースグループとロールを割り当てられます。



**重要** Compute Systems Manager で作成したユーザーグループに、ほかの Hitachi Command Suite 製品のリソースグループを割り当てることもできます。ただし、ほかの Hitachi Command Suite 製品のリソースグループは Compute Systems Manager の GUI に表示されません。  
また、ほかの Hitachi Command Suite 製品のリソースグループが割り当てられているユーザーグループは Compute Systems Manager の GUI から削除できません。削除するには、ほかの Hitachi Command Suite 製品の GUI からリソースグループの割り当てを解除する必要があります。

## 関連項目

- 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- 6.2.1 ユーザー管理とは
  - 6.2.11 外部認可ユーザーによる Compute Systems Manager の利用について
- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.4.2 ロールの種類
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール
- 6.4.4 ユーザーグループを作成する
- 6.4.5 ユーザーグループを編集する
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる
- 6.4.7 ユーザーが属するユーザーグループを変更する
- 6.4.8 ユーザーグループまたはユーザーの情報を CSV ファイルに出力する

## 6.4.2 ロールの種類

ユーザーグループに割り当てられるロールについて説明します。

ロールの種類と、ロールを割り当てられたユーザーグループに属するユーザーが Compute Systems Manager でできることを次の表に示します。

ロール	できること
Admin	管理対象リソースの操作, リソース情報の参照, システム設定の参照などができます。さらに, All Resources が割り当てられている場合は, 管理対象となるリソースの登録, システム設定の変更ができます。
Modify	リソースの操作, リソース情報の参照などができます。
View	リソースの情報を参照できます。

#### 関連項目

- ・ 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- ・ 6.2.1 ユーザー管理とは
- ・ 6.3.1 リソースグループとは
- ・ 6.4.1 ユーザーグループとは
- ・ 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール
- ・ 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

### 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール

Compute Systems Manager の機能を実行するために必要なリソースグループ, ロールおよび権限は, 機能ごとに異なります。

All Resources を割り当てられたユーザーグループに属するユーザーは, リソースの登録やデプロイメントマネージャーの設定などを実行できます。

ユーザー定義のリソースグループを割り当てられたユーザーグループに属するユーザーは, 電源管理と情報の更新を実行できます。

ユーザーおよびユーザーグループを管理するユーザーには, User Management 権限が必要です。

機能ごとに必要なリソースグループ, ロールおよび権限を次の表に示します。すべてのロールで実行できる機能は記載していません。

機能	リソースグループ	ロールまたは権限
<b>運用を始める前の準備</b>		
E メール通知を設定する	All Resources	Admin
E メール通知の設定を参照する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
警告バナーを設定する	-	User Management
管理対象サーバと SSL 通信するよう設定する	All Resources	Admin
管理対象サーバとの SSL 通信の設定を参照する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
SNMP トラップ受信を設定する	All Resources	Admin
アラート発生時に実行するコマンドを設定する	All Resources	Admin
JP1/IM へのアラート通知を設定する※1	All Resources	Admin
JP1/IM へのアラート通知設定を参照する※1	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
性能情報のしきい値を設定する	All Resources	Admin

機能	リソースグループ	ロールまたは権限
Device Manager との接続を設定する	All Resources	Admin
<b>管理対象の登録</b>		
リソースを探索する	All Resources	Admin
リソースを管理対象にする, または 管理対象から外す	All Resources	Admin
ブレードサーバを論理分割の対象に追加, または 対象から削除する	All Resources	Admin
リソース情報を削除する	All Resources	Admin
論理分割を設定する	All Resources	Admin, Modify
LPAR を作成または設定変更する	All Resources	Admin, Modify
リソースの認証情報を登録する	All Resources	Admin
<b>管理対象へのアクセス制御の設定</b>		
ユーザーを管理する	-	User Management
外部認可ユーザーの情報を参照, または Compute Systems Manager から外部認可ユーザーの アカウント情報を削除する	-	User Management
リソースグループを管理する	All Resources	Admin
ユーザーグループを管理する	-	User Management
ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当 てる	All Resources	Admin かつ User Management
<b>管理対象の運用</b>		
ホストに BMC を設定する	All Resources	Admin, Modify
管理対象の電源を操作する	All Resources または ユーザー定義のリソースグ ループ	Admin, Modify
電源管理のタイムアウトを設定する	All Resources	Admin
N+M コールドスタンバイグループを設定する	All Resources	Admin
N+M コールドスタンバイグループを編集または削除す る	All Resources	Admin
N+M コールドスタンバイを運用するために操作する	All Resources	Admin, Modify
タスクのスケジュールを変更する※2	All Resources または ユーザー定義のリソースグ ループ	Admin, Modify
タスクを中止, 履歴に移動, または削除する※2	All Resources または ユーザー定義のリソースグ ループ	Admin, Modify
タスクを参照する※3	All Resources または ユーザー定義のリソースグ ループ	Admin, Modify
Web コンソールおよび Web リモート KVM で管理対象 を操作する	All Resources または ユーザー定義のリソースグ ループ	Admin, Modify
LPAR に USB をアタッチする	All Resources	Admin, Modify
LPAR から USB をデタッチする	All Resources	Admin, Modify
USB 自動アタッチ設定を変更する	All Resources	Admin, Modify
VMM との接続を設定する	All Resources	Admin, Modify
VMM と連携して仮想リソースを操作する	All Resources または	Admin, Modify

機能	リソースグループ	ロールまたは権限
	ユーザー定義のリソースグループ	
デプロイメントマネージャーを設定する※1	All Resources	Admin
管理対象リソースをデプロイメントマネージャーに追加, または デプロイメントマネージャーから削除する※1	All Resources	Admin
イメージファイルを管理する※1	All Resources	Admin
デプロイテンプレートを設定する※1	All Resources	Admin
デプロイメントマネージャーで, 管理対象リソースのディスクに対して次の操作をする※1 ・ バックアップ ・ リストア ・ スナップショットの取得 ・ ディスク構成のチェック	All Resources	Admin, Modify
マスターイメージをデプロイする※1	All Resources	Admin, Modify
<b>管理対象の監視</b>		
電力キャッピングを設定する	All Resources	Admin, Modify
管理対象の情報を更新する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin, Modify
管理対象の情報を自動更新する間隔を設定する	All Resources	Admin
性能情報の種類と対象ホストを登録する	All Resources	Admin
電力情報の種類と対象シャーシまたは対象サーバを登録する	All Resources	Admin
ホストの性能情報を更新する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin, Modify
シャーシまたはサーバの電力情報を更新する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin, Modify
論理グループを作成, 編集, および削除する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin, Modify, View※4
アラートの詳細画面で, アラートの状態を変更したり, メッセージを送信したりする	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin, Modify
アラートに担当者を割り当てる	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
アラートを削除する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
アラートの保持件数を変更する	All Resources	Admin
アラートの保持件数を参照する	All Resources または ユーザー定義のリソースグループ	Admin
<b>管理対象の保守</b>		
ランプを操作する	All Resources	Admin, Modify
マイグレーション WWPN の自動登録を有効にする	All Resources	Admin

機能	リソースグループ	ロールまたは権限
LPAR をマイグレーションする	All Resources	Admin, Modify
マイグレーションの失敗を復旧する	All Resources	Admin, Modify
コンカレントメンテナンスマイグレーションの待ち時間を変更する	All Resources	Admin
ファームウェアを更新する	All Resources	Admin

(凡例)

- : 依存しません。

注※1

この機能は、管理サーバの OS が Windows の場合に利用できます。

注※2

All Resources に対して Admin ロールが割り当てられているユーザーグループに属するユーザーは、すべてのタスクを操作できます。

その他のユーザーは、自分が実行したタスクだけ操作できます。

注※3

All Resources が割り当てられているユーザーグループに属するユーザーは、すべてのタスクの詳細を参照できます。

その他のユーザーは、自分が実行したタスクだけ詳細を参照できます。

注※4

View ロールが割り当てられているユーザーグループに属するユーザーは、プライベート論理グループに限り、作成、編集および削除できます。

#### 関連項目

- 6.1 グループによる管理対象のアクセス制御とは
- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.2 ロールの種類
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

## 6.4.4 ユーザーグループを作成する

ユーザーを登録するためのユーザーグループを作成します。1 人のユーザーを、複数のユーザーグループに登録できます。

#### 事前に完了しておく操作

- ユーザーアカウントの作成

ユーザーグループを作成する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [ユーザーグループ] タブで [ユーザーグループ作成] ボタンをクリックします。
3. 必要な項目を設定します。

[ユーザーグループ] タブのユーザーグループの一覧で、作成したユーザーグループを確認できません。

#### 関連項目

- 6.2.2 ユーザーアカウントを作成する
- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.2 ロールの種類
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

### 6.4.5 ユーザーグループを編集する

作成済みのユーザーグループに、ユーザーを追加したり削除したりします。

ユーザーグループを編集する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [ユーザーグループ] タブで対象のユーザーグループを選択して [ユーザーグループ編集] ボタンをクリックします。
3. 必要な項目を設定します。

[ユーザーグループ] タブのユーザーグループの一覧で、ユーザーグループ名のリンクをクリックすると、編集した内容が反映されたことを確認できます。

#### 関連項目

- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.4 ユーザーグループを作成する
- 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

### 6.4.6 ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる

ユーザーグループを選択し、リソースグループとロールを割り当てます。1つのリソースグループを、複数のユーザーグループに割り当てられます。

#### 事前に完了しておく操作

- リソースグループの作成
- ユーザーグループの作成

ユーザーグループにリソースグループとロールを割り当てる手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [ユーザーグループ] タブで対象のユーザーグループ名のリンクをクリックします。
3. [リソースグループ] タブを選択し、[リソースグループ追加] ボタンをクリックします。
4. 必要な項目を設定します。

[リソースグループ] タブのリソースグループの一覧で、設定したリソースグループおよびロールの情報を確認できます。



#### 重要

- ユーザーのロールを変更した場合でも、そのユーザーのログイン中は、変更前のロールが保持されます。変更を適用するためには、そのユーザーがいったんログアウトし、再ログインする必要があります。
- ユーザーのロールを変更した場合、そのユーザーが登録していたタスクは権限不足によって実行されないことがあります。

#### 関連項目

- 6.3.1 リソースグループとは
- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.2 ロールの種類
- 6.4.3 機能ごとに必要なリソースグループとロール
- 6.4.4 ユーザーグループを作成する

## 6.4.7 ユーザーが属するユーザーグループを変更する

特定のユーザーに割り当てられているリソースグループやロールを変更したい場合、そのユーザーが属するユーザーグループを変更します。

ユーザーが属するユーザーグループを変更する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [ユーザー] タブで対象のユーザーを 1 人選択し、[ユーザーグループ割り当て] ボタンをクリックします。
3. 必要な項目を設定します。

[ユーザー] タブのユーザーの一覧で、編集した内容が反映されたことを確認できます。

#### 関連項目

- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.4 ユーザーグループを作成する

## 6.4.8 ユーザーグループまたはユーザーの情報を CSV ファイルに出力する

設定されているユーザーグループまたはユーザーの情報を CSV ファイルに出力します。

ユーザーグループまたはユーザーの情報を CSV ファイルに出力する手順を次に示します。

1. [管理] タブで [ユーザーグループ] を選択します。
2. [ユーザーグループ] タブまたは [ユーザー] タブで、[CSV エクスポート] ボタンをクリックします。
3. [保存] ボタンをクリックし、CSV ファイルの保存先を指定します。

指定した保存先に CSV ファイルが出力されます。

#### 関連項目

- 6.2.2 ユーザーアカウントを作成する
- 6.4.1 ユーザーグループとは
- 6.4.4 ユーザーグループを作成する



# トラブルシューティング

この章では、管理クライアントの問題に関するトラブルシューティングについて説明します。

## □ 7.1 管理対象でのトラブルシューティング

## 7.1 管理対象でのトラブルシューティング

発生が予想される問題とその対処方法について説明します。

### 7.1.1 トラブルシューティングとは

Compute Systems Manager の運用中に問題が発生した場合、画面に表示される指示に従って問題を解決してください。

メッセージが表示されない場合や、表示された指示に従っても問題を解決できない場合は、システム管理者に連絡してください。

メッセージの詳細情報については、マニュアル「*Hitachi Command Suite Compute Systems Manager* メッセージ」を参照してください。

#### 関連項目

- 7.1.2 トラブルシューティング事例

### 7.1.2 トラブルシューティング事例

管理クライアントで発生するおそれのある問題と原因および対処を、次の表に示します。

問題	原因	対処方法
ログイン画面が表示されない。	管理サーバ上で Compute Systems Manager が起動していないか、起動処理中です。	しばらく待ってから、再度ログインしてください。しばらく待ってもログイン画面が表示されない場合は、システム管理者に連絡してください。
正しいユーザー ID とパスワードを入力してもログインできない。	ユーザーアカウントがロックされています。	User Management 権限を持つユーザーに、アカウントのロック解除を依頼してください。 User Management 権限を持つユーザーのアカウントがロックされた場合、User Management 権限を持つほかのユーザーに依頼してください。 管理サーバを使用すると、ユーザー自身がアカウントのロックを解除できるようになります。 管理サーバ上のアカウントのロックを解除する方法については、マニュアル「 <i>Hitachi Command Suite Compute Systems Manager</i> 導入・設定ガイド」を参照してください。
タスクがエラー終了する。	管理サーバのデータベースが閉塞されています。	システム管理者に連絡して、データベースの回復を依頼してください。 データベースが回復したあと、タスクを再度実行してください。
ホストの更新または電源操作に失敗する。	<ul style="list-style-type: none"><li>管理対象ホストのマザーボードが交換されたため、ホストが Compute Systems Manager によって認識されません。</li><li>IP アドレスを別のホストに割り当てたため、割り当て先のホストが Compute Systems Manager に認識されません。</li></ul>	ホストを再度探索してください。 [リソース探索] 画面の [詳細設定] を展開して [探索対象条件] を [すべての IP アドレス] に変更し、ホストを探索してください。

問題	原因	対処方法
ブレードサーバが更新されない。	Compute Systems Manager の停止中にブレードが追加、交換、移動、または廃棄されました。このため、ブレードサーバが Compute Systems Manager に認識されません。	追加、交換、移動、または廃棄されたブレードを含むシャーシの情報を更新してください。 ブレードが交換または移動された場合、スケジュールを指定したタスクはキャンセルされます。スケジュールを指定したタスクを継続して実行する場合、それらのタスクを再登録します。
N+M コールドスタンバイの構成で、切り替えに失敗する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>通信エラーが発生しています。</li> <li>ブレードが切り替えに必要な条件を満たしていません。</li> </ul>	<p>次の操作を実施してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>失敗の原因を是正します。 是正できない場合は、システム管理者に連絡してください。</li> <li>切り替えが実行されなかった現用ブレードと予備ブレードを初期状態に戻してください。 現用ブレードと予備ブレードは、初期状態に戻されると、切り替えに利用できるようになります。</li> <li>現用ブレードから予備ブレードへの切り替えを手動で実行してください。 エラーが発生した現用ブレードで稼働していたホストは、予備ブレードで運用が再開されます。</li> </ol>
Hyper-V が管理対象にならない。	Hyper-V がインストールされているホストが、すでに Windows ホストとして探索されています。	[リソース探索] 画面の [詳細設定] を展開して [探索対象条件] を [すべての IP アドレス] に変更し、再度探索してください。
LPAR がデプロイメントマネージャーの管理対象リソースとして参照できない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Compute Systems Manager 以外の製品を使用して LPAR が削除されています。</li> <li>Compute Systems Manager 以外の製品を使用して LPAR がマイグレーションされています。</li> <li>参照できなくなった LPAR があるブレードサーバの、論理分割の設定が無効に切り替えられています。</li> </ul>	<p>削除またはマイグレーションされたため、参照できなくなった LPAR は、デプロイメントマネージャーの管理対象リソースから削除してください。LPAR をデプロイメントマネージャーで操作したい場合は、デプロイメントマネージャーの管理対象リソースとして追加し直してください。</p> <p>論理分割の設定が無効に切り替えられた場合は、有効に設定し直してください。</p>

#### 関連項目

- 4.3.3 N+M コールドスタンバイを設定する
- 4.3.11 現用ブレードを予備ブレードに手動で切り替える
- 4.3.12 切り替えに失敗したブレードの状態を元に戻す
- 5.2.22 シャーシの情報を更新する
- 6.2.1 ユーザー管理とは
- 7.1.1 トラブルシューティングとは



## このマニュアルの参考情報

ここでは、このマニュアルを読むに当たっての参考情報について説明します。

- [A.1 関連マニュアル](#)
- [A.2 このマニュアルでの表記](#)
- [A.3 英略語](#)
- [A.4 KB（キロバイト）などの単位表記について](#)
- [A.5 ディレクトリとフォルダの表記について](#)

## A.1 関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- *Hitachi Command Suite Compute Systems Manager 導入・設定ガイド* (3021-9-097)
- *Hitachi Command Suite Compute Systems Manager CLI リファレンスガイド* (3021-9-099)
- *Hitachi Command Suite Compute Systems Manager メッセージ* (3021-9-100)
- *Hitachi Command Suite Compute Systems Manager REST API リファレンスガイド* (3021-9-101)
- *Hitachi Command Suite ユーザーズガイド* (3021-9-003)
- *Hitachi Command Suite メッセージ* (3021-9-011)

## A.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名を次のように表記しています。

表記	製品名
Device Manager	Hitachi Device Manager
Google Chrome	Chrome for Work
JP1/IM	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"><li>• JP1/Integrated Management - Manager</li><li>• JP1/Integrated Management - View</li></ul>
JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
Linux	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Oracle Enterprise Linux®</li><li>• Oracle Linux®</li><li>• Red Hat Enterprise Linux®</li><li>• SUSE Linux® Enterprise Server</li></ul>
Oracle Linux	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Oracle Enterprise Linux®</li><li>• Oracle Linux®</li></ul>
VMware ESXi	VMware vSphere® ESXi™

## A.3 英略語

このマニュアルで使用する英略語を次の表に示します。

英略語	英字での表記
BMC	Baseboard Management Controller
CLI	Command Line Interface
CSV	Comma-Separated Values
DDE	Dynamic Data Exchange
FC	Fibre Channel
GUI	Graphical User Interface
I/O	Input/Output
IPMI	Intelligent Platform Management Interface

英略語	英字での表記
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol
MIB	Management Information Base
NFS	Network File System
NIC	Network Interface Card
OID	Object Identifier
PCI	Peripheral Component Interconnect
PXE	Preboot eXecution Environment
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
SSH	Secure SHell
SSL	Secure Sockets Layer
WinRM	Windows Remote Management
WMI	Windows Management Instrumentation
WoL	Wake-on-Lan
WWN	World Wide Name
WWPN	World Wide Port Name

## A.4 KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ  $1,024$  バイト、 $1,024^2$  バイト、 $1,024^3$  バイト、 $1,024^4$  バイトです。

## A.5 ディレクトリとフォルダの表記について

このマニュアルでは、Linux のディレクトリと Windows のフォルダを総称して「ディレクトリ」と表記しています。Windows 環境では、「ディレクトリ」を「フォルダ」に置き換えてお読みください。





# 用語解説

Compute Systems Manager を使用するために理解しておきたい用語の意味について解説します。

## (英字)

### Hitachi Command Suite 共通コンポーネント

Hitachi Command Suite 製品で共通する機能を提供するコンポーネントです。ログイン、Web サービスなどの機能を提供します。

### HVM (Hitachi Virtualization Manager)

論理分割の機能で、LPAR を管理するブレードサーバ上のコンポーネントです。

### LID (Location IDentifier lamp)

シャーシや各モジュールを識別するためのランプです。Compute Systems Manager を使用して、ブレードまたはシャーシ上の LID を遠隔制御することで、データセンター内で管理対象リソースを特定しやすくします。

### LPAR (Logical PARtition)

論理分割の機能を使用している場合に、それぞれに独立したサーバ環境を作成して利用できる論理区画です。

### N+M コールドスタンバイ

障害に備えて、予備ブレードを電源オフ状態で待機させておくことです。稼働中の現用ブレードで障害が発生した場合、自動的に予備ブレードに切り替わります。

### VMM (Virtual Machine Manager)

ハイパーバイザーと関連する仮想マシンを管理するソフトウェアです（基本的な概念については、仮想マシンを参照してください）。複数のハイパーバイザーとそのハイパーバイザー上で起動しているすべての仮想マシンを管理対象にできます。VMM を使用して、仮想マシンの作成、仮想マシンの構成の変更、異なるハイパーバイザーへの仮想マシンの移動ができます。

### Web コンソール

日立製のサーバに付属しているソフトウェアです。シャーシやサーバのハードウェア情報を参照したり、遠隔操作したりできます。

### Web リモート KVM (Keyboard, Video and Mouse)

日立製のサーバに付属しているソフトウェアです。ホスト、サーバ、または LPAR を遠隔操作できます。

## (カ行)

### 外部認可ユーザー

外部認可サーバと連携する場合に、Compute Systems Manager に登録した認可グループに属するユーザーです。

### 仮想マシン (Virtual Machine)

コンピュータ内の独立したパーティションで、1つまたは複数のアプリケーションを実行している OS のインスタンスです。仮想マシンを使用すると、同一のコンピュータ上で複数の OS を同時に実行できるようになります。

### 管理クライアント

GUI または CLI クライアントの操作に使用するコンピュータです。

### 管理サーバ

Compute Systems Manager をインストールしたサーバです。管理対象リソースを一元管理します。

### 管理対象リソース

ホストや日立製のサーバなど、Compute Systems Manager で管理する対象となるリソースです。管理対象となる日立製のサーバは、ブレードサーバおよびラックマウントサーバです。

### 現用ブレード

N+M コールドスタンバイ機能を使用している場合、障害が発生したときに、予備ブレードと切り替わるブレードです。

## (サ行)

### 実行系ノード

クラスタ運用しているシステムで、実際に稼働しているホストです。

### 性能プロファイル

ユーザー定義による一連の性能情報とデータ取得間隔の設定です。管理対象ホストの性能情報の取得や分析に使用します。

## (タ行)

### 待機系ノード

クラスタ運用しているシステムで、障害が発生した場合に、実行系ノードで使用していたシステムリソースを引き継げるように待機しているホストです。

### 探索

Compute Systems Manager で管理対象となるリソースを発見する操作です。

### デプロイメントマネージャー

複数の管理対象リソースのディスクデータをイメージファイルとしてバックアップしたり、リストアしたりできる機能です。また、バックアップしたイメージファイルを使用して、管理対象リソースの環境をほかの管理対象リソースに複製もできます。

### 電力プロファイル

ユーザー定義による一連の電力情報とデータ取得間隔の設定です。シャーシの電力消費量の取得や分析に使用します。

## (ハ行)

### ハイパーバイザー

1 台の物理ホストコンピュータ上で複数のゲスト OS（仮想マシン）を同時に起動するためのソフトウェアです。各 OS は独立して起動しますが、ハイパーバイザーがホストプロセッサとリソースを制御します。

## (マ行)

### マネジメントモジュール

シャーシにインストールされたコンポーネントで、ブレードやそのほかのさまざまな共有電子部品を制御します。

## (ヤ行)

### ユーザーグループ

ユーザーアカウントをグルーピングしたものです。外部認可サーバと連携する場合は、認可グループをユーザーグループとしても利用できます。ユーザーグループにリソースグループおよびロールを割り当てることで、管理対象に対するアクセスを制御できます。

### 予備ブレード

N+M コールドスタンバイ機能を使用している場合、障害が発生した現用ブレードと切り替わるまで、電源オフの状態で待機するブレードです。

## (ウ行)

### リソースグループ

管理対象リソースをグルーピングしたものです。

### ロール

ユーザーグループ内のユーザーが、リソースグループ内のリソースに対して持つ操作権限です。

### 論理グループ

管理対象リソースをユーザー定義によってグルーピングしたものです。

### 論理分割

日立サーバ論理分割機構を使用して、1 台または複数台のブレードで構成されているブレードサーバを論理的に分割し、それぞれに独立したサーバ環境を作成して利用できる機能です。



# 索引

## B

### BMC

電源管理 74

## C

### CLI

ダウンロード [概要] 44

### Compute Systems Manager

概要 20

ログアウト 43

ログイン 43

### Compute Systems Manager の運用

作業フロー 21

### CSV ファイル

管理対象リソースの情報 155

構成情報の出力 155

サーバの電力情報 157

シャーシの電力情報 156

ホストの性能情報 156

ユーザーグループ情報 184

ユーザー情報 184

## D

### Device Manager

接続 46

## E

### E メール

設定 [通知] 44

### E メール通知

アラートレベルの設定 131

設定 [概要] 43

## F

### Firefox

設定 40

## G

### Google Chrome

設定 41

## H

### HVM

構成情報の参照 63

再起動 82

シャットダウン 81

### HVM 上の LPAR

構成の参照 141

## I

### Internet Explorer

設定 39

## L

### LPAR

USB アタッチ [概要] 114

USB をアタッチ 115

USB をデタッチ 115

管理対象 [除外] 59

管理対象 [追加] 57

起動 82

構成情報の参照 144

構成や関連の参照 141

再起動 83

作成 63

作成〔一括〕 65  
情報の更新 147  
設定の変更 64  
停止 83  
ホストの作成 67  
ホストの作成〔確認事項〕 67  
ホストの作成手順〔概要〕 66  
LPAR のマイグレーション  
概要 101  
確認事項 102  
失敗の復旧 104  
手順〔起動状態〕 103  
手順〔停止状態〕 103  
マイグレーション WWPN の自動登録 102

## N

N+M コールドスタンバイ  
概要 93  
確認事項 94  
現用ブレードから予備ブレードに切り替え 100  
現用ブレードの状態確認 98  
初期状態 100  
設定 95  
テストの実施 98  
ブレードの削除 97  
ブレードの追加 96  
予備ブレードから現用ブレードに切り戻し 99  
予備ブレードから現用ブレードへ変更 99  
予備ブレードの状態確認 98  
予備ブレードの診断 97  
N+M コールドスタンバイの設定と運用  
作業フロー 27

## S

SNMP トラップ  
アラート設定 129  
アラートとの関連づけ 130  
確認〔MIB ファイルで定義されている SNMP トラップ〕 130  
登録〔MIB ファイルで定義されていない SNMP トラップ〕 131  
SSL 通信  
設定 46  
Sysprep  
デプロイメントマネージャー 123

## U

USB アタッチ 114  
USB 自動アタッチ設定

変更 62  
User Management 168

## W

Web ブラウザー  
設定 39

## あ

アカウント作成  
ユーザー管理 168  
アカウント情報の削除  
外部認可ユーザー 174  
アカウントロックの設定  
ユーザー管理 175  
アプリケーションエリア 34  
アラート  
アラート情報の通知 136  
一覧の参照 163  
確認〔対処手順〕 161  
削除 163  
しきい値の指定 137  
実行するスクリプトコマンド〔Linux の条件〕 134  
実行するスクリプトコマンド〔Windows の条件〕 132  
実行するスクリプトコマンド〔概要〕 132  
実行するスクリプトコマンド〔設定〕 135  
別のユーザーに対処を依頼する 162  
保持件数の変更 137  
ユーザーへの割り当て 162  
アラート設定  
E メール通知のレベル 131  
SNMP トラップ 130  
SNMP トラップの受信 129  
SNMP トラップの受信を有効にする 129  
概要 128  
アラートへの対処  
概要 160  
確認事項 161

## い

イベント自動処理 132  
イメージファイル 121

## う

運用を始める前の準備  
作業フロー 22

## か

### 外部認可ユーザー

- Compute Systems Manager の利用 [概要] 171
- アカウント情報の削除 174
- プロファイルの変更 173

### 概要

- グループによる管理対象のアクセス制御 166
- 実行するスクリプトコマンド 132
- ユーザー管理 167

### 拡張設定の変更

- 論理分割 61

### 確認

- タスクの状態 111
- タスクの状態 [グローバルモニタリングエリア] 140
- 電源管理 73
- ライセンスの状態 42

### 仮想マシン

- 確認事項 [探索] 52
- 管理対象 [除外] 58
- 管理対象 [追加] 56
- 強制電源 OFF 79
- 構成や関連の参照 141
- 情報の更新 146
- 設定情報の参照 142
- 電源 ON 77
- リセット 78
- リソース情報 [データベースからの削除] 69

### 仮想リソースの操作

- VMM との接続 116
- VMM と連携 116

### 管理クライアントのウィンドウ構成

- アプリケーションエリア 34
- グローバルタスクバーエリア 33
- グローバルタブエリア 33
- グローバルモニタリングエリア 34
- 検索ボックス 33
- ナビゲーションエリア 33

### 管理対象

- LPAR [除外] 59
- LPAR [追加] 57
- 仮想マシン [除外] 58
- 仮想マシン [追加] 56
- 自動更新の間隔 148
- シャーシ [除外] 59
- シャーシ [追加] 57
- デプロイメントマネージャー [削除] 119
- デプロイメントマネージャー [追加] 118
- 認証情報 [概要] 51
- ハイパーバイザー [除外] 58
- ハイパーバイザー [追加] 56
- ブレードサーバ [除外] 59
- ブレードサーバ [追加] 57

- ホスト [除外] 58
- ホスト [追加] 56
- ラックマウントサーバ [除外] 60
- ラックマウントサーバ [追加] 58
- リソースの探索 54

### 管理対象 [アクセス制御の設定]

- 作業フロー 25

### 管理対象の監視

- 作業フロー 29

### 管理対象の登録

- 作業フロー 23

### 管理対象の保守

- 機能 31

### 管理対象リソース

- CSV ファイル出力 [概要] 155
- CSV ファイル出力 [手順] 155
- 環境の複製 [デプロイメントマネージャー] 121
- サマリー情報の参照 138
- 種別 50
- 情報更新 [概要] 145
- 性能情報の分析 148
- ダッシュボード 139
- ディスク構成のチェック 119
- ディスクデータのバックアップ 120
- ディスクデータのリストア 120
- 電力情報の分析 148

### 関連ソフトウェア

- Web コンソール 114
- Web リモート KVM 114
- 概要 113

## き

### 機能

- 管理対象の保守 31
- 機能ごとに必要なリソースグループ 179
- 機能ごとに必要なロール 179

## く

- グローバルタスクバーエリア 33
- グローバルタブエリア 33
- グローバルモニタリングエリア 34

## け

### 警告バナー

- 設定 [概要] 45
- メッセージの設定 45

### 権限

- ユーザー管理 [User Management] 168
- 検索ボックス 33

## こ

コンカレントメンテナンスマイグレーション  
待ち時間の変更 105

## さ

サーバ

強制電源 OFF 81  
詳細情報の参照 143  
情報の更新 147  
電源 ON 79  
リセット 80

サーバの電力情報

CSV ファイル出力 157

作業フロー

Compute Systems Manager の運用 21  
N+M コールドスタンバイの設定と運用 27  
アクセス制御の設定 25  
運用を始める前の準備 22  
管理対象の監視 29  
管理対象の登録 23  
デプロイメントマネージャーの設定・運用 28  
電源管理 26

削除

認可グループ 173

作成

ユーザーグループ 182  
リソースグループ 176  
論理グループ 159

サマリー情報 138

参照

LPAR の構成情報 144  
仮想マシンの設定情報 142  
サーバの詳細情報 143  
シャーシの設定情報 143  
ストレージシステムの一覧 144  
ハイパーバイザーの情報 142  
ホストの情報 142  
論理グループ 160

## し

システムの構成要素 20

実行するスクリプトコマンド

アラート〔設定〕 135

シャーシ

確認事項〔探索〕 53  
管理対象〔除外〕 59  
管理対象〔追加〕 57  
情報の更新 146  
設定情報の参照 143  
ファームウェアの更新 125

リソース情報〔データベースからの削除〕 69

シャーシの電力情報

CSV ファイル出力 156

条件

実行するスクリプトコマンド〔Linux〕 134

実行するスクリプトコマンド〔Windows〕 132

情報の更新

LPAR 147  
仮想マシン 146  
サーバ 147  
シャーシ 146  
ハイパーバイザー 146  
ホスト 145

初期設定 38

## す

スケジュール設定例

サーバ 86  
電力キャッピング 108  
ホスト 84

ストレージシステム

一覧の参照 144

スナップショット

デプロイメントマネージャー 121

スナップショットの取得

デプロイメントマネージャー 123

## せ

性能情報

削除 154  
取得 149  
ホスト〔登録〕 150  
ホスト〔分析〕 151

設定

Device Manager との接続 46  
E メール通知 44  
SSL 通信 46  
Web ブラウザー 39  
警告バナー〔概要〕 45  
警告バナーのメッセージ 45  
実行するスクリプトコマンド 135  
自動更新の間隔 148  
デプロイメントマネージャー 118  
電源管理のタイムアウト時間 75  
ブラウザ〔Firefox〕 40  
ブラウザ〔Google Chrome〕 41  
ブラウザ〔Internet Explorer〕 39  
論理分割 61



## た

ダウンロード	
CLI	45
タスク	
エラー終了	112
概要	110
キャンセル	112
削除	113
集計期間の設定	140
状態の確認	111
状態の確認 [グローバルモニタリングエリア]	140
スケジュールの変更	112
ダッシュボード	
カスタマイズ	139
監視	139
性能レポートのカスタマイズ	140

## て

デプロイテンプレート	
デプロイメントマネージャー	122
デプロイテンプレートの設定	
デプロイメントマネージャー	124
デプロイメントマネージャー	
イメージファイルの管理	121
概要	116
確認事項	117
環境の複製	121
管理対象リソースの削除	119
管理対象リソースの追加	118
固有情報削除ツール	123
スナップショット	121
スナップショットの取得	123
設定	118
ディスク構成をチェック	119
ディスクデータのバックアップ	120
ディスクデータのリストア	120
デプロイテンプレート	122
デプロイテンプレートの設定	124
マスターイメージ	122
マスターイメージのデプロイ	124
デプロイメントマネージャーの設定・運用	
作業フロー	28
電源管理	
BMC の設定	74
HVM の再起動	82
HVM のシャットダウン	81
LPAR の起動	82
LPAR の再起動	83
LPAR の停止	83
概要	72
確認事項	73

仮想マシン [ON]	77
仮想マシン [強制的に OFF]	79
仮想マシン [リセット]	78
サーバ [ON]	79
サーバ [強制的に OFF]	81
サーバ [リセット]	80
作業フロー	26
スケジュール設定例 [サーバ]	86
スケジュール設定例 [ホスト]	84
タイムアウトの時間設定	75
ホスト [ON]	75
ホスト [強制的に OFF]	76
ホスト [シャットダウン]	76
ホスト [リブート]	77

### 電力キャッピング

概要	105
シャーシ [無効]	106
シャーシ [有効]	106
スケジュール設定例	108
ラックマウントサーバ [無効]	108
ラックマウントサーバ [有効]	107

### 電力情報

サーバ [登録]	151
削除	154
シャーシ [登録]	151
シャーシ [分析]	152
取得	150
ブレードサーバ [分析]	153
ラックマウントサーバ [分析]	153

## と

### 登録

認可グループ	172
ライセンス	42
リソースの認証情報	54
トラブルシューティング	
概要	186
事例	186

## な

ナビゲーションエリア	33
------------	----

## に

認可グループ	
削除	173
登録	172
認証情報	
管理対象	51
認証方式の変更	

## は

### ハイパーバイザー

- 確認事項 [探索] 52
- 管理対象 [除外] 58
- 管理対象 [追加] 56
- 情報の更新 146
- 設定情報の参照 142
- リソース情報 [データベースからの削除] 69
- リソースの構成や関連の参照 141

### パスワードの変更

- ユーザー管理 [自分] 170
- ユーザー管理 [自分以外] 169

### パスワードポリシーの設定

- ユーザー管理 175

## ふ

### ファームウェアの更新

- 概要 125
- シャーシ 125
- ブレードサーバ 126

### ブレードサーバ

- 確認事項 [探索] 53
- 管理対象 [除外] 59
- 管理対象 [追加] 57
- ファームウェアの更新 126
- リソース情報 [データベースからの削除] 69
- 論理分割 [削除] 59
- 論理分割 [追加] 57

### プロファイルの変更

- 外部認可ユーザー 173

### プロファイルの編集

- ユーザー管理 [自分] 169
- ユーザー管理 [ほかのユーザー] 169

## へ

### ヘルプ 35

### 変更

- ユーザーグループ 184

### 編集

- ユーザーグループ 183
- リソースグループ 177
- 論理グループ 159

## ほ

### 保持件数の変更

### ホスト

- 確認事項 [探索] 51
- 管理対象 [除外] 58
- 管理対象 [追加] 56
- 強制電源 OFF 76
- シャットダウン 76
- 詳細情報の参照 142
- 情報の更新 145
- 電源 ON 75
- リソース情報 [データベースからの削除] 68
- リポート 77
- ホストの性能情報
  - CSV ファイル出力 156

## ま

### マイグレーション WWPN の自動登録

- LPAR のマイグレーション 102

### マスターイメージ

- デプロイメントマネージャー 122
- マスターイメージのデプロイ
  - デプロイメントマネージャー 124

## め

### メインウィンドウ 32

## ゆ

### ユーザーアカウントのロック

- ユーザー管理 170

### ユーザーアカウントのロック解除

- ユーザー管理 170

### ユーザー管理

- アカウント作成 168
- アカウントロックの設定 175
- 権限 [User Management] 168
- 認証方式の変更 171
- パスワードの変更 [自分] 170
- パスワードの変更 [自分以外] 169
- パスワードポリシーの設定 175
- プロファイルの編集 [自分] 169
- プロファイルの編集 [ほかのユーザー] 169
- ユーザーアカウントのロック 170
- ユーザーアカウントのロック解除 170

### ユーザーグループ

- 機能ごとに必要なリソースグループ 179
- 機能ごとに必要なロール 179
- 作成 182
- 変更 184
- 編集 183

リソースグループとロールの割り当て	183
ロールの種類	178
ユーザーグループ情報	
CSV ファイル出力	184
ユーザーグループの管理	
概要	177
ユーザー情報	
CSV ファイル出力	184

## ら

ライセンス	
管理〔概要〕	41
状態の確認	42
登録	42
ラックマウントサーバ	
確認事項〔探索〕	53
管理対象〔除外〕	60
管理対象〔追加〕	58
リソース情報〔データベースからの削除〕	70
ランブ	
サーバの特定	93
シャーシの特定	92
モジュールの特定	92
ランブ操作	92

## り

リソース	
管理対象	55
認証情報〔登録〕	54
リソースグループ	
作成	176
編集	177
リソースグループとロールの割り当て	183
リソースグループの管理	
概要	176
リソース情報〔データベースからの削除〕	68
仮想マシン	69
シャーシ	69
ハイパーバイザー	69
ブレードサーバ	69
ホスト	68
ラックマウントサーバ	70
リソースの構成	
HVM 上の LPAR	141
LPAR	141
仮想マシン	141
ハイパーバイザー	141
リソースの探索	50
仮想マシン	52
シャーシ	53

ハイパーバイザー	52
ブレードサーバ	53
ホスト	51
ラックマウントサーバ	53

## ろ

ロールの種類	
ユーザーグループ	178
論理グループ	
概要	157
作成	159
参照	160
編集	159
論理分割	
拡張設定の変更	61
設定	61
設定〔概要〕	60
ブレードサーバ〔削除〕	59
ブレードサーバ〔追加〕	57

